柏原市所在遺跡発掘調査概報

―原山・田辺・大県遺跡―

１９８４年度

１９８５年３月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市には多くの文化遺産があります。この文化遺産の１つである地中に眠る考古資料は、永年の苦節に堪えてきたもので、実際に私達の眼の前に出現してくる歴史の生き証人です。

この考古資料は、色々の動機によって発見されます。家屋の建築の時や土木工事、田畑の耕作時、あるいは自然発生的な洪水や崖崩れによる発見等色々有ります。柏原市の場合には、文化財行政の遅滞によって、古くから市民による遺物採集が顕著でありました。ここ数年は、大阪府教育委員会の協力により柏原市教育委員会による発掘調査も増加し、次第にそのような事もなくなりましたが、多くの市民が旧石器時代から中世に至る多くの考古資料を所有しているという事実を裏返しにすれば、柏原市にはそれだけ多くの遺跡が存在する事の証しでありましょう。

柏原市教育委員会は、これからの多くの文化遺産を大切にし、遺跡の保存を前提とした発掘調査の実施やその結果として現地説明会を催し、資料の収集、整理、公開を鋭意務めていきたいと考えています。それには、多くの市民の皆さんの御理解と御協力がなくてはならないものと考えています。今後ともよろしく、御援助御協力くださいますようお願い申し上げます。

最後に、発掘調査ならびに整理作業にあたって、多くの関係各位、特に学校法人、玉手山学園、株式会社、都市建築総合研究所からは協議以来一貫して御協力を頂いた事を記して感謝いたす次第です。

昭和59年３月

柏原市教育委員会

例　言

1．本書は、柏原市教育委員会が、昭和58年度に実施した学校法人、玉手山学園校舎新築工事、畑本富太郎氏の宅地造成工事、吉村源逸氏のマンション建築工事に伴う事前緊急発掘調査概要である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課北野　重を担当者として、原山遺跡、昭和58年８月23日～昭和58年10月６日、田辺遺跡、昭和59年５月７日～５月12日、大県遺跡、昭和58年10月12日～10月13日。

3．調査の実施及び本書の作製にあたっては、多くの方々に参加及び協力を頂いた。記して謝意を表します。

柏原市教育委員会社会教育課課長石田　博、同課指導主事竹下　賢、同課花田勝広、安村俊史、桑野一幸

（調査員）広岡　勉、大塚淳子、松田光代

（調査補助員）井寓好彦、上条裕典、石田成年、山中　茂、佐藤　尚、清瀧健二、秋田大助、藤岡弘子

（作業員）麻栄三郎、朝田行雄、川端長三郎、山田貞一、分才春信、西岡武重、谷口鉄治奥野　清、道籏甚蔵、井上岩次郎、森口喜信、山本芳一、玉野正一、横関勢津子、吉居豊子村口ゆき子、飯村邦子、乃一敏恵、松成早苗

（事務）

4．実測中に表示した方位は磁北、標高はＴＰである。

5．本書の測図は調査員、調査補助員全員によるもので、製図、写真撮影、本文執筆は主として北野が行った。第７章第３節弥生土器については大塚があたった。

目　次

第１章　調査に至る経過……1
第２章　原山遺跡の概要……2
　第１節　原山遺跡の位置と環境……2
　第２節　歴史的環境……2
第３章　調査概要……5
　第１節　調査の概要……5
　第２節　古墳時代の遺構……7
　第３節　７・８世紀の遺構……9
第４章　遺物……18
　第１節　古墳時代の遺物……18
　第２節　７・８世紀の遺物……19
　第３節　その他の時期の遺物……23
第５章　まとめ……27
　第１節　古墳時代の遺構と遺物……29
第６章　田辺遺跡……31
　第１節　概要……31
　第２節　遺構……32
　第３節　遺物……34
　第４節　まとめ……36
第７章　大県遺跡……37
　第１節　概要……37
　第２節　遺構……38
　第３節　遺物……40
　第４節　まとめ……43

図１　柏原市位置図……2
図２　原山遺跡付近図……4
図３　基本層序と地区割り……5
図４　第４住居……8
図５　建物２……10
図６　掘方形状……12
図７　溝１出土遺物……18
図８　ピット42出土遺物……20

図9　井戸出土遺物・塼……21
図10　井戸出土遺物……22
図11　土坑1出土遺物……22
図12　土馬・ミニチュア土器、鞴羽口…24
図13　ピット35・42・81……26
図14　調査区位置図……31
図15　遺構図……32
図16　石器……34
図17　鍛冶関係遺物……35
図18　調査区位置図……37
図19　調査区平板図……38
図20　トレンチ南壁断面図……39
図21　縄文土器拓影……41

表1　ピット概要表……12
表2　ピット比較表……16
表3　建物ピット平均規模……17
表4　原山遺跡変遷表……28
表5　竪穴住居比較表……28
表6　建物比較表……28

図版1　平板図
図版2　遺構図　古墳時代・七・八世紀
図版3　古墳時代の遺構
図版4　建物一・六
図版5　建物三・四
図版6　建物五
図版7　各遺構
図版8　出土遺物一
図版9　出土遺物二
図版10　出土遺物三
図版11　田辺遺跡　遺構
図版12　田辺遺跡　出土遺物一
図版13　大県遺跡　出土遺物一
図版14　大県遺跡　出土遺物二
図版15　大県遺跡　出土遺物実測図拓影
図版16　原山遺跡　遺構
図版17　原山遺跡　遺構
図版18　原山遺跡　遺構
図版19　原山遺跡　遺構
図版20　原山遺跡　遺構
図版21　原山遺跡　遺構
図版22　原山遺跡　遺構
図版23　原山遺跡　遺構
図版24　原山遺跡　遺構
図版25　原山遺跡　遺構
図版26　原山遺跡　遺構
図版27　原山遺跡　遺構
図版28　原山遺跡　遺構
図版29　原山遺跡　調査風景
図版30　原山遺跡　現地説明会
図版31　原山遺跡　出土遺物
図版32　原山遺跡　出土遺物
図版33　原山遺跡　出土遺物
図版34　田辺遺跡　遺構
図版35　田辺遺跡　遺構
図版36　田辺遺跡　遺構
図版37　田辺遺跡　遺構
図版38　田辺遺跡　遺構
図版39　田辺遺跡　出土遺物
図版40　大県遺跡　出土遺物
図版41　大県遺跡　出土遺物

第１章　調査に至る経過

柏原市旭ヶ丘３丁目の地域には、昭和20年頃古代寺院の瓦が多量に出土し、主要伽藍配置と見なされる礎石の配列が見られた。この当時は、さほど注目されることなく経過したが、各地で古代寺院の発掘が顕著になり、また、市域が古代寺院の密集地であるというところから、埋蔵文化財に愛護を持つ人達の努力によって、現地踏査等による概略ながら調査された。しかしその後は、宅地造成によって多くの家屋の建築が進み、寺院周辺はほとんど宅地化してしまった。この古代寺院は、原山廃寺と呼ばれ、白鳳時代の古瓦が出土し、その軒先瓦は、考古学上基準資料となっている。しかしながら、遺跡については何ら明らかになっていない。

学校法人玉手山学園（理事長江端文行）は、旭ヶ丘３丁目1879―１（概算面積、900㎡）に新校舎建築を計画した。当地区は、原山廃寺の南東隣接地にあたり、柏原市史本編第２巻に同廃寺瓦窯の存在が予測されていた事から、柏原市教育委員会は、埋蔵文化財が破壊される恐れがあるため、学校法人玉手山学園及び株式会社都市建築総合研究所と協議をもった。その結果同地区内に試掘調査を実施する事になった。柏原市教育委員会社会教育課安村俊史が昭年58年７月25日試掘調査を実施した。この試掘調査によって、瓦窯の発見はされなかったものの、奈良時代の遺物を含むピット等の遺構を検出し、原山廃寺と関わる集落が存在する可能性が見い出された。この結果、再度協議を持ち、柏原市教育委員会社会教育課指導主事竹下　賢、同課北野　重、学校法人玉手山学園理事伏見了郎、株式会社都市建築総合研究所所長山本　久、同研究所諏訪勝次が出席し、遺跡の保存を前提とした発掘調査を実施する事に決定した。

調査によって、縄文時代から中世に至る遺物と古墳時代から中世に至る各種の遺構を検出しえたところから、計画通りの設計では遺跡保存上適切でないものであると認められた。柏原市教育委員会は学校法人玉手山学園に対し保存に努めるように指示し、協議を重ねた。当初計画は、隣接住宅に対する日照権問題及び校舎内の総合的配置計画に基づき、建築設計上基礎部分の大幅な変更に困難があると報告した。柏原市教育委員会はこの協議に臨み、一応同報告に対しやむを得ないと考え次の条件を付した。遺跡保存について留意し、遺構面に砂及び正土を被い主要基礎はやむを得ないけれど、基礎によって破壊されない部分については極力慎重工事を実施する事、また、当地区は古代寺院原山廃寺の寺域をも包含するもので、教育効果としてまた、一般公開をも原則とする遺跡案内板の設置するよう指示した。これらの協議を通じ、学校法人玉手山学園の関係者の方々の御理解のもとに、有形無形の多大な御援助、御協力を賜り次章に記す貴重な資料を得ました事、ここに明記して深甚の謝意を表したい。

第２章　原山遺跡の概要

第１節　原山遺跡の位置と環境

柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県との間に連なる生駒山地及び金剛山脈の麓にあたり、広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63kmを測る小都市である。大阪府下30市の内、面積は第19番目の 24.77㎢、人口は第25番目で65,000人（昭和58年10月現在）を擁している。行政区分は、奈良県と境を接する内陸地にあり、奈良県三郷町、王寺町、香芝町、大阪府八尾市、藤井寺市、羽曳野市が四周を取囲んでいる。交通は、府下の商業地帯と継ぐ近鉄大阪線や国鉄関西線の鉄道が市中央部を南北方向に走り、国道25、165、170号線と西名阪自動車道の高速道路等があり、府下の衛星都市と奈良や名古屋を結ぶ大きな役割を果している。

市内には、府南東部の金剛山脈西麓の各市町村、千早赤阪村、河南町、河内長野市、富田林市、太子町等の流れ出る水量と奈良県下からの水量を集めて市中心部で合流する石川、大和川の二大河川がある。

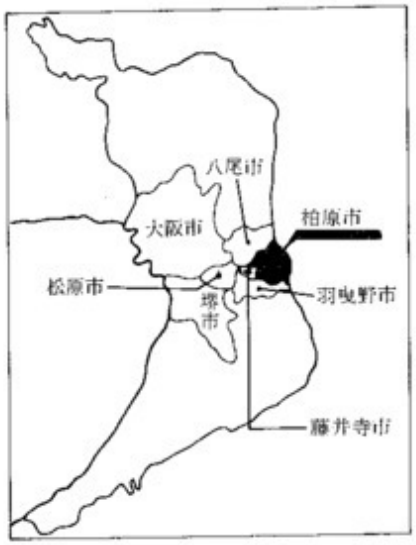
原山遺跡は、市南部の小丘陵上にある。大和川と石川より南側へ 1.2kmと東側へ 1.2kmの位置にあたり、玉手山丘陵の南東部、寺山鉢伏山山系から北へ派生した尾根上である。直ぐ東側には、二上山系の水を集めて流れる原川がある。原川は原山遺跡の東端にあたり北流して大和川に注ぎ込んでいる。その西端は近つ飛鳥駒ケ谷から流れる五十村川がある。丘陵は、この両小河川に狭まれた、標高30.0～50.0ｍを測る幅の狭い丘陵である。

第２節　歴史的環境

原山遺跡は、柏原市旭ケ丘３丁目一帯にわたって広がる奈良時代の古代寺院〝原山廃寺〟を中心とした集落遺跡である。これまで、発掘調査の例がなく、その実体については、原山廃寺の中心伽藍の礎石の一部検出と出土瓦によって弱干の考古学成果が得られているのみで、今後の調査が強く望まれる遺跡である。原山遺跡の位置と歴史的環境を通観していきたい。

旧石器時代から古墳時代

柏原市の埋蔵文化財についてみると、最近特に大開発が顕著になり、発掘調査も急増し、遺跡の破壊が激しい



図－１　柏原市位置図

反面調査成果として得られているものも多い。その１つとして多くの旧石器時代の石器が発見されるようになった。特に小丘陵先端部に多い。また、旧石器時代の石器出土地は、縄文時代の石器出土地と重復している。この事は、後期旧石器時代から縄文時代への移行が断絶なく続いていると言えよう。石川の対岸や大和川の北側にあたる集落遺跡では、多くの縄文時代の石器と土器が共伴して出土しているが、当地域では土器の出土が得られていない。

弥生時代は、玉手山遺跡、田辺遺跡、五十村遺跡、貝の脇遺跡が周辺に所在する。玉手山遺跡は、丘陵上に弥生時代後期の円形住居跡が発見され、多くの掘立柱穴や土器片及び銅鏃の出土があった。畿内銅鐸出土地の１つとして重視されている。古墳時代は、玉手山遺跡の丘陵上に前期の前方後円墳が多数築造され、この古墳群の時期と立地と規模等は考古学上の最重要の究明課題である。その後、古墳時代中期、後期の古墳の発見及び出土遺物の検出を得るようになった。特に、特殊な古墳形態として横穴古墳群がある。横穴古墳というのは、一般に墳丘を持たず、山の斜面や台地の縁辺部に洞穴を掘って墓地を造り、その部屋に死者を葬る古墳である。高井田横穴、安福寺横穴、玉手山東横穴古墳群がある。玉手山東横穴古墳群は、当遺跡に近く今後その関係を究明しなければならないだろう。

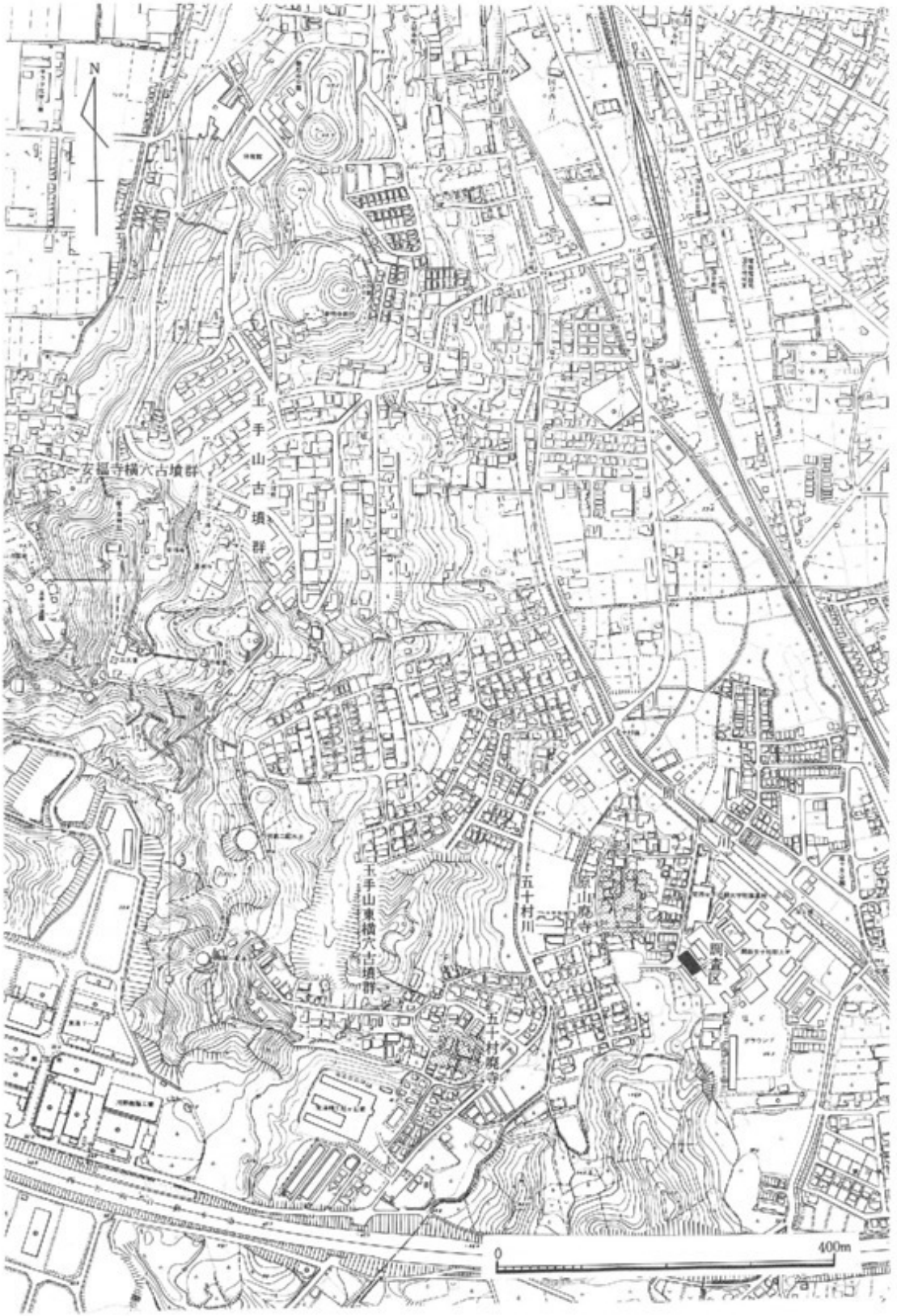
奈良時代から近世まで

古墳の築造が終ると、寺院の建立が始まる。柏原地域は、古代寺院の密集地であり、国分寺や国分尼寺を含めて奈良時代を前後する時代に建立された寺院は、17ヶ寺院を数える。当遺跡においても、原山廃寺がある。いまだ、その寺域さえわからない寺院も多く、学問的な研究よりもむしろ寺院の位置を明確にし保存を考慮する必要な遺跡とも云える。寺院の周辺には例外なく、その当時の集落が見られ、竜田越、東高野街道、業平街道、奈良街道、長尾街道等の旧街道が廃絶する事なく、その後の時代の流れに添い荒廃しながらも栄華盛衰を繰り返していく事がかい間みられる。

玉手山学園内には、大阪府史跡に指定されている立教館がある。もと国分中之町にあり、旧奈良街道に南面して建てられていました。江戸時代末期、文政13年(1830年)国分村で医業のかたわら向学の青少年に読書講義を始めた拓植常恩が開学した私塾で、拓植氏の師頼山陽も幾度か訪れています。

参考文献

柏原市史　本編Ⅰ　第２巻　昭和48年　　柏原市役所



図－2　原山遺跡付近図

第３章　調査概要

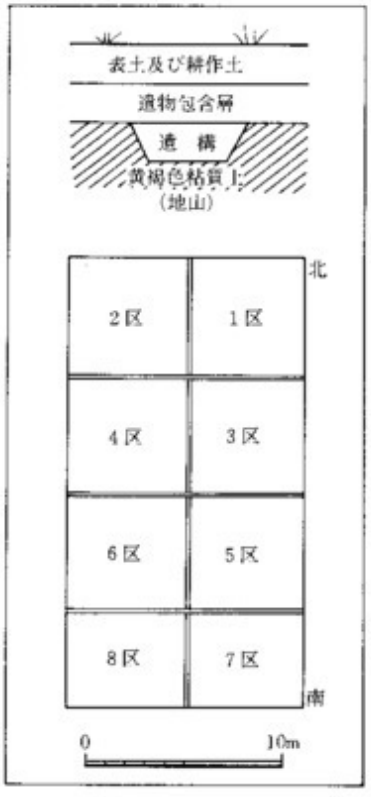
第１節　調査の概要

調査は、柏原市教育委員会が昭和58年８月23日から昭和58年10月６日までの期間、柏原市旭ヶ丘３丁目1879－１所在の原山遺跡において実施した。調査対象面積は約500㎡である。調査区の位置は、遺跡の東端を流れる原川と丘陵尾根との丁度中間点付近である。東向きのなだらかな斜面地で集落遺跡の立地として好適地の場所にあたる。

遺構は、３時期の遺構面を検出した。時期は、古墳時代中期、奈良時代を前後する時期と中世の遺構である。遺構の種類は、竪穴住居、掘立柱建物のピット、溝、土坑、土坑墓、井戸、炉跡、その他不明落ち込み等である。出土遺物は、上期３時期の遺物が中心を占めているが、それ以外の時期も含まれている。

遺跡の基本層序は３層に分かれる。上層は、地表面から50～80cmの厚さの新しい時期の盛土である。その下層は、10～20cmの遺物包含層である。最下層は地山である。遺構は遺物包含層除去後に３時期の遺構が調査区全域にわたり地山を掘削した同一面上に重複して検出された。出土遺物は、遺物包含層と各遺構の埋土中からである。上層の掘削は重機によって行った。遺物包含層は原則的に人力掘削を実施し、遺構の掘下げについては慎重を期した。以下調査の経過を簡単に記したい。

58.8.23　調査開始。表土を重機によって掘削する。
8.24　１・２区の遺物包含層掘削。
25　１～４区の遺構検出作業。溝、ピット検出。
26　遺物包含層から鉄滓、フイゴが出土する。
27　５世紀代の須恵器及び製塩土器が出土する。
29　最近まで使用していた井戸の深さを測る。約14m。
30　３～４区の遺物包含層掘削。
31　調査区内の割り付け測量。
9.1　測量続行，６区より製塩土器出土。
2　ほぼ全域の表土掘削を終了する。時期の新らしい遺構を掘削。



図―３　基本層序と地区割り

58.9. 3　全域の遺構概略図作製

5　水準点から調査区までレベル高の移動を行う。

6　調査区の境界に残した畦を取り除く。井戸１の上層出土遺物写真撮影。

7　調査区の割り付け杭を打ち込む。

8　遺構の全容を検出する。各遺構に白線を入れ全体写真を撮影する。遺構の平板実測を行う。井戸１の掘り下げ及び遺物の実測と写真撮影。ピットの掘り下げ。

9　遺構の掘り下げ続行。井戸１の断面図作製。

10　ピットの掘り下げ完了。

12　建物ピットの検出と掘り下げ。土器棺墓の掘削。写真撮影と実測。炉跡の検出。土壙１の掘り下げ。

13　竪穴住居の掘削を始める。

14　土壙１の掘削と断面実測。竪穴住居の掘り下げ続行。

16　土壙１を掘り上げる。遺構がほぼ掘り上がり写真撮影のため掃除を始める。第５、６住居は掘削が進むと溝である事が判明した。

17　調査区全景写真撮影及び各遺構別の写真撮影。調査区の実測のため１ｍごとに釘を打ち割り付けを行う。

19　縮尺20分の１の平面実測を開始する。

20　降雨のため作業中止。

21　水溜りの排水。平面実測続行。南側一部拡張する。

22　降雨のため作業中止。

24　建物１・２は、全容が不明のため、調査区の北側及び北西側を拡張する。

26　降雨のため作業中止。

27　降雨のため作業中止。

28　降雨のため作業中止。

29　全体掃除。ピットの断面実測。

30　建物ピットの掘方の半分を掘削する。調査区全景のため全体掃除。

10.1　建物ピットの断面実測及び写真撮影。掘方残部を掘削する。

3　竪穴住居の重復した分について下層掘削を行う。実測用割り付けを行う。

4　調査区全体の実測終了。レベリングを行う。

5　最終全景写真撮影。

6　各遺構の最終チェックを実施する。現地説明会を実施する。遺物及び道具類の整理運搬。

第２節　古墳時代の遺構

原山遺跡は、奈良時代を中心とした時期の遺跡であるが、古墳時代の遺構が新発見された。今回検出した古墳時代の遺構は、溝１と竪穴住居６軒である。ピットについては、出土遺物やその形態から推察して、その可能性の高いものについて列挙したい。古墳時代遺構は、調査区全域に拡がっており、集落関係の遺構である。

竪穴住居は第１～６住居が調査区中央部に重復し、第４住居だけは南端に位置している。その遺存状態は悪くその形状を留めるだけである。調査地は西から東に傾く東向きの斜面地にあり、後世の削平や整地によって削平を受けたものと考えられる。実際に検出した住居の深さは10cm以上のものはなく、遺物の出土がなければ竪穴住居とは考え難い遺構であった。

第１住居

１・２区にまたがり、唯一の全体規模の把握出来る隅丸方形の竪穴住居である。東西方向4.5m、南北方向5.0m の規模を測る。深さは、約５cmである。なだらかな斜面地であり、東西の落差は15cmを測る。第１～５住居の内、切合関係から最も新しい住居であると考えられる。埋土は、薄茶灰色粘質土である。埋土除去後は直ぐ地山となり、床面らしき面は見い出す事が出来なかった。向きは、磁北に対して約5.5°東へ向いている。井戸１によって北西隅を切り取られている。

第２住居

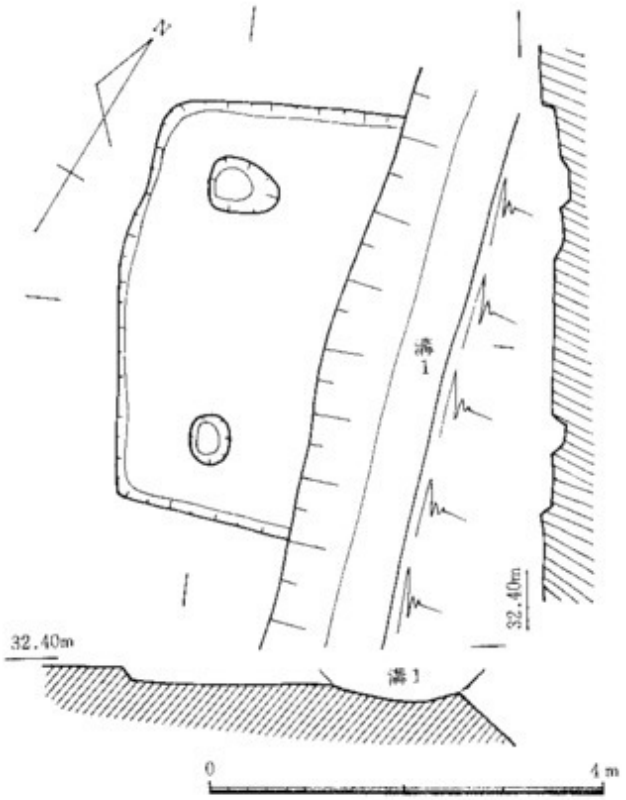
４区の北側に検出された竪穴住居である。四隅の内南片隅だけを検出したのみで、北側を第１住居、東側を第３住居によって切り取られている。検出規模は、東西方向3.4m、南北方面3.6m である。深さは、約10cmである。当住居もやや傾きを持つ斜面地にあり、縁辺に幅20cm、深さ５cmの周溝を持つ。周溝埋土は、黄灰色砂質土である。埋土は、黄褐色砂質土である。当住居も床面は検出されず、出土遺物は須恵器、土師器の細片が出土した。

第３住居

３・４区の中央線上に検出した隅丸方形の竪穴住居である。北側を第１住居によって切り取られ、第２・５・６住居より上層に掘り込まれている。東西方向3.0m、南北方向4.2m である。深さは、西側端が約５cm遺存しているのみで、緩斜面地にある事から最終床がほぼ水平であるところから、住居中央部付近で自然消滅している。また、溝２に切られる位置にあり時期的にも先行している。当住居には周溝は認められなかった。埋土は、黄褐色砂質土である。出土遺物はあまりなく、須恵器や土師器の細片が少量出土した。住居埋土層の深さも浅く後世の時期の遺物である可能性も高い。

第4住居

6区中央部から検出した隅丸方形の竪穴住居である。東側半分を溝1によって切断されている。当住居のみが他の竪穴住居と重複関係をもたずやや南側の離れた位置に在る。規模は、東西方向2.5m、南北方向4.2mを測る。深さは、約10cmである。同住居は他の竪穴住居中最も遺存が良好である。南北に対応するピットが2個掘り込まれており柱穴を持つ。規模は径60・50cmの楕円形を呈し、埋土は黄茶灰色粘質土である。同住居には周溝がなく、床面は黄褐色粘土である。埋土は薄茶灰色砂質土が混入した黄褐色粘質土である。埋土中から須恵器、土師器、製塩土器等が出土した。また、一部攪乱孔が中央部にあり、その埋土中に焼土が多数見られた。炉の痕跡であると見られ、赤褐色に環元された部分も確認された。その位置はほぼ中央部に位置する。



図—4　第4住居

第5住居

3・4区の境界線付近から検出した竪穴住居である。遺存度が悪く、南西隅だけを検出した。深さもあまりなく、検出面が床面と同一面である。当住居は、第3住居に切られており、重複した竪穴住居の最南端に位置している。埋土は、茶灰色粘質土である。出土遺物は土師器の細片が出土している。

第6住居

4区の第2住居の床面下から検出した竪穴住居である。南西隅の周溝のみを検出しただけである。周溝は、南北方向に1.1m、東西方向に2.2mを測る隅丸方形である。溝幅は30cm、深さ5cmである。埋土は黄灰色粘質土で遺物の出土はない。

溝2

2・4区の東側に両端が東方を向いてゆるい円弧状に曲折した溝である。両端が共に後世の削平によって消滅している。溝は、ほぼ同一幅を持ち、底部形状は椀形である。検出長11m、横幅1.3m、深さは30cmである。深さは両端になる程浅い。堆積土は、茶褐色粘質土、茶灰色砂

土である。この溝は、竪穴住居３・５を切断しており、それより後出的である。出土遺物は、土師器、須恵器が多数出土した。また、縄文時代石鏃も出土した。その性格については、明らかでない。

第３節　７・８世紀の遺構

調査の実施にあたって、当初から西側隣接地に在る原山廃寺の寺院に関係する同時期の遺構や遺物が検出される可能性を予測した。そして、調査によってその予測をはるかに上回る遺構と遺物を検出した。

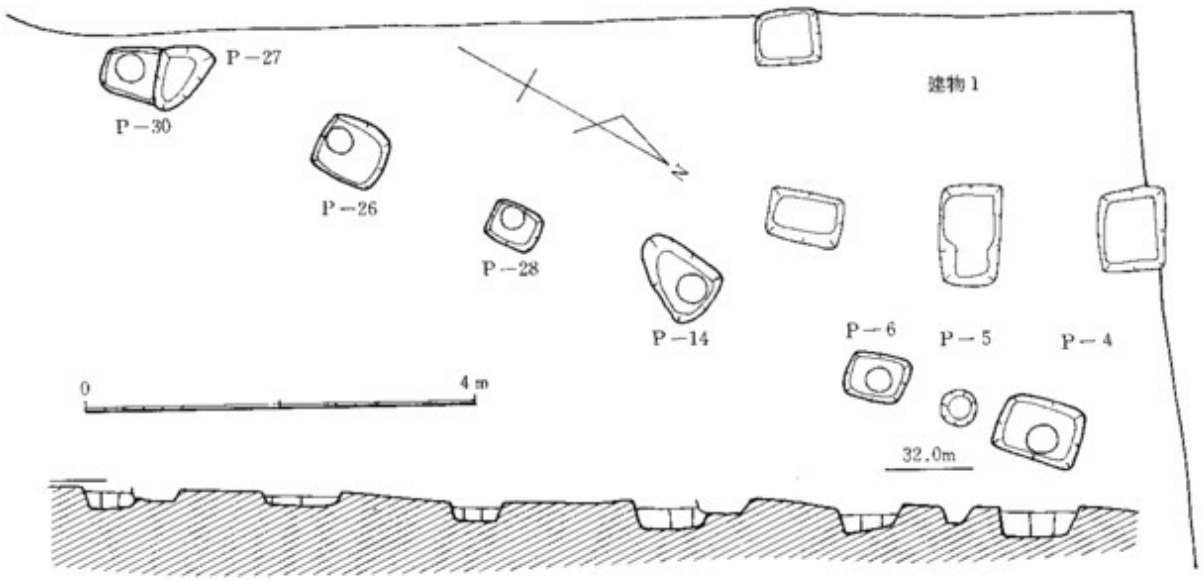
遺構の主体となるものは、一辺が40～110㎝を測るピット群である。これらのピットは建物の柱を建てるために掘り窪められたピットで、何個かのピットが組合わせて１軒の建物を形成する。建物は、２×３間の建物が１軒、２×２間の建物が２軒、２間以上×４間以上の建物が１軒、縦方向６間以上の建物が１軒、縦方向３間の建物が１軒を数えた。これらの建物以外のピットも建物となる可能性も高かったが、今回の調査では明確にできなかった。その他の遺構には井戸１、土壙墓１、溝１、炉跡１、不明土壙、等がある。以下、遺構別に略記していきたい。

建物１

調査区の北西端部に検出した建物で、東西方向２間、南北方向３間以上の建物である。今回検出したピットは、南北３個と東西２個で、その他のピットは調査区外にあたり検出しえなかった。ピットは、隅丸方形の掘方に円形の柱穴を持つ。規模は、方径55～80㎝の掘方と平均25㎝の柱穴径である。しかし、Ｐ－２は柱穴が検出されなかった。このピットは東西方向に長い掘方を持ち、断面観察により柱の抜き取りではないかと考えられる土層の歪みがみられた。建物の示す方位は、磁北に対して東へ27.0°傾いている。柱穴間は、南北1.90、1.90m、東西1.90mを測る。各ピットの比較図及び表は次の通りである。

建物２

建物１の東側に６ヶのピットを連ねた建物である。立地は、西側及び北側に緩く傾く斜面に位置している。対応するピットは、これらのピットの西側に存在すると考えられる。建物の規模は不明である。ピットは南北方向に、方径20～40㎝を測る隅丸正方形のピットが一直線上に並ぶ。柱穴は、円径平均20.6㎝を測る。建物の主軸は、磁北に対して東へ5.0°振る。柱穴間は北から、1.90、2.04、1.95、19.5、2.10mを測る。ピット深度は、５～20㎝を測り、掘方埋土は、一括に埋戻した茶灰色砂質土である。柱穴埋土は、灰茶色粘質土である。同建物に隣接する遺構は土壙墓と井戸がある。その関係は不明である。各ピットの比較図及び表は次の通りである。



図－5　建物2

建物3

調査区の中央部に検出した建物で、東西方向2間、南北方向2間の総柱建物である。同調査区内で唯一の全容を明らかにした建物である。その立地は、北側と東側へ向けて緩い傾きの斜面地である。9個の隅丸方形のピットが整然と並ぶ。規模は、方径26～36cmの掘方と平均14cmの柱穴がある。柱穴埋土は、多くの炭を含む土層で、すべての柱穴に同様の状況が見られた。建物が焼失したために混入した炭かどうかは明らかでない。ピットの深さは、検出面から6～24cmを測り、深浅2つに分類ができる。P－71、73、78は約10cmと浅く、P－32、68、79、35は約20cmと深い。P－35については下層から石敷を検出した。石の径は、12cmを測る。柱の根石としたもので、その周囲に小石を固定用にめぐらせている。石は全部自然石である。ピット規模は、26～36cm、柱穴径約14cmとほぼ均一である。建物方位は、磁北に対して東へ5.0°傾いている。柱穴間は、南北1.98、2.08m、東西1.94、1.94mを測る。各ピットの比較図及び表は次の通りである。

建物4

建物3とほぼ平行するように調査区中央部に検出した建物である。東西方向2間以上、南北方向2間を測り、その東側が後世の削平を受け消滅したと思われる。立地は、割合なだらかな場所で、溝1の埋没後に建築されている。それぞれ隅丸方形の掘方を持ち、円形の柱穴がある規模は、方径36～42cm、径約15cmである。P－42、81は、掘方上層と柱穴埋土中に多量の土器が一括して出土した。また、土器と一緒に炭の混入も多く見られた。ピットの深さは、南北両端のピットが深く、中央2個のピット底部は約6cm位浅くなっている。柱穴間は、南北1.87、1.94m、東西2.03mである。建物方位は、東へ4°傾く。各ピットの比較図及び表は次の通りで

ある。P－39は、P－135と切り合い関係を持ち、より新しい要素を持つ。

建物5

調査区の中央部やや東側端に検出した建物で、東西2間以上、南北4間以上の規模を測る。建物の東側は、調査区外ないし後世の削平により不明である。立地は、北側及び東側向きの斜面地である。今回の調査において一番大規模な掘方径を持つ建物がある。掘方は隅丸方形、柱穴は円形で、方径45～52cm、径18cmである。P－135、46の掘方底部は、ほぼ同一であり、P－44は幾分浅く、また、P－132、49は、P－135、46より約5cm深く掘削されている。建物の構造的強化か、土層が軟弱のためか不明であるが、どのピットの掘方にも5～10cmごとに堅固に版築を施している。また、ピット底部は平坦なものが多いが、柱穴の低部がやや凹んだP-132がある。柱間は、南北2.28、2.10、2.10、2.28m、東西2.45mである。当調査区で一番柱穴間が長い建物である。建物方位は、西へ5°傾く。P－49、46、44、39、84は溝1埋没後に掘削されており、建物4より古い要素を持つ。各ピットの比較図及び表は次の通りである。

建物6

調査区中央部に検出した建物で、東西方向にピット4個だけが遺存している。その他の対象となるピットは検出されなかった。建物3に平行している。掘方隅丸方形のピットで、方形28～32cm、柱穴径14cmを測る。ピット底部の深さも均一である。柱間は、東西1.87、1.84、1.87cmを測る。建物方位は、北へ7°傾く。各ピットの比較図及び表は次の通りである。

井戸1

調査区北側から検出した井戸である。建物2の直ぐ東側にあたる。東西1.43m、南北1.53m深さ0.8mの円形を呈する。上半部は外側へ大きく八の字状に拡がり、下半部はほぼ垂直に掘り下げられている。底は舟底状である。基本層序は、上層から自然埋没した状態を示す。上層部から多量の石、瓦、凝灰岩切石（二次焼成を受けている）等が排棄されている。中層部分からも弱干の石が見られた。中下層には遺物がほとんど入っていなかった。

土坑墓1

建物2と土坑1との中間部に検出したもので、東西30cm、南北40cmのピット内に小形丸底壺を正営位に納置したものである。ピット底部形状は円弧状でその中央部に壺を置いている。深さは8cmを測る。ピット埋土は、茶灰色砂質土である。土器棺内からは何ら遺物か出土しなかった。同様の土坑墓はなく、遺物包含層中にも小型丸底壺の破片は見当らなかった。

ピット

以上の建物や土坑、井戸等の遺構以外にも数多くのピットや土坑が検出された。方形の掘方を持ち、柱穴のあるピットもあり建物と関係したものと考えられるが、他のピットとの関連を掴む事が出来なかった。調査区の全域に見られる事から、調査区外にも同様の遺構が続き、それらの遺構と関連するピットもあろう。また、後世の削平によりピット深度が良好なもののみ

が検出された可能性がある。以下、各ピットの概要を表にまとめた。

ピット概要は、ピットの規模、深さ、柱穴規模、掘方形状、埋土土色、備考をピット番号順に列挙する。数値は遺構を半裁した折に断面観察を行い計測した。掘方形状は、その規模や種類そして形態別に分類した。

A—ピット中央に柱穴の在るピット

B—ピットの規模が大きく柱穴が検出されなかったピット

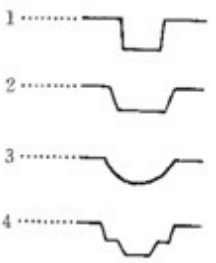
C—ピットの規模が小さく柱穴が検出されなかったピット

1—底部形状が方形のピット

2—底部形状が逆台形のピット

3—底部形状が円弧状を呈するピット

4—底部形状が二段式を呈するピット



図—6　掘方形状

埋土土色はピット埋土の主な土層で、柱穴のあるピットは掘方内埋土の土層名を記した。備考には、主な出土遺物と特徴をあげた。

P—No	規　模	深さ	柱穴規模	形　状	土　色	備　考
1	85 ×40＋α	23.0	21.0	A—1	黄灰色粘質土	建物1
2	112 × 60	21.5	25.0	A—1	灰茶色砂質土	建物1
3	60×50	19.0	20.0	A—1	灰茶色砂質土	
4	60×75	32.0	24.0	A—1	灰茶色砂質土	建物2
5	22×30	18.5	——	C—1	灰茶色砂質土	
6	44×53	30.0	17.0	A—1	灰茶色砂質土	建物2
7	25×40	26.0	——	C—1	黄灰色砂質土	
8	22×27	9.0	——	C—2	黄灰色砂質土	
9	45×48	12.0	17.5	A—1	灰茶色砂質土	
10	48×48	16.0	26.0	A—1	灰茶色砂質土	建物1
11	46×70	34.5	24.0	A—1	灰茶色砂質土	建物1
12	54×42	16.0	11.0	A—1	黄灰色砂質土	
13		2.0			黄灰色粘質土	消滅
14	67×132	28.0	22.5	A—3	茶灰色砂質土	炭混入　建物2
15	27×24	4.5	——	C—1	灰茶色砂質土	
16	22×22	12.5	——	C—2	茶灰色砂質土	
17	26×30	12.5	——	C—3	灰茶色砂質土	
18	20×21	14.5	——	C—2	茶灰色砂質土	

P—No	規　模	深さ	柱穴規模	形　状	土　色	備　考
19	50×30	4.0	——	B—2	黄灰色砂質土	
20	31×30	14.0	——	C—2	灰茶色砂質土	
21	33×22	11.0	——	C—2	灰茶色砂質土	
22	43×44	20.0	15.5	A—3	茶灰色砂質土	
23	32×34	28.5	——	B—1	灰茶色砂質土	
24	36×38	9.5	——	B—4	灰茶色砂質土	
25	50×50	15.0	14.0	A—2	黄灰色砂質土	
26	54×69	14.5	31.5	A—1	黄灰色砂質土	建物2
27	55×55	13.0	14.0	A—1	黄灰色砂質土	建物2
28	25×35	12.0	——	C—1	灰茶色砂質土	建物2
29	36+α×74	20.0	20.5	A—2	灰茶色砂質土	
30	35×35	23.5	16.5	A—1	灰茶色砂質土	建物2
31	21×21	9.0	——	C—1	灰茶色砂質土	
32	38×40	11.0	21.5	A—2	灰茶色砂質土	建物3
33	45×45	30.5	19.5	A—1	灰色砂質土	建物3
34	30×25	8.0	——	C—1	灰色砂質土	
35	45×60	14.0	21.0	A—2	灰茶色砂質土	建物3
36	57×50	37.0	19.5	A—1	灰茶色砂質土	建物6
37	50×60	51.5	——	C—1	灰茶色砂質土	
38	22×23	9.0	——	C—2	灰茶色砂質土	
39	102×92	34.5	24.5	A—2	灰茶色砂質土	建物4
40	48×46	33.5	19.0	A—1	灰茶色砂質土	建物6
41	30×30	13.0	——	C—1	黄灰色砂質土	
42	58×66	37.5	20.5	A—2	灰茶色砂質土	建物4
43	55×57	32.0	19.0	A—1	茶灰色砂質土	建物6
44	60×80	38.5	27.5	A—1	茶灰色砂質土	建物5
45	30×34	26.5	——	C—1	灰茶色砂質土	
46	100×105	64.5	26.0	A—1	灰茶色砂質土	建物5
47	33×35	11.5	——	C—2	黄灰色砂質土	
48	76×90		17.5	A—1	灰茶色砂質土	
49	40×63	62.0	26.0	A—1	灰茶色砂質土	建物5
50	40×60	9.0	——	B—2	茶灰色砂質土	

P—No	規　模	深さ	柱穴規模	形　状	土　色	備　考
51	26×26	29.0	——	C—2	黄灰色砂質土	
52	26×26	17.5	——	C—2	灰色砂質土	
53	38×60	3.5	——	B—2	灰茶色砂質土	
54	40×45	22.5	18.0	A—2	灰茶色砂質土	
55	20×21	6.5	——	C—3	灰茶色砂質土	
56	35×56	12.5	20.0	A—2	茶灰色砂質土	
57	50×40	9.5	——	B—2	灰茶色砂質土	
58	43×83	34.0	13.0	A—2	灰茶色砂質土	
59	25×28	14.0	——	C—2	茶灰色砂質土	
60	60×63	24.5	——	B—2	茶灰色砂質土	
61	33×44	1.5	——		灰色砂質土	消滅
62	45×44＋α	5.0	——	B—2	灰色砂質土	
63	38＋α×88	28.0	——	B—2	茶灰色砂質土	
64	34×30	19.5	——	B—4	茶灰色砂質土	
65	15＋α×35	23.0	——	B—2	灰茶色砂質土	
66	20×20	9.0	——	C—1	茶灰色砂質土	
67	28＋α×65	4.0	——		黄灰色砂質土	消滅
68	65×73	40.5	21.5	A—1	茶灰色砂質土	建物3
69	24×27	16.5	——	C—2	灰茶色砂質土	
70	36×25	7.5	——	C—2	灰茶色砂質土	
71	55×45	12.5	15.0	A—1	黄灰色砂質土	建物3
72	27×26	5.5	——	C—2	灰茶色砂質土	
73	58×52	12.0	19.0	A—1	茶灰色砂質土	建物3
74	30×30	20.0	——	C—4	灰茶色砂質土	
75	55×60	21.5	12.0	A—1	灰茶色砂質土	建物3
76	33×33	5.0	——	B—2	灰茶色砂質土	
77	30×30	9.0	——	C—2	灰茶色砂質土	
78	59×53	17.0	18.5	A—1	茶灰色砂質土	炭含入　建物3
79	48×60	31.5	19.5	A—1	黄灰色砂質土	炭含入　建物3
80	63×69	50.0	19.0	A—1	茶灰色砂質土	建物4
81	75×75	29.5	21.0	A—1	茶灰色砂質土	建物4
82	88×80	28.0	24.0	A—1	茶灰色砂質土	建物4

P—No	規　　模	深さ	柱穴規模	形　状	土　　色	備　　考
83	65×78	42.0	20.0	A—1	灰茶色砂質土	建物4
84	86×88	85.5	27.0	A—1	灰茶色砂質土	建物5
85	29×24	13.5	——	C—2	灰茶色砂質土	
86	75×73	19.5	——	B—2	黄灰色砂質土	
87	110×64	20.0	——	B—2	黄灰色砂質土	
88	20×28	9.5	——	C—2	灰色砂質土	
89	47×49	16.0	12.0	A—1	灰茶色砂質土	
90	58×37	58.5	——	C—2	黄灰色砂質土	
91	42×43	1.5	——	—	黄灰色砂質土	消滅？
92	36×32	14.0	——	B—3	灰茶色砂質土	
93	33×30	14.5	——	C—3	灰茶色砂質土	建物7
94	32×35	13.5	——	B—3	灰茶色砂質土	建物7
95	31×28	6.0	——	C—2	茶灰色砂質土	
96	23×30		——		灰色砂質土	消滅
97	24×30	19.0	——	C—3	灰茶色粘質土	建物7
98	56×63	20.5	——	B—2	灰茶色砂質土	
99	77×50	37.0	——	B—2	灰茶色砂質土	
100	40×28	4.5	——	B—3	灰茶色砂質土	建物7
101	40×40	4.5	——	B—2	灰茶色砂質土	
102	27×27	8.5	——	C—2	灰色砂質土	
103	32×50	4.5	——	B—3	灰茶色砂質土	
104	54×36				黄灰色砂質土	近世
105	38×54				黒茶色砂土	近世
106	27×28	7.5	——	C—3	黄灰色砂質土	建物7
107	36×36	9.0	15.5	A—2	灰茶色砂質土	
108	70×34	8.5	——	B—2	茶灰色砂質土	
109	25×30	30.5	——	C—3	黄灰色砂質土	建物7
110	36×53				灰色粘質土	消滅
111	50×55	11.5	——	B—2	灰色粘質土	
112	28×43				黄灰色砂質土	近世
113	39×50				灰茶色砂質土	近世
114	62×80				茶灰色砂質土	近世

P—No	規　模	深さ	柱穴規模	形　状	土　色	備　考
115	50×35＋α		22.0	A—1	茶灰色砂質土	
116	28×50	27.5	——	B—2	茶灰色砂質土	
117				—		存在しない
118	34×41				灰色砂質土	近世
119	24×29	14.5	——	C—3	茶灰色砂質土	
120	55×72	12.5	——	B—2	灰茶色砂質土	
121	58×44	12.0	——	B—2	灰茶色砂質土	炭混入
122	72×48	23.5	——	B—2	灰茶色砂質土	
123	44×50				灰茶色砂質土	近世
124	47×47	21.5	——	B—2	茶灰色砂質土	焼土
125	42×48	15.0	——	B—2	黄灰色粘質土	
126	73×86	16.5	12.5	A—2	黄灰色砂質土	炭混入
127	53×45	18.0	14.0	A—2	茶灰色砂質土	
128	63×73	27.5	20.5	A—2	茶灰色砂質土	炭混入
129	35×46				黄灰色砂質土	消滅
130						存在しない(溝2)
131	86×105	45.0	20.5	A—1	茶灰色粘質土	
132	86×87	80.5	27.0	A—1	灰茶色砂質土	建物5
133	55×52	36.0	18.0	A—1	茶灰色砂質土	建物6
134						存在しない
135	74×96	68.0	25.0	A—1	灰茶色砂質土	建物5
136	32×27	8.5	——	C—3	黄灰色砂質土	建物7

表—1　ピット概要表

	1	2	3	4	TOTAL
A	44(37.0)	7(5.9)	1(0.8)	0(0)	52(43.7)
B	0(0.0)	26(21.8)	4(3.4)	1(0.8)	31(26.1)
C	5(402)	20(16.8)	9(7.6)	2(1.7)	36(30.3)
TOTAL	49(41.2)	53(44.5)	3(2.5)	3(2.5)	119(100.0)

表—2　ピット分類表（%）

調査区全域から検出したピットの概要表及び分類表から弱干の検討を加えたい。

ピットの規模は、平面における縦と横の長さの和が65cmを越えるものを大きいものとし、それ以下のものを小さいとした。ピット中央に柱穴があるピットは、全体の43.7%を占め、その内、85%は掘方形状が方形のものである。逆台形のもの13.5%、円弧を呈するもの1．9％である。また、掘方形状が方形のものの内、今回建物として構成されたもの(建物1～6のピット)が77.3%であった。残り22.7%のピットは今回の調査では同時期の建物を構成する可能性が高いものの明確にしえなかったものである。

建物ピットの規模を平均化すると表－3の如くである。平均値は、特別数値が極単な値である場合を除いた。ほとんどのピットは、黄褐色粘質土（大阪層群）上に掘削されており、掘削条件としてはある程度一定しているといえる。

建物No.	掘方辺平均	柱穴平均
5	80.4	26.4
4	75.9	21.5
2	58.2	27.0
1	56.2	24.0
3	53.1	20.0
6	52.5	18.9

表－3　建物ピット平均規模
(単位cm)

柱穴を持たず規模が大きいピットについては、全体の26.1%を占めた。その内、掘方形状が方形のものはなく、逆台形を呈するもの83.9%を占め、円弧状のもの12.9%と2段式に掘り窪められたもの3.2%は比較的少ない。掘方一辺は、他端より割合長いものが多くなり、方形も変形のものが多くなる。

柱穴を持たず規模が小さいピットは、全体の30.3%を占めた。この内で、掘方形状が方形のもの13.9%、逆台形のもの55.6%、円弧状を呈するもの25.0%、2段式になるもの5.6%である。掘方一辺は、他端と比べほぼ同一のものが多く、長短のあるものは少ない。また、方径のものより円形に近いものの方が多くなる。

掘方の土色は、各ピットの形状や規模に関係なく平均化している。埋土中に含まれる炭や小礫によってその差異が見いだされるが、それらのピットもわずかしか存在しない。

出土遺物は、ピットの時期を決定するのに直接的な手掛りとなるものであるが、今回の各ピットの出土遺物は割に少なく、時期的な変化については敢えて省略したい。今回検出したピットは、出土遺物から見て、5～9世紀、14～15世紀代の遺構である事が考えられる。今後の遺構検出における参考資料としておきたい。

鍛冶炉

4区北側の建物3の敷地内に下層部分だけを遺した鍛冶炉が検出された。規模は、南北35cm東西40cmである。形状はほぼ円形を呈する。炉中央部は黒茶褐色焼土が約3cm位の厚さで堆積し、その下層に赤茶色粘質土（地山が還元変色した層）がある。また、炉周辺約1mの範囲内には、炭や鞴羽口、鉄滓の破片が散乱していた。この炉は、建物3の廃絶後造られており、出土遺物や諸条件から8世紀前後の時期のものと考えられる。また、周辺炭層中から断面方形の角釘の一部が出土した。

第4章　遺物

今回の調査では、石器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦、塼等、各時代の多岐にわたる遺物が出土した。これらの遺物は整理箱35箱分を数え、古墳時代から奈良時代に至る時期が中心である。遺物は、古墳時代の竪穴住居や溝、奈良時代を前後する建物、溝、井戸、土坑、土坑墓等の遺構から出土したものと、遺構の上層に堆積した遺物包含層から出土したものに分けられる。前者は、遺構の時期を明確にするものであり、後者は、遺構の相対的な継続範囲を暗示するものである。各個々の出土遺物を遺構別に略述し、その成果を時代を追って記述したい。

第1節　古墳時代の遺物

溝－1（図－7）

溝－1の埋土中から須恵器、土師器が出土した。この内土師器については図化しえるものはなかった。須恵器は、杯蓋、高杯、台付壺脚部、平瓶の口縁部等がある。杯蓋の口縁端部は丸く、器高は低く、天井部と口縁部の間には形骸化した稜の無いもの1と有るもの2がある。

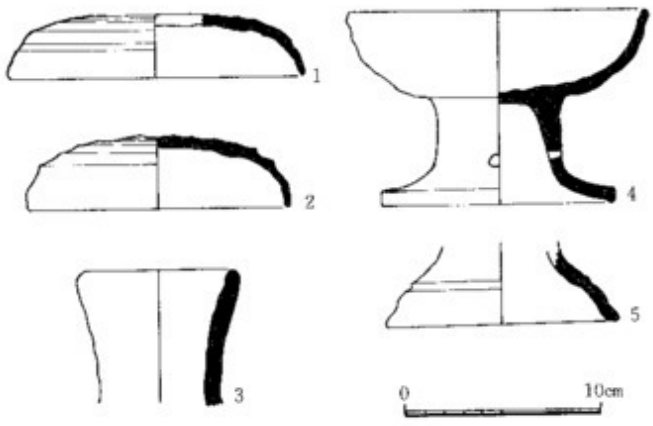
天井部はどちらも稜近くまで回転ヘラ削りを施す。高杯は、蓋のないもので脚は幅が広く短い。四方の円形透しを刻んでいる。台形壺は、台部のみで中間部分に明瞭な稜が付く。

P－43

P－43の埋土中から縄蓆文を施した須恵質の甕又は壺の破片が出土した。器壁は厚く、1.1cmを測る。色調は、灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土は、白色砂粒をわずかに含む。内面には同心円文叩きを施す。

P－81（図版－9）

P－81の掘方埋土中から須恵器杯蓋身、壺が数点出土した。近くに竪穴住居1～6が有り混入したものと思われる。蓋は天井部が平担で稜は短く丸く仕上げ、端部は内傾する明瞭な段を有するものと、稜近くまで回転ヘラ削りを施し、稜は短く丸くその下に沈線を巡らして端部が



図－7　溝－1出土遺物

丸いものがある。杯身の端部は内傾する明瞭の段を有するものと細く平面を成すものがある。底部は蓋より比較的丸味を持つ。壺は口縁部が欠損しているが、頸部下段と体部上半に波状文からなる文様帯が見られる。体部外面は平行タタキを施した後にナデ調整を行い、内面も丁寧にナデている。（64～67）

P－89

須恵器杯蓋が出土した。口縁端部は内傾する明瞭な段を有し、稜は短くやや丸くシャープな感はない。天井部は稜近くまで回転ヘラ削りを施す。丁寧な作りである。

遺物包含層出土遺物（図版－8、40～45、51、図版－10、89、90、104、105）

古墳時代の遺物は、須恵器では、杯蓋身、高杯がある。杯蓋は、つまみの付くものと付かないものがある。つまみの付く蓋は、たち上がりがやや短く外反し、軽い沈線状の段と短く丸い稜を持つ。回転ヘラ削りは稜近くまで見られ全体に仕上げは丁寧である。口縁端部はやや内傾するが平坦である。全体にシャープな感じがする。つまみの付かないものも同様の事が言える。杯身は、上記蓋とセット関係を持つものと考えられる。たちあがりは高く外反し、受部は、上外方へのびる。端部はやや内傾し平坦である。底部は受部付近まで回転ヘラ削りを施す。また、端部が丸く受部が断面三角形を呈するものもある。高杯は、杯部が欠損し全体を復元しえない。脚部は短いものとやや伸びた形態のものがある。脚端部は前者が沈線状の段と凸線を持ち外反した後に下方気味に内弯する。後者はわずかな凸線を持ち外方へゆるく外湾して端部に至る。土師器については、高杯がある。杯部は端部が上外方へ伸び、杯部下方で段を持たない形態のものである。調整は表面剝離のため不明である。

第2節　7・8世紀の遺物

P－35

P－35の埋土中より須恵器杯身が出土した。高台はあまり高くなく、口縁部は外反気味に薄くなる。

P－37（図版－9、79）

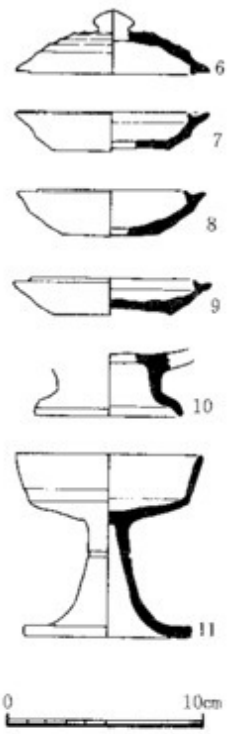
P－37の埋土中から土師器小型手捏高杯が出土した。杯部が欠損している。脚部はよく遺している。わずかなねじりを加えた脚部は、下方から外方へ外反する。杯部との内面接点は、指を入れ回転させている。内外面下部には、指頭圧痕が顕著である。

P－39（図版－9、74）

P－39掘方埋土中から須恵器杯蓋が出土した。上部が欠損し、内面にはやや短いかえりを有する。

P－42（図－8）

P－42の柱穴埋土から出土したもので、須恵器杯蓋身、高杯がある。杯蓋は、天井部がなだらかに下り端部で下方に曲り丸く仕上げている。天井部中央部には、比較的高い擬宝珠様つまみが付くと思われる。内面端部には、内傾するかえりがみられその端部は丸い。杯身は、たちあがりは短く内傾した後、丸い端部に至る。受部は短く水平にのびた後、更に上方へ向っている。底部は浅く平らであるか凹状である。３個体出土し、杯蓋とセット関係を有し、口径は一番小型化した杯身である。高杯は、脚部だけのもの10と脚部端部を欠損したもの11がある。10の脚部は、ゆるく外反して下り、のち水平方向に大きく広がる。更に短く垂直におりて端部に至る。端部はやや鋭い。11の杯部は、内弯気味に外上方へ伸び端部は丸い。口縁部直下に浅い一条の凹線が走る。脚基部は細くゆるく外弯気味に下がりさらに、ゆるく段を成し端部に至る。脚上方にやや明瞭な沈線を持つ。杯内側には自然釉の付着がみられる。



図－８　ピット42出土遺物

P－43（図版－９・73・81）

P－43柱穴の埋土中から須恵器杯蓋と土師器広口壺が出土した。杯蓋は中央部が欠損しているが、断面ひし形を呈する宝珠様つまみが付されていよう。内面にはやや短いかえりを有している。広口壺は、超小型のもので表面は剝離しているが器壁も薄く仕上げられている。器高復元高は４cm強である。口径は、7.5cmを測る。

P－58（図版－９・78）

P－58埋土中から須恵器甕が出土した。甕は、口縁部のみが遺存する。頸部はハの字に広がり口縁部近くで外反し、端部を内側へ折り返している。

P－63（図版－９・75・80）

P－63埋土中から須恵器杯蓋と土師器小皿が出土した。中央部が欠損し、内面にはやや短いかえりを有する。口径8.5cm器高2.0cmを測る。表面が剝離して調整は不明である。

P－81（図版－９・58～63・68～72）

P－81の柱穴の埋土中から、須恵器杯蓋身、椀、壺の脚部が出土した。杯蓋は、器高が高く天井部がなだらかに下りわずかな段を有し、その段から内湾気味に下がる。内面にはかえりを有する。回転ヘラ削りはこまかく行い全体に丁寧な作りである。杯身は、底部が回転ヘラ切り後未調整で、やや大きな段を有し内弯気味に上方へ伸びる。椀の口縁は内湾気味に立ちあがり端部は丸い。底部は回転ヘラ削りを施しゆるく弯曲する。壺の高台は、細く外反して下り、内側で接地する。体部外面下部には回転ヘラ削りを施す。内底面は、無数の突刺跡が見られる。

焼成前の痕跡である。

土師器では甕がある。口頸部はほぼ直立して外反し口縁部に至る。端部は丸く肩部は比較的なだらかである。体部外面は格子目叩きをし内面には同心円叩きを施す。色調は灰茶色である。

P－86（図版－９・83）

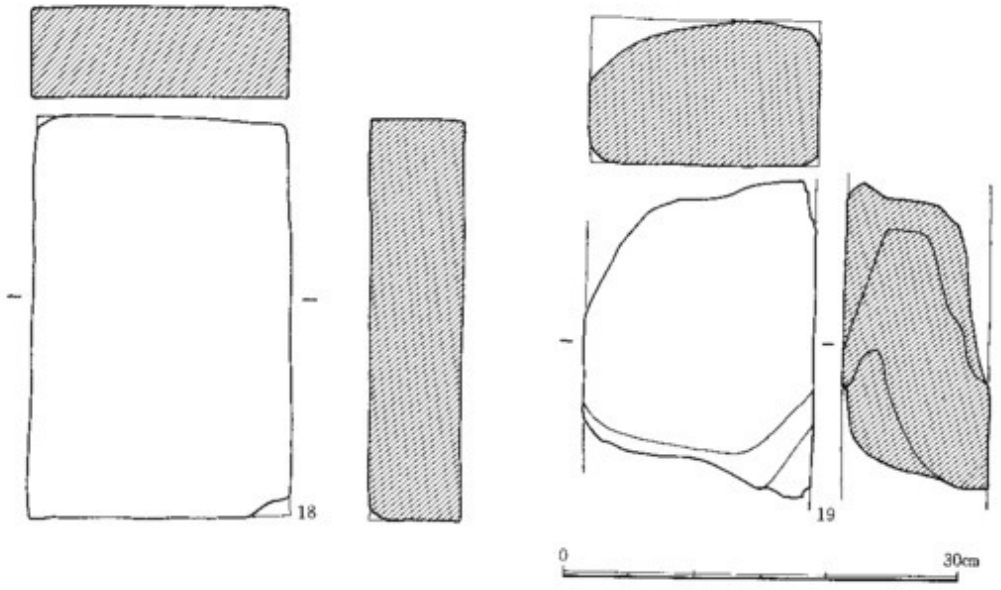
P－86埋土中から土師器杯が出土した。口縁端部は内傾する平坦面を持つ。調整方法は内外面共に剝離して不明である。

P－131（図版－９・82）

P－131埋土中から土師器杯が出土した。調整方法は、外面に横方向のミガキを施し、内面は放射状の暗文を施す。

井戸１（図－９・10）

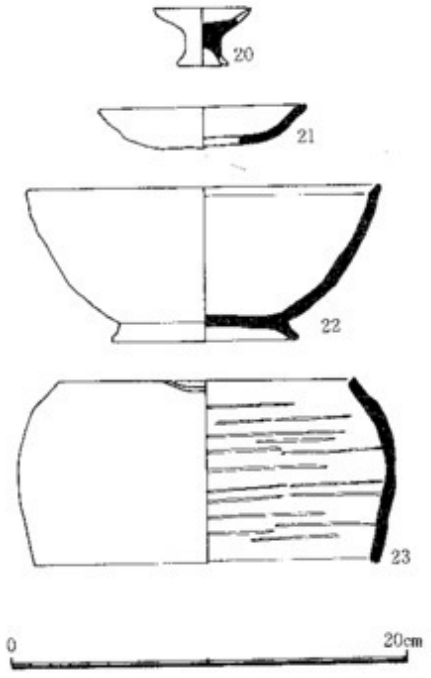
井戸上層から土師器小型手捏高杯と塼が出土した。周辺の遺物包含層から埋没時に混入したと思われる。杯部及び脚部の端部が欠損しているが、形態的には、簡素なものである。器高は3.0cm、口径は4.8cmを測る。塼は瓦質のものと凝灰岩のものがある。瓦質のものは、表面暗青黒色、断面灰色を呈し、7.0×19.6×31.0cmの長方塼である。ほぼ完形である。凝灰岩のものは、焼成を受けて軟化しており、各端部破損が激しい、縦横は、11.2×17.5を測る。長さは両端が欠損して現在長は23.5cmを測る。この塼出土層位中から、花崗岩質の自然小石が数点出土している。小石は、井戸の中下層埋土には見られないところから、埋土上層にある事を考慮すると井戸の上部構造の一部ではないかと考えられる。塼についても他に破片がなく後世に転用された可能性があろう。



図－９　井戸－１出土遺物・塼

土坑1（図－11）

土坑埋土中から須恵器杯蓋と土師器有孔円板が出土した。杯蓋は、その中央部に扁平な擬宝珠様つまみを付す。口縁端部は内方へ屈曲させており、外側に凹線状のへこみがある。有孔円板は端部が軟質のため摩耗が激しいが、径4㎝の円板になるとみられる。やや一方に寄った場所に径3㎜の孔を穿つ。



図－10　井戸－1出土遺物

土坑2

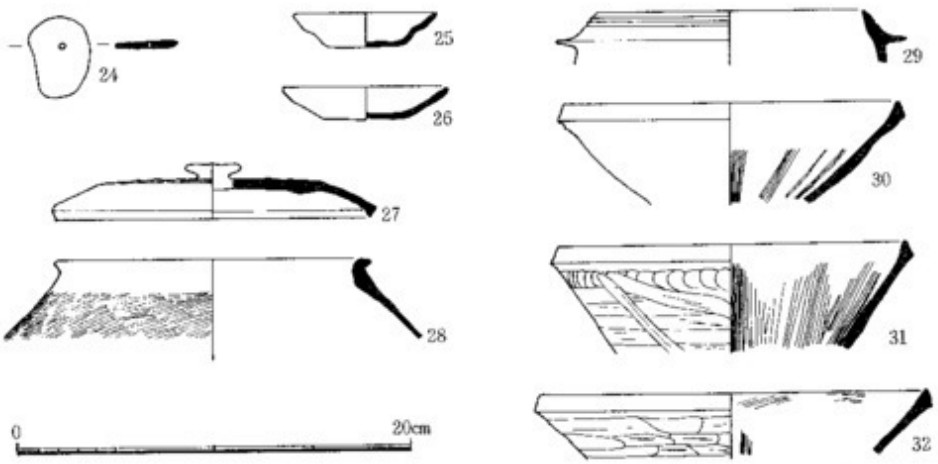
土坑2の埋土中から須恵器杯身が出土した。口径は18.8㎝と比較的大きく、高台は比較的高く内端面で接地する。端部は外反気味に逆ハの字形である。

土坑墓1（図版－9・84）

土坑3中央部に正営位に置かれた土師器小型丸底壺が出土した。頸部は内弯気味に直立し、端部は内傾して浅い段を有する。肩部はあまり見られず、丸味の少ない体部に安定の良い底部となる。色調は茶褐色を呈する。調整は、外面体部はやや傾きを持ち縦方向のヘラ削りを施した後ナデを行っている。他の部分は回転ナデを施している。

包含層出土遺物（図版－8・9）

7・8世紀の遺物は、遺物包含層から多数出土した。種類は多様である。須恵器では、杯蓋身、甕、高杯がある。杯蓋は、宝珠つまみが付く。口径の小さいもの（46、47）は、扁平で中



図－11　土坑－1出土遺物

央を高くした擬宝珠様つまみがあり、内側に形骸化したかえりを付している。口径の大きいもの（48・49・50）は、さらに扁平になった擬宝珠様つまみが付き、かえりは短く形骸化したものと消滅したものがある。杯身は、高台を伴わないもの（52・53）と伴うもの（54・55・56）がある。高台を伴わないものは、回転ヘラ切り調整をしたものと回転ヘラ削りをしたものがある。高台を伴なうものは、中央部寄りに比較的高い高台を伴なうものと底部端に低い高台を伴なうものがある。高台を伴なわないものの口縁部は直立するが高台を伴なうものは外反気味である。甕は、4点出土した。57は、ほぼ完形に復元出来る。頸部は、ハの字状に拡がり口縁端部は大きく折り曲げて肥厚する。肩部は大きく張り、胴部は垂直に下がり、底部はやや安定性がよい。調整方法は、外側に縦方向の平行タタキを施した後回転を用いたクシナデ調整が見られる。内面は同心円叩きが見られる。86は、小型の甕で、口縁端部は外側へ折り曲げた後内方へ屈曲させ、外面に縦方向の叩きと内面には同心円叩きを施す。87は、口頸部は短く直立した後大きく外反し、端部は肥厚する。肩部はほぼ水平に張り、外面には横方向の平行叩きと内面に同心円叩きを施す。88は比較的大きく外反し、端部は外下方へ屈曲させる。体部は欠損する。胎土は白色砂粒を非常に多く含む為、表面はざらざらした感触がある。

土師器は、杯、皿、甕、壺、高杯、鉢がある。杯は、口径が10.0cm～13.3cmまでのものがあり器高は2.5～4.2cmと割合低い。皿は、底面が平担で、立ちあがりは八の字状に外反し、口縁端部は外反した後端部は上方へ折り曲げる。調整は回転ナデである。97は、外側に横方向のミガキを施した壺か鉢の口縁部である。108は、口縁端部で上方へ内傾し、端部は平担である。調整は、内面に二段の斜方向暗文を施し、外面には横方向のミガキをおこなう。壺（98・99）は斜め上方にひらく口縁部を持つもので、肩部にかるい段を有するものとだらりと張りのない体部を持つものがある。高杯は、大形のもの（103・104）と小型手担（100・101・102）のものがある。103は、杯の底部外面に沈線状の軽い段を有し、内面に放射状の暗文を施す。104と105は同一個体のものと考えられる。杯部は口縁部が外方へ屈曲する。調整は表面摩耗のため不明である。脚部は短く外方へ大きく外弯して端部に至る。甕は、体部外面に指頭圧痕を残すものと縦ハケ目を施すものがある。

第3節　その他の時期の遺物

その他の時期の遺物は、石器、土馬、ミニチュア土器、鉄滓、フイゴ、土釜、移動式竈、柱痕及び中世紀の遺物がある。それぞれ遺構に伴なうものが少なく簡単にその概要だけを述べる。

石器

石器は、サタカイト製の石鏃と縦片剝離を呈した石核等が出土した。石鏃はほぼ完形である。その調整や形態から縄文時代のものと考えられる。サヌカイト原石に打ち欠いた痕跡が多く見られるものがあり、製品になるものがないが、弥生時代の石核ではないかと考えられる。

土馬（図—12・33・34）

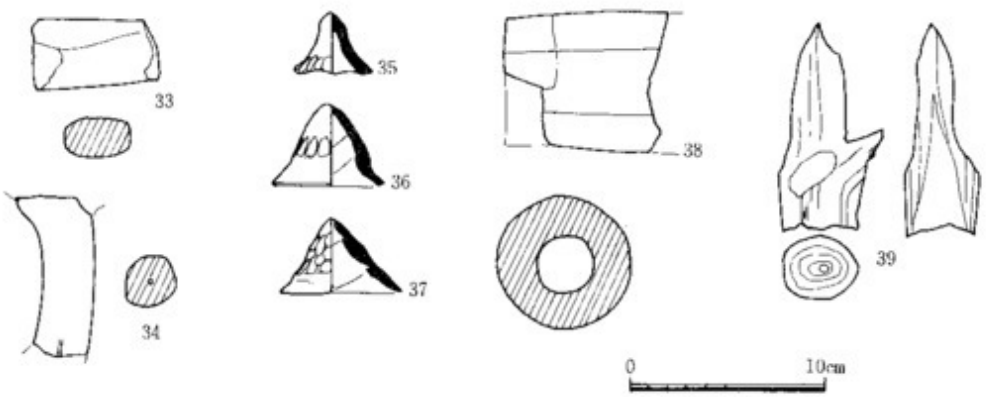
土馬は2点出土した。土師質のもので、土馬の頸部と脚部である。頸部は断面惰円形を呈し、ほぼ真直ぐである。両端は欠損し、一方の方へやや細くなる。色調は灰茶色で、胎土は、石英雲母、クサリ礫等微砂粒をわずかに含む。脚部は、断面円型で前脚のものと思われる。表面は摩耗して調整が不明である。中心部には2㎜径の真直ぐな中空がある。色調は、灰茶色で、胎土は石英、クサリ礫微砂粒をわずかに含む。これらの土馬は、全体的な形態がわからず時期は不明であるが、やや大型になると思われ、8世紀代のものの可能性が強い。

ミニチュア土器（図—12・35～37）

ミニチュア土器は、口径4.2cm、器高3.2cmを測る小型の祭祀遺物である。下半分はハの字状に拡がり外面は指オサエを行なう。上半分は円錐形であるが、一度宝珠状にふくらむ。成形は長方形の粘土帯を巻き上げていると思われるが、継目はきれいになでている。色調は、灰茶色であり一部灰黒色に焼成されている。胎土は精良である。高杯の脚部に類似しており、高杯の形態から考慮すれば、7～8世紀代のものである。36は、大県遺跡、37は太平寺古墳群から出土。

鍛冶関係遺物（図—12・38）

鍛冶炉の周辺より鍛冶関係遺物が多数出土した。鉄滓、フイゴである。断面方形の釘の破片も出土している。鉄滓は、椀形滓である。長径10.0cm、短径6.3cm、厚さ3.9mのものと、長径8.2cm、短径5.3cm、厚さ2.2cmのものが完形で出土した。他の破片も同様の大きさのものと考えられる。重さは、335g、105gである。表面及び断面には木炭が混入し、割合鉄分の多いものである。フイゴは、内外面とも円形で同一太さのもので、内外径、7.4、3.0cmを測る。先端は溶融鉄の付着がある。一端は欠損している。色調は、先端が青黒色、炉壁中の部分が青灰色端部が茶灰色土を呈する。フイゴの送風軸と炉壁の角度は、15°である。胎土は生駒西麓産の胎土でなく、調査区周辺の粘土を使用している。



図—12　土馬、ミニチュア土器、鞴羽口、ピット132柱痕

柱痕

ピット132の柱穴内底部から柱痕が出土した。径4.0cm、長さ10.4cmを測る。底部は一部腐食しているが、平担に切断したものと思われる。

土釜

土釜は、図化しえるものはなかった。鍔径のわかるものがあり、11.8、14.9、17.0cmの3種である。また、鍔の長さは、約3.0～3.1cmと均一である。胎土は、石英、長石、金雲母等砂粒を多く含む生駒西麓産のものである。

移動式竈

移動式竈は大半が破片で出土した。土釜とセット関係を持つものである。口径のわかるものが1点ある。径25.2cmを測る。胎土は土釜と同じで茶褐色の生駒西麓産のものである。体部にはやや荒いハケ目（5本/cm）を縦方向に入れている。

奈良時代以降の遺物

奈良時代以降の遺物は、8世紀代の遺構や遺物から継続した9世紀までの時期の遺物と途切れた14・15世紀代の遺物がある。

井戸1出土遺物（図—10）

井戸1の上層埋土から、土師器小皿、黒色土器椀・鉢が出土した。土師器小皿は内外面共に回転ナデを施す。椀は内外面にヘラミガキを施し、内面のみ黒色の炭素吸着させている。鉢は内外面共に黒色である。片口である。調整は、外面は横方向の削り後ヘラミガキを施している。内面は丁寧な横方向のヘラガミを施す。

P—58

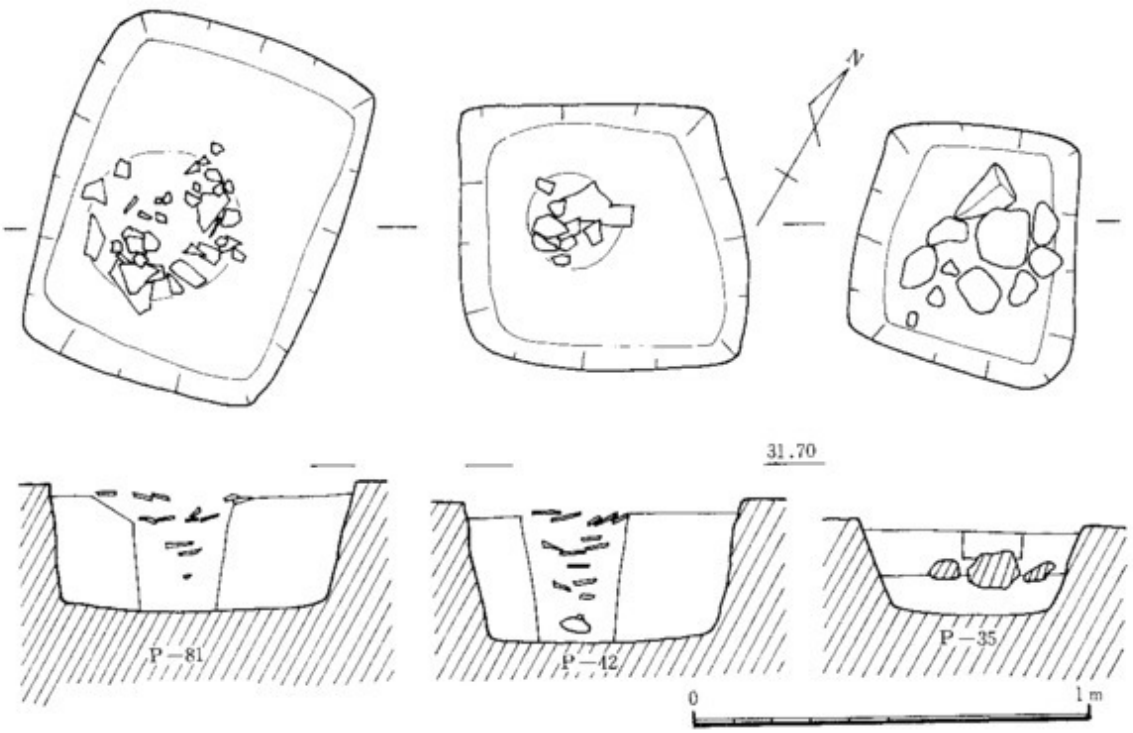
ピット58の埋土中から土釜の口縁部が出土した。鍔は短く横下方を向く。鍔から上部は垂直に伸び端部は外上方へ折曲する。口径は、10.7cmを測る。色調は、黄灰色で、胎土は、石英、長石、雲母微砂粒を含む。鍔より下方は二次焼成を受け黒色を呈する。時期は、8世紀頃のものである。

土坑1出土遺物（図—11）

土坑1埋土中から、土師器小皿、土釜、瓦質甕、瓦質及び須恵質の擂鉢が出土した。土師器小皿は2点出土した。2段口縁を成すものと弱く内弯するものがある。前者が黄灰色、後者が白色を呈する。土釜は、鍔は先端に細く水平に伸び、口縁部は内傾する段状を呈し、体部はヘラ削りを施す。瓦質の甕は、口径15.4cmを測り、体部上半だけが遺存している。口縁は肥厚しながら内傾し、そのまま短く直立した後水平方向に外反する。調整は、外面に幅の広い平行タタキを施す。擂鉢は、3種類のものが認められる。口縁径は、17.0～19.6cmを測り、口縁形状は断面三角形を呈する。30は須恵質のもので、調整は、外面は指押えで仕上げ、内面はやや間隔のあるハケ目を施す。31は瓦質のもので、調整は、外面ヘラ削りを施し、内面はほぼ全面にハ

ケ目を施す。31は32と同様であるが、内面の調整が少し違う。口縁部に横方向のハケ目痕が残り、下方に縦方向のハケ目がある。これも瓦質である。

これらの遺物の中には瓦器がなく、また、調査区全域からも瓦器の出土量は非常に少なかった。瓦器が消滅する時期後に掘削及び埋没した土坑である。14・15世紀代の遺構であろう。



図—13 ピット35・42・81

第5章　まとめ

今回の調査において検出された遺構は、古墳時代の遺構と7・8世紀代の遺構、そして中世の遺構がある。これらの時代の遺構に伴なう遺物も多数出土した。これらの遺構と遺物を総合して弱干の遺構変遷を検討してみたい。

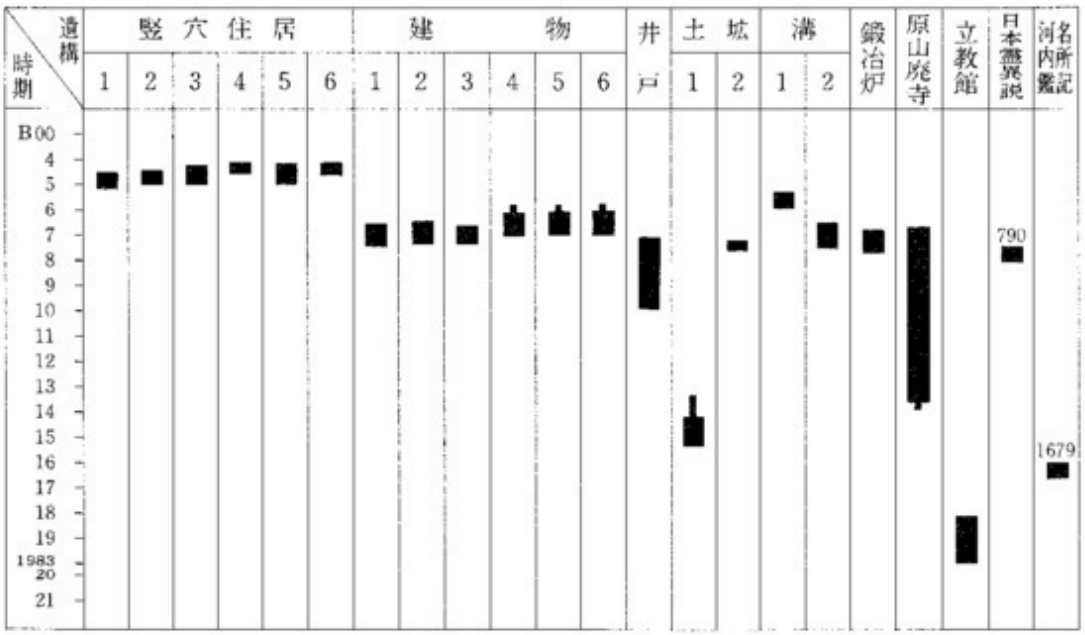
第1節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺物が出土した遺構は、竪穴住居6軒、溝1、ピット多数があった。しかし、この内古墳時代の遺構は竪穴住居と溝だけと考えられ、ピットについては主に7・8世紀の建物のピットの可能性が強い。このように7・8世紀の遺構の中に古墳時代の遺物が混入するのは遺構の重複が顕著である事を示すものである。よって、P－78・81・84出土遺物の内古墳時代に属する遺物は、建物が建造される以前の遺物で主に柱穴の掘方内から出土している。

竪穴住居は、調査区中央部に5軒が重複して検出された。各住居からの遺物の出土が少なくその時期と住居変遷は、周辺の遺物包含層から出土した遺物と住居の切り合い関係から考慮しなければならない。住居の切り合い関係から、第6住居 → 第2住居 → 第5住居 → 第3住居 → 第1住居という変遷が考えられる。しかし、各住居の遺存度が良好でない事から、その切り合い関係が明瞭でない部分も認められ、第2住居と第5住居は相前後する可能性がある。住居の傾きによる分類では、磁北を中心として23.8°の角度範囲に含まれる。第4住居（N－16.5°－W）第5住居（N－11.5°－W）、第3及び6住居（N－6.2°－W）、第1住居（N－5.5°－E）、第2住居（N－7.3°－E）である。住居の傾きと時期との関係は、何らかの規則性が考えられるが、検出遺構数が少なく今後の検討課題としておきたい。

今回検出した竪穴住居は、全部隅丸方形の住居である。住居の一辺がわかるのは第1・4住居のみである。その床面積は、22.1、17.7㎡である。古墳時代中期の竪穴住居としては中規模のものである。出土遺物の時期差を鑑みても割合短期に建替えられている可能性が強く、各住居共に拡張したような痕跡は検出されていない。規模のわかる住居も中規模であり、竪穴住居の場所は、掘削が容易な粘土質の土層である事から住居拡張を行なわなくとも必要に応じた建替えが簡単に行なえたと考えられる。

竪穴住居の壁溝については、第2・6住居から検出した。これらの住居は、砂質粘土層が地山となっている事から遺存したのだろう。他の住居は水に要溶解の粘土質から成り立っているので当初存在したとしても消滅した可能性が強い。調査中においても降雨によって粘土が簡単に軟化した事からも実証された。この事からも住居周辺に排水の為の対策が講じられていた可能性が見い出せる。溝1については、時期がやや下るものの溝の機能としてあまり役立たな



表－4　原山遺跡変遷表

	建物規模 間×間	柱間距離 東西×南北	掘方規模	柱穴規模	床面積	時期	方位	備考
建物1	(2)×(3)	1.90×1.90	0.55～0.80	0.25	(3.61)	8C	N27.0°W	
2	(5)以上	1.88～2.18	0.55～0.80	0.25	不明	7C	N 5.0°W	
3	2×2	1.87×1.95	0.45～0.70	0.30	3.65	8C	N 5.0°W	
4	(2)×2	1.80×1.95	0.60～0.80	0.30	(3.51)	7C	N13.0°W	
5	(2)×(4)	2.95×2.40	0.90～1.10	0.40	(7.08)	7C	N 5.5°W	
6	3	1.72	0.55～0.65	0.25	不明	7C	N 8.0°W	

表－5　竪穴住居比較表

	住居規模 東西×南北	床面積	壁溝	壁溝幅	かまど	柱穴	貯蔵穴	方位	時期	備考
第1住居	4.5×5.0	22.11	無	—	無	不明	無	N5.5°W	6C	
2	3.4×3.6	(13.18)	有	0.20	無	不明	無	N7.3°W	5C	
3	3.0×4.2	(17.80)	無	—	無	不明	無	E6.2°N	6C	
4	2.5×4.2	(17.64)	無	—	有？	(2)	無	E16.5°N	5C	
5	3.0×3.0	(9.0)	無	—	無	不明	無	E11.5°N	5C	
6	2.2×1.1	(4.84)	有	0.30	無	不明	無	E6.2°N	5C	

表－6　建物比較表(単位はM.G.S)

い溝である事から、住居の排水用施設として巡らされた事が考えられる。住居のかまどについては、第4住居埋土中より焼土が出土し、その痕跡ではないかと考えられる。後世の攪乱が激しいので破壊されたのだろう。場所的に住居中央部寄りのやや北側寄りの径1m位の範囲内に見られた。この焼土が出土した土層中から製塩土器が出土した。器壁が薄く黄白色を呈するものである。他の住居には、かまどの痕跡や製塩土器の出土はなかった。

竪穴住居の検出は、原山遺跡において新発見である。今後、調査区周辺に古墳時代の集落が検出される可能性がある。原山廃寺を中心とした遺跡として重要であるが、当地域の弥生時代から古墳時代に継続する遺跡の環境復元に大きな意義を残した。直ぐ南側に存在する弥生時代の集落、五十村、貝の脇遺跡との関わりや、玉手山東横穴古墳群、誉田山古墳群との関係も特に興味深いものであり、今後の調査が期待される。

第2節　7・8世紀の遺構と遺物

原山遺跡は、白鳳時代創建の原山廃寺を中心とする遺跡である。今回検出した遺構はこの寺院建立時期を相前後する時期の遺構が大半である。遺構及び遺物の項で述べたように当時の集落遺跡として十分な種類の遺構や遺物が出土した。しかし、調査面積が少なく後世の削平も激しいという制約もあって、原山廃寺という古代寺院を建立する程の財力と勢力を持つ氏族の集落と断定する確証は得られなかった。それでも、当時の建物としては十分立派な掘方と柱穴を持っており、綿密に版築したピットも見られる事から推してもその一端を伺い知る事が出来た。大きな成果だと考えられる。ある程度限定的と言わざるを得ないが、これらの遺構変遷を述べたい。

建物5 → 建物4 / 建物6 → 建物2 → 建物1 / 建物3 → 井戸

が考えられる。建物4及び建物6と建物1及び建物3はその前後関係を明らかにする事が出来なかった。井戸については、その遺物が上層埋土中から出土しており、井戸の廃絶時期を示している。この時期は、他の遺構出土遺物や遺物包含層の出土遺物から見てもこれらの建物群の廃絶と時を同じくしている。このような建物群がひしめく地区にそれ以後の遺構がない事は、原山遺跡が一時期途絶えるかまたは極単に縮小されるかのどちらかであると考えられる。

遺物にはそれぞれ見るべきものが多い。瓦、塼、鍛冶関係遺物、祭祀遺物等である。瓦については出土量は少ないが、原山廃寺の瓦窯址と推測された事からもわかるように寺院と何らかの関連性が見い出される。塼についても同様である。今回の調査において、その関連性の糸口を摑んだ事は大いに意義があろう。鍛冶関係の遺物は、鉄滓やフイゴ及びその製作によって出来たと思われる鉄釘や鉄刀、鉄片等があり、鍛冶炉周辺から出土した。この炉は、建物3の廃絶後に造られたもので、規模が小さく古代寺院周辺から数多く検出される出土例と相似する。集落内の需要を賄う為の小鍛冶であろう。祭祀遺物は、小型手捏高杯、ミニチュア土器、土馬、

小型丸底壺、鉄製小刀がある。遺構は、小型丸底壺を納置した土壙や小型手捏高杯が混入したピットがある。

小型手捏高杯は、ピットの埋土中から出土した以外のものは全部遺物包含層から出土した。この遺物は、通常地下に埋納するものではなく地上に祭られる形態のものであるから、その性格から時期変遷は明確に出来難い。高杯には、実用的な用途と祭祀的な用途の性格を持ち、小型手捏高杯は後者の形態を形骸化したものと言える。ミニチュア土器は、その用途は不明であるが、帽子の形状をしている小型の手捏土器である。一見小型高杯の脚部に類似する。柏原市内での出土例は、4例ある。集落遺跡としては大県遺跡と船橋遺跡のものがある。大県遺跡出土例は、東高野街道の旧道路敷の土層中から出土した。6・7世紀代の土器類と共伴しているようである。船橋遺跡出土のものは出土層位が不明で流出遺物として採集されている。もう1例は、太平寺古墳群内の古墳築造後に形成した祭祀遺跡から出土している。この土器は、高井田横穴古墳群に存する〝人物の窟〟に見られる人物の頭上に描かれた三角錘の帽子と類似する形状を持っている。これも祭祀遺物としての性格を持つものと考えられ興味深い。土馬は2点出土した。各部分的な遺存である。時期については限定しかねるが、7・8世紀代の遺物であろう。小型丸底壺については、楕円形土壙に単体で正営位に埋納されていた。土器棺として使用される事の多い須恵器や土師器の広口壺、羽釜、鍋等と同類の性格を持つものである。今回検出した小型丸底壺は、蓋となるものが削平あるいは当初より存在していなかったかもしれないが、通常土器棺としては土器の内部は密封されるべき性格を持つものであるから、何らかの蓋となるものが存在したと考えられる。鉄製の刀子が1点出土した。遺物包含層から出土したもので、周辺に鍛冶炉が存在する事もあってその製品となる可能性もあり、ほぼ完形に遺存している事から祭祀に関わる遺物として供した可能性も見い出せる。

これらの祭祀に関わる遺物は、集落遺跡内での祭祀遺物である。祭祀遺跡は、特定の場所、物、現象を対象として祈願あるいは神祭りを行なう事が多い。それは、巨石であったり、山岳（神体山）、樹木（御神木）、湖沼池川等である。これらは、集落とかけ離れた場所での祭祀であると言え、祭祀のあり方が個人的少人数の人達が対象というより集団的多人数に対するものであると考えられる。今回の調査における祭祀の在り方は、生活住区内での身近な祭祀として個人的少人数によって行なわれたもので、特定の場所での祭祀の方法を呪うのみならず、祭祀全体を解明する一資料として貴重なものである。祭祀自体の持つ特異性に注目して祭祀の場を重要視過ぎるきらいがあり、今後、祭祀を主宰する古代人の生活の場である集落内祭祀の発展動向に注目したい。

第６章　田辺遺跡

第１節　概要

田辺遺跡は、柏原市国分本町４～７丁目、田辺１～２丁目に所在し、明神山系から派生した割合平坦な丘陵上に立地している。北側には奈良から流れ出る大和川があり、西側には玉手山丘陵との中間に北流し大和川に流れ入る原川がある。自然地形や水の利用が至便な事から、先土器時代からの遺物の出土が得られており、古くから人々が住んだ痕跡がある。その後も大遺跡になる事がないが、継続した遺物や遺構が検出されている。田辺遺跡の大きな契機の１つとなるのは、田辺史一族が移住する頃から大いに発展するのである。周辺には、同時期の五十村廃寺、原山廃寺があり、さらに国分尼寺、国分寺が１kmを隔てない場所に密集して建立される。当時河内の中心地であった事が偲ばれる。

当調査は、昭和58年11月、畑本富太郎氏から土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届出書が提出され、柏原市教育委員会が調査依頼のものに昭和59年３月12日原因者提供による重機及び労力で試掘調査を実施した。その結果、奈良時代から中世に至る遺物と遺構を検出し、事前に発掘調査を実施する必要がある事を報告した。再度協議により、当初工事計画を一部変更し、丘陵上に存在する遺構を保存する為に盛土を施す事に変更。この事により、道路予定地のみ発掘調査する事とした。

調査は、原因者負担による発掘調査を昭和59年５月７日～５月12日まで実施し、奈良時代から中世に至る遺物と遺構を検出した。

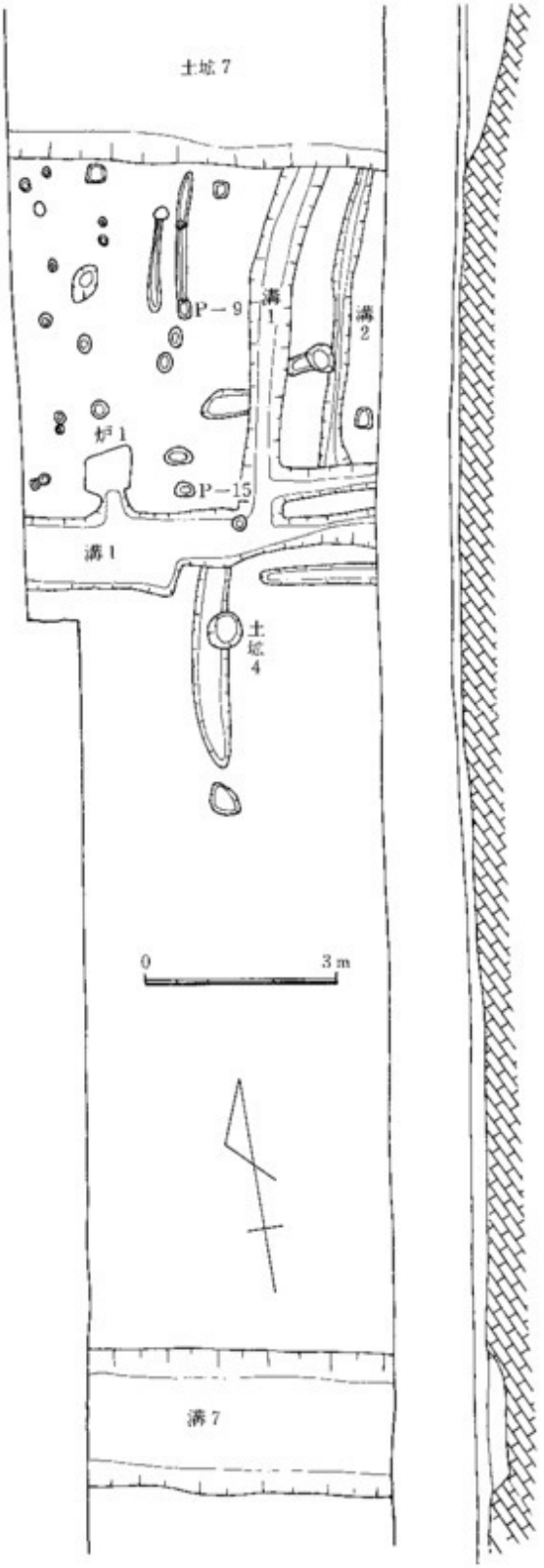
図―14　調査区位置図

第２節　遺構

当調査区の基本的土層は、上層から表土遺物包含層と地山である。表土は10～15cmの厚さがあり部分的に10～20cmの２次推積土もある。遺物包含層は５～50位認められ遺構が多数検出した北側部に形成している。

地山は黄褐色粘土で洪積世の大阪層群である。遺構は、７・８世紀と14・15世紀の２時期の遺構を同一面で検出した。遺構は、溝７条、ピット26個、土壙３、鍛冶炉２基である。各遺構ごとに多くの遺物が出土した。順次述べていきたい。

溝１　調査区北側に南北方向及び東西方向に鍵形に連なった溝である。南北に向う溝は横幅50～60cm、深さ10cm、長さ5.4ｍである。ほぼ直線的に北側土壙７に向って消滅している。埋土は茶灰色砂質土である。東西方向の溝は、南北方向の溝との交点で東側へは２条、西側へは１条の溝となっている。東側の２条の溝は、約20cmの間隔を空けて平行する。溝幅50～80cm、深さ10～15cmである。埋土は茶灰色砂質土である。現地形を見れば、東方へほぼ水平であるが、やや心持ち上向気味である。西側への溝は溝幅80～100cm、深さ５～10cmである。埋土は炭の混入が顕著な茶灰色砂質土である。出土遺物は、須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口がある。溝底は平底で鍛冶炉１に連なっている。溝の性格はこの鍛冶炉と強い関係を持つと考えられる。



図－15　遺構図

溝2　溝1の東側に平行して南北方向の溝である。溝幅20～30cm、深さ4～6cm、検出長4.5mである。溝1に切られているような状態であるが、溝1より新しい時期の溝である。埋土は黄灰色砂質土である。北端は溝1と同様に北側土坑7に向っている。出土遺物は少量であり、時期は中世である。

溝3・4　溝1の西側に平行した南北方向の溝2条である。溝幅20cm、深さ3～5cm、検出長2.4・1.8mである。埋土は灰茶色砂質土である。これらの溝の底からピットが検出されておりピット群より新しい時期の溝と考えられる。

溝5　溝1の南端から南側へ伸びる溝である。溝幅50cm、深さ5cm、検出長3mである。調査区中央部が一番高い背状になっているところから北側の遺構は全部南から北向きに下向している。溝5も同様である。南端で自然消滅しているが後世の削平を受けたものと思われる。

溝6　溝1の南側に東西方向に直線的な溝である。溝幅35cm、深さ5～10cm、検出長1.9mである。西側は途切れており東側は調査区外へ伸びている。埋土は茶灰色粘質土である。

溝7　調査区南側に検出した溝で東西方向に直線的に伸びた大溝である。横幅2.2m、深さ30cmである。両端が調査区外へ伸びている。埋土は、上層が黄灰色粘質土、下層が白灰色粘土である。溝底は南北方向にはわずかに舟底状である。埋土中から土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦質の土釜やすり鉢、湊焼甕、鉄滓等が出土した。また、全体に10～50cm大の礫が多く混入しており焼成を受けたものが多い。木炭が出土しており、鍛冶関係に使用されたものか、土釜が多く出土している事から炊飯に供したものかのどちらかであろう。

土坑1　溝1と溝2の間に検出した土坑で径50cmの円形ピットに舌状の突出部を持っている深さ15cm。埋土は茶褐色砂質土である。

土坑2　溝1の西側にきられた土坑である。横幅50×80cmの楕円形を呈する。深さ15cm、埋土は茶褐色砂質土である。

土坑4　溝5の上層に検出された土坑で径60cmの円形を呈する。上層はほとんど削平を受けており、底部に7個体の土師器小皿が出土した。同一向きに重ねておらず表裏背中合せにしている。深さは6cmである。

土坑7　土坑7は調査区北側の丘陵縁辺部の大型土坑である。調査範囲内ではその規模が知り得なかった。東西方向及び北側へ伸びる。南側肩部のみ検出した。東側方向にほぼ直線的で丘陵向きに直交し斜面に添うように下向している。やや幅のある階段状に落ち込んでいる。深さは最深部60cmを測る。遺物は、須恵器、土師器、鉄滓等が出土した。

ピット群　ピットは調査区北側を中心に合計26個を検出した。調査区範囲が限られる事から7・8世紀のピットと14・15世紀のものに分類でき、さらにそれぞれ掘方形状、規模、ピット埋土等差異が認められるが、詳細はあまり意味を成さないから省略しておきたい。

鍛冶炉1　東西80cm、南北58cmの方形の炉である。上層部分は欠損している。下層部分には

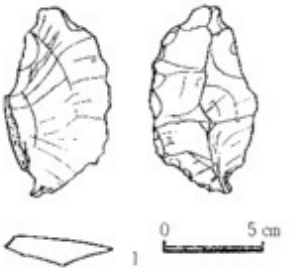
炭（非常に堅く固まっている）が約5cm位堆積する。底部は平底状であるが、凹凸が激しい。溝1につながる溝から炭・鉄滓・羽口が出土した。

鍛冶炉2　溝7の埋土上面に検出した炉で、東西70cm、南北48cm、深さ5cmを測る楕円形の炉である。底部は舟底状で、焼成を受け赤茶褐色に変色している。

第3節　遺物

調査によってコンテナ6箱の遺物が出土した。遺物は遺物包含層と前節で記述した各遺構より須恵器・土師器、瓦器、磁器、鍛冶関係遺物、石器、銅製品等、各時代の多岐にわたるものがある。その中で7・8世紀の遺物と14・15世紀の遺物が中心である。これは田辺遺跡の中心部に近い事もあり、遺跡の中心となる時期を示すものである。時代を追って述べたい。

石器（1）　当遺跡においては、後期旧石器時代の有舌尖頭器と翼状剥片及び縄文時代石鏃が出土している。(注1) 今回の調査では、サヌカイト製剥片、石核等が出土した。（1）は、縦長剥片の石刃である。幅が2.7cmと長さ4.8cmに比べてやや大きく刃部はわずかに簡単な2次調整加工が施されたものである。



図—16　石器

埴輪　試掘調査の折表採したもので3片出土した。調整が不明であるが、北側深い谷を狭んで向いの丘陵上に国分中学西古墳があり、この古墳出土埴輪と類似する。(注2)

須恵器（21～28）　須恵器は主に土坑7及び遺物包含層から出土した。ここでは主に遺構から出土したものについて報告したい。土坑7から杯蓋身（21・23・24・26）と甕口縁（25）と台付壺の底部がある。7世紀から8世紀にかけての遺物である。この他にピット7から出土した杯蓋身（22）がある。口径8.0cmを測り口径が小型化したもので、たち上がりは短く内傾し、受部は外上方へ伸び、底部は回転ヘラ削りを施し平らである。溝7から出土した高台を持つ須恵器は、高台が外下方へしっかり張り出している。色調は青灰色を呈しよく焼成されており他地域から搬入された陶器とも考えられる。

土師器（7～20）　土師器は全体に細片が多く遺構が全体に浅く遺存状態が悪い。7・8世紀代の遺物はとりわけ悪く実測にたえるものがなかった。作図した遺物は主に中世に属するものである。器種は小皿、大皿である。それぞれ口径、器高や口縁形態に相異が見られる。色調胎土で分類すれば、（18）は灰白色で精良な粘土を使用している。（9・12・15・17・11・14）は茶灰色、他のもの（7・8・10・13・16・19・20）は赤茶色を呈し、白色砂粒を割合含んでいる。（10）は土坑4から出土した。同器形のものが7個体ある。（19）は溝7、（20）は土坑7より出土した。他のものは遺物包含層である。

羽釜（31～36）　瓦質の羽釜が、（31・32・33・34・37）である。それぞれ口縁部が内傾し、肩部に幅の狭い鍔をめぐらす。口縁部外面には段・凹線をめぐらす。胴部外面は横方向の削り調整。内面はハケ目調整か板ナデによる。口径は17.2～30.8cmまである。(31)は口径が不明であるが、さらに大きくなるものであろう。(32)のみ復元し得た。器高／口径は0.63である。口径が器高を大きくうわまわる。この他に、胎土、形態に相異点が見られるものがある。(35)は、色調黄灰色で胎土は精良である。口縁部は内湾し、端部は外側へ折り曲げている。肩部は幅の狭い鍔をめぐらすと思われる。（36）は、色調薄茶灰色で、胎土は石英、雲母等微砂粒をよく混む。

擂鉢（38～41）　瓦質のもの（39・41）と赤茶色を呈する備前焼のものがある（38・40）。口縁端部は三角形に尖がり、内面はハケ目を部分的に施し、外面は削り調整である。

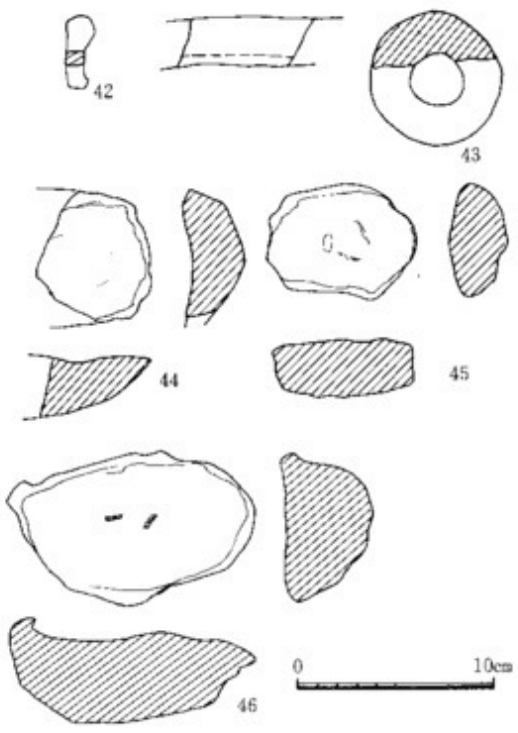
瓦質甕（30）　口径は不明であるが、体部に横方向のタタキを施し、口縁は内湾後大きく外側へ折り返した瓦質の甕である。

磁器（4～6）　（4）は青磁の椀底部である。緑灰色の釉を施す。（5）は、陶器の合子である。やや軟質な焼成の灰白色の胎土に淡緑色釉を施している。口縁はわずかに上方にたちあがり、外側へ一杯張り出した肩部には2～3条の沈線を施す。釉は底部を除き内外面全面に施す。底部は糸びきである。またX字のヘラ記号がある。（6）は、陶器の皿である。精良な須恵質の胎土に淡緑色釉と茶黄色釉を施したものである。これらは羽釜（36を除く）と共に溝7から出土した。

人形（29）　袈裟を着た僧姿をあらわした人形である。薄茶灰色に焼成された土師質のもので、頭部、脚部を欠損している。下方から細い棒を入れ鋳型をとって製作しているようである。胎土は精良である。

銅器（1・2）　（1）はピット15の底部に横位に埋納されたものである。どのような用途のものか不明である。何かつまみ様のものか。（2）はやや太細の差があるが、断面円形の銅線状のもので自在に曲げられている。

鍛冶関係の遺物（42～46）　(42)は釘か鍛冶遺構は寺院建造の際の釘等または集落内の生活用品の鉄製品を小規模に行なったもの



図—17　鍛冶関係遺物

であろう。（43）は鞴羽口である。砂粒を多く含んだ赤茶色を呈する。生駒西麓産のものではない破片であるが、同一太さの形態を成すと思われる。（44～46）はいわゆる椀形滓である。（46）は鍛冶炉１内より出土したものである。断面中には木炭が混入している。この他に砥石が１点出土している。安山岩製である。

その他に瓦が出土している。直ぐ南側に在る田辺廃寺の瓦と思われる平瓦片が数十点出土した。軒先瓦は出土していない。

第４節　まとめ

今回の調査によって注目すべき遺物と遺構が検出された。調査面積が狭小であるが、多様である。その主なものについて弱干の考察を加えたい。

遺構は、鍛冶炉２基が検出された。鍛冶炉―１は７世紀代、鍛冶炉―２は15世紀以降の炉である。前者は、長方形の箱型炉で小鍛冶用の炉である。焚口部を持つもので溝―１に連がる。溝―１は排水の為の溝とも考えられるが、その埋土からその様子は見られず鍛冶工房の一部を構成する道状遺構の可能性も強い。周辺には同様の鍛冶炉とその関連遺構が検出される可能性が高い。田辺廃寺建立前後の遺構として注目される。この時期と前後する遺構と遺物は、６世紀代の竪穴住居床面から出土した鉄滓や田辺古墳群の周濠から出土した鉄滓あるいは田辺廃寺南側の遺物包含層から出土した鉄滓等、田辺遺跡内の製鉄（鍛冶）関連の遺物や遺構の出土例が顕著である。特筆すべき事柄である。鍛冶炉―２は、溝―７の埋没後に造られた鍛冶炉である。楕円形を呈する炉―１より簡素な構造の炉である。また、溝―７の埋土中にも椀形滓といわれる鉄滓があり、周辺に同様の炉があるに違いない。

溝―７は、東西方向の人工的な溝である。この溝の東側には６～８m 方形の溜池があり、その中心部に向けて真直ぐに伸びる。溝と溜池の関係が注目される。溝の埋土中多くの礫や生活関連遺物が多い。中世の集落の一画にあたり屋敷内の一部分であろう。鍛冶炉―1周辺に多くのピットが検出され、規模が小さく小屋に属する家が建てられていた可能性が強い。その他にも用途不明銅製品がピット底に埋納してあり、僧侶の人形の出土など祭祀遺物も多彩である。

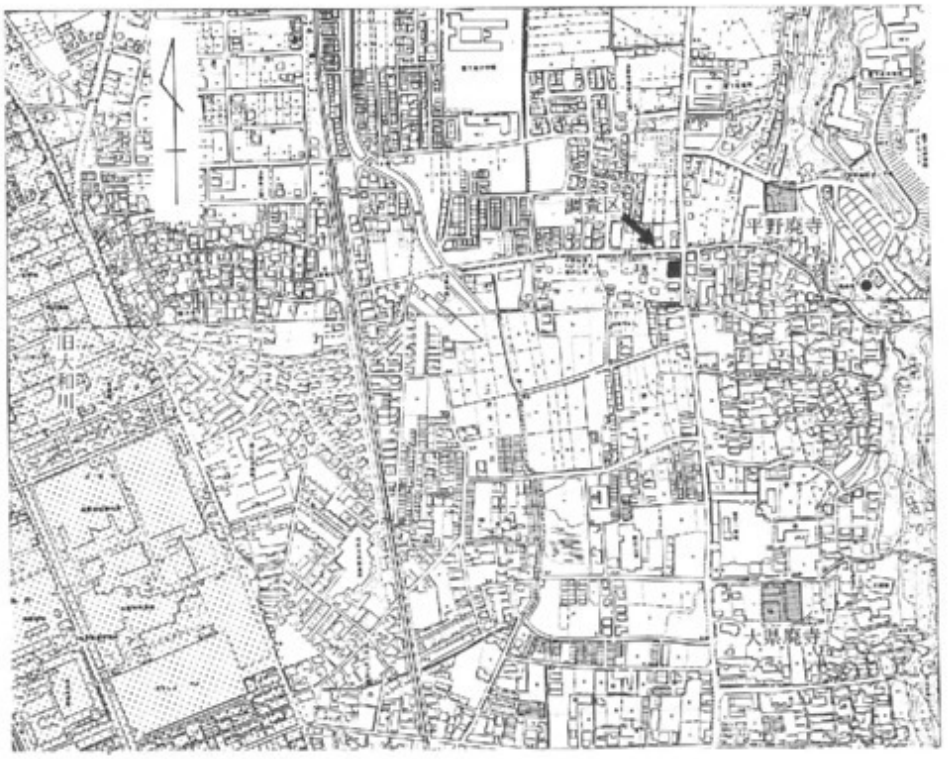
注１．柏原市所在遺跡発掘調査概報　　1982―Ⅶ

注２．柏原市歴史資料館に展示している。　５世紀前半

第7章　大　県　遺　跡

第1節　概　要

大県遺跡は、柏原市平野、大県にかけて所在する遺跡である。立地は生駒山地西麓の緩斜面地から、旧大和川の河道跡までの狭小な範囲に所在する。この生駒山地西麓には多くの遺跡が見られ、その中でも柏原市域に限れば、山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡とそれぞれ遺跡間の空間が見られない程、密集している。これらの遺跡は、生駒山地から派生する尾根及び開折谷によって、形成された扇状地に見られる。大県遺跡もその扇状地上に所在する遺跡である。遺跡の性格は縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良時代と続く大複合遺跡である。当調査区周辺はその中でも縄文時代から弥生時代の遺構及び遺物が多数出土する地域にあたる。当調査は、昭和57年８月20日吉村源逸氏から土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届出書が提出され、柏原市教育委員会が調査依頼のもとに発掘調査を実施したものである。その過程において文化財発掘における遺跡深度が深いという事情や下層土層が軟弱である事から遺構保存について十分な考慮が出来なかった事は今後の課題である。



図―18　調査区位置図

第2節　遺　構

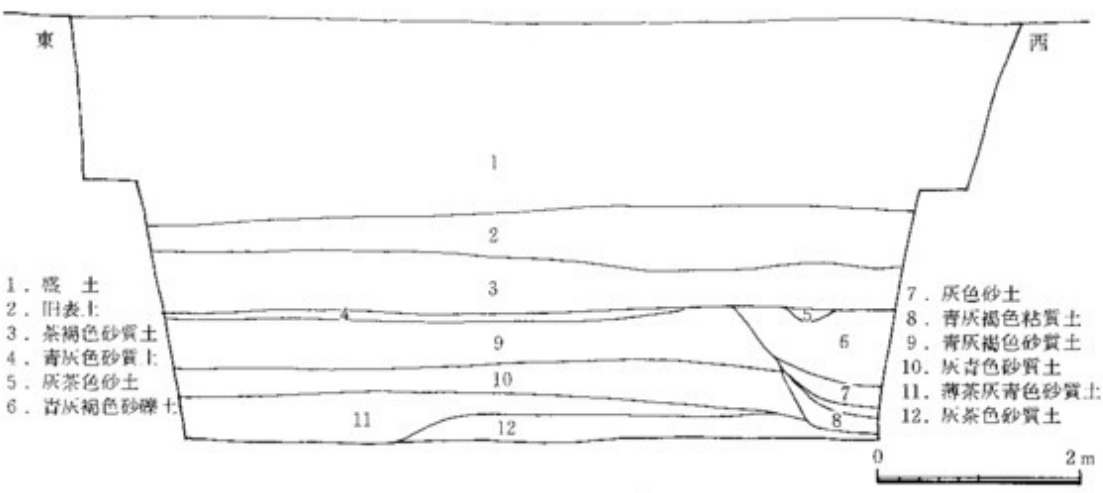
調査は昭和58年10月12日から10月13日の2日間である。遺跡が深い事から原因者提供の重機により掘削を実施し調査を進めていったが、上層より約2mは盛土を施こしておりその下層からは溜水ないし湧水も多く調査の為人力による掘削が安全上無理と判断された為、遺物包含層を重機によって掘削し断面観察のみを行ない、また、掘削した遺物包含土層の遺物採集を行なった。基本土層は、盛土、旧表土、遺物包含層3層、地山である。盛土は、昭和40年代調査も行なわれず削平した平野古墳群の切土であるという伝聞から土層中に古墳に関わる遺物を探したが何も出土しなかった。旧表土は、盛土前に耕作地であったらしく耕土、床土を含め20～60cm見られた。遺物は、須恵器・土師器の細片が出土した。遺物包含層の上層は、茶褐色砂質土である。出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器・瓦が出土した。古墳時代後期から中世に至る包含層である。礫はあまり含まず、遺物の包含量も遺跡の縁辺という状況ではなくほどほど出土している。堆積状況は、西方へやや下がり平行に堆積している。厚さは東側が厚く西側に薄い。40～60cmを測る。これは西側になるに従い遺物包含層が消滅して行くのではなく、上層の耕作

図—19　調査区平板図

土が西側でより深く耕やされているからと思われる。この上層遺物包含層掘削後に南北方向の溝が一条検出された。溝幅は、40～50cmである。深さは約20cmである。埋土は灰茶色砂土である。砂粒は1mm前後の中粒砂である。溝は北から南へ向って流れる様である。

中層の遺物包含層は、薄紫青灰色砂質土である。調査区東方3分の2全域に拡がる。厚さ20cm位までで土に弥生式土器が出土している。この包含層が途切れる西側から南北方向の溝が検出された。溝は横幅が不明であるが深さ1.3m以上を測る大溝である。埋土は上層が青か褐色砂質土、下層が灰色砂土と暗青灰褐色粘質土が互層になった土層である。溝肩部から急激に落ち込んでおり、人工的な掘削を思わせる。遺物は、上下層とも多くの弥生式土器が出土しているこの溝は、砂層が多い事もあり、湧水が特に激しかった。壁面が掘削後1時間も経過しない内にくずれ、その影響から盛土部分まで裂崩壊していった。調査区の前面が国道である為交通への支障があればとも考え調査の縮少をせざるを得ない遠因となった。

下層の遺物包含層は青灰褐色砂質土である。その主成分は生駒山地の塞性の花崗岩の風化土である。雲母、長石、石英を多く含む。厚さ50～60cmを計る。遺物は縄文式土器が出土した。遺構は、上層から掘り込んだ土坑が検出された。土坑は壁面整掃中に崩壊したため規模や埋土等細部については不明である。土坑には縄文晩期の甕が倒立に埋められていた。わずかに傾きを持っていた様である。甕内部には出土遺物は見られなかった。恐らく土器棺として使用されたものであろう。この層より下層は、灰青色砂質土、薄茶青灰色砂質土、灰茶色砂質土がそれぞれ20～50cm堆積していた。無遺物層である。



図—20　トレンチ南壁断面図

第3節　遺物

遺物は、縄文式土器、弥生式土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦、鉄器、サヌカイト、木片等が出土した。遺物量はコンテナ3箱分である。順を追って述べていきたい。

縄文式土器

今回の調査において出土した縄文土器はコンテナ1箱である。うち1点の完形品以外はすべて細片で、器形の全体を推測できる資料はない。時期は晩期前半期のものが主である。この土器が出土した層位は青灰褐色砂質土である。大県83—1次調査区の縄文時代包含層の暗灰色砂質土層に対応するものと考えられる。

23は、晩期中葉の甕である。唯一の完形に近い土器である。口縁部は短く「く」の字形に直立気味に外反し、やや胴部が張る体部をもつ。口縁部と体部との境はなだらかに移行している。底部は凹底である。口径は43.6cm、器高41.2cmを測る。胴部最大径は41.0cmを測り口縁部が胴径よりも大部張り出している。成形手法は、底部をまず作り、体部は1.7～3.0cm幅の粘土紐を積み上げている。口縁部はこの粘土紐を積上げの一工程として外反させて接合したものである。輪積みされた粘土と粘土の継目は、外面は2次調整によって判断しにくいが、内面はよくその痕跡を遺す。調整は、口縁部外面は巻貝調整をおこない、うすく水平方向のナデか二枚貝調整を施しているようである。体部外面は、ヘラ削りを施した後に繊維束状の条痕調整を行う。ケズリは、2.0～2.5cm幅のケズリを法則的に行う。ケズリ方向は下方から、底部から16・17cm位までの間をほぼ垂直にケズリあげ、それより上方は、口頸部に近ずくに従い水平方向の時計と逆回りのケズリを行う。口縁部と体部の境から3～4cmの幅の部分ではほとんど水平方向のケズリである。ケズリは、下半では全面に施こされているが、上半では部分的に空いているところも見られる。ケズリ調整後に、このケズリ方向にほぼ平行し、下方から上方に向けて繊維束状の条痕調整を体部全面に施す。内面は平滑な水平方向の板ナデを行なっている。時計回りと逆方向に3分割しナデている。原体の大きさは、8～10cm幅であろう。胎土は、角閃石、雲母、石英、長石を含む、いわゆる生駒西麓産の粘土である。色調は茶褐色、焼成良好である。

42は、晩期前葉の深鉢である。体部に2つの段をもうける形態のもので、上方の段をだけ遺存している。口縁部は長く、直立気味に伸び外反している。端部は平坦に仕上げている。段のある部分から端部にかけてうすく仕上げる。口径は25.8cmを測る。段の部分はわずかに口縁径より張出している。成形は、輪積みを行なう。段より下は約1.5cm幅、口縁部は3.5cm幅の粘土紐である。調整は、口縁部がナデ、段より下方は巻貝による水平方向の条痕調整である。その下方にわずかに斜め方向の巻貝条痕が見られるようである。内面はナデである。継目は顕著に遺存し雑な調整である。胎土は、角閃石、雲母、石英、長石を含む生駒西麓産の粘土である。

色調は灰褐色である。焼成良。

41は、晩期の浅鉢か深鉢である。口縁部は短く内傾し、やや外反気味につくっている。やや丸味のある段を有し屈曲を呈す。端部はまるみをおびつつ重厚なつくりである。調整は、口縁部外面は丹念な磨きを施し、体部は水平方向のナデである。削り又は条痕はきれいに消されている。内面もヘラ状のもので平滑な磨きを施している。このため、粘土の継目は観察されない。口径は21.6cm。胎土は、角閃石、石英、雲母、長石を含む。色調は茶褐色である。焼成は良。この他に破片が35片出土した。内18片は条痕調整がみられ、ケズリを施したもの10片ある。条痕の見られるものは、2枚貝を施したもの（24、25、26、27、28、29、30）、巻貝調整を施したもの（31）、繊維束状のものによる調整（32、33、34、35、36）、条痕後ナデを施こしている（37）がある。内面調整は、ナデか板ナデである。また、内面黒色摩研土器は、（23、25、27、34、35、36、39）がある。この中で、生駒西麓産のものと区別されるものに31と33がある。今回の調査によって、凸帯文及び沈線や凹線が施こされたものは全く出土しなかった。時期的に縄文晩期前半に含まれるものが多い。（北野）

図—21　縄文土器拓影

弥生土器

V様式の弥生土器が出土している。胎土は、ほとんどが角閃石を含む褐色の河内特有のものである。

1は、長頸壺の口頸部である。緩やかに外反する口縁部の端部は丸く納める。外面は縦方向のハケ目、口縁部内面は、横方向のハケ目の後横ナデを施す。

2は、小型の甕と思われる。口縁部は短く外反し、体部はあまり張り出さない。頸部内面に粘土紐の痕跡が残る。

3は、直口の逆円錐形の鉢である。口縁端部はそのまま終る。外面は底部から体部までラセン状に叩き目を施す。口縁部はナデ。内面はヘラ削りを施し、底部には放射状の工具痕が残る。底部内側から焼成前に小円孔を穿つ。

4・5は、器台である。共に円筒状の体部から口縁部と裾部が外反してつづく。4の端部は共にそのまま終る。外面は共にハケ目の上から縦方向のヘラ磨きを施す。5は、体部径5.8cmに対し、体部長約15cmと細長く、上位と裾部にそれぞれ4ヶ所の小円孔を穿つ。裾部内面は荒いヘラ削りで仕上げ、粘土紐の痕跡がよく残る。4は体部中位に3方向から小円孔を穿つ。

6は、ラッパ状に広がる壺の口縁部である。口縁端部は下方に肥厚する。外面は縦方向の、内面は斜め方向のヘラ磨きを施し、無文である。色調は乳橙色を呈し、河内産の土器に比べ胎土が細かい。摂津系のものか。

9は、球形に近い器体に短く直立する頸部がつづき、口縁部が短く外反する壺である。口縁端部はそのまま終る。外面は、縦方向のヘラ磨き、内面は頸部から口縁部にかけて横方向のヘラ磨き、体部はナデて仕上げる。

7・8・10は、甕である。口縁部は「く」の字に外反し、端部はそのまま終る。7は、外面を板状のハケで整形する。煤が外面口縁部と頸部の境及び体部に付着している。8・10は、体部が張り出しラセン状に叩き目を施す。

11～21は、壺・甕又は鉢の底部である。13～15・20・21は外面中央部がやや凹む。12は上げ底状を呈し、外面がくびれる。19は器壁が薄く、内外面共にヘラ磨きとナデで丁寧に仕上げられており、球形の体部をもつ壺の底部と思われる。18は焼成前に内側から穿孔されており、16と共に、ラセン状の叩き目を施す。15・16・18・20・21は内側に放射状の工具痕が残る。16は内面に煤が厚く付着している。12は淡褐色を呈する。他地方の土器か。　（大塚）

須恵器

須恵器は1点出土した。当調査区北接地においての調査において5世紀後半から6世紀前半の遺物包含層が検出されているところから、当遺物も同時期の遺物に包含されよう。

たちあがりは、内傾後短くほぼ垂直に立ちあがり端部は平らで内傾する。受部は水平にのび端部は丸い。底部は欠損する。受部やや下方より回転ヘラ削りを施す。色調は赤茶色を呈し、焼成はやや不良で土師質である。胎土は精良であるが白色黒色微砂粒を含む。

その他の遺物に、土師器、瓦、木器等が出土した。

第4節　まとめ

大県遺跡は縄文時代の遺跡である。近隣では、国府遺跡や恩智遺跡にみられるような各時期が継続する大遺跡に匹敵する事が予想される。

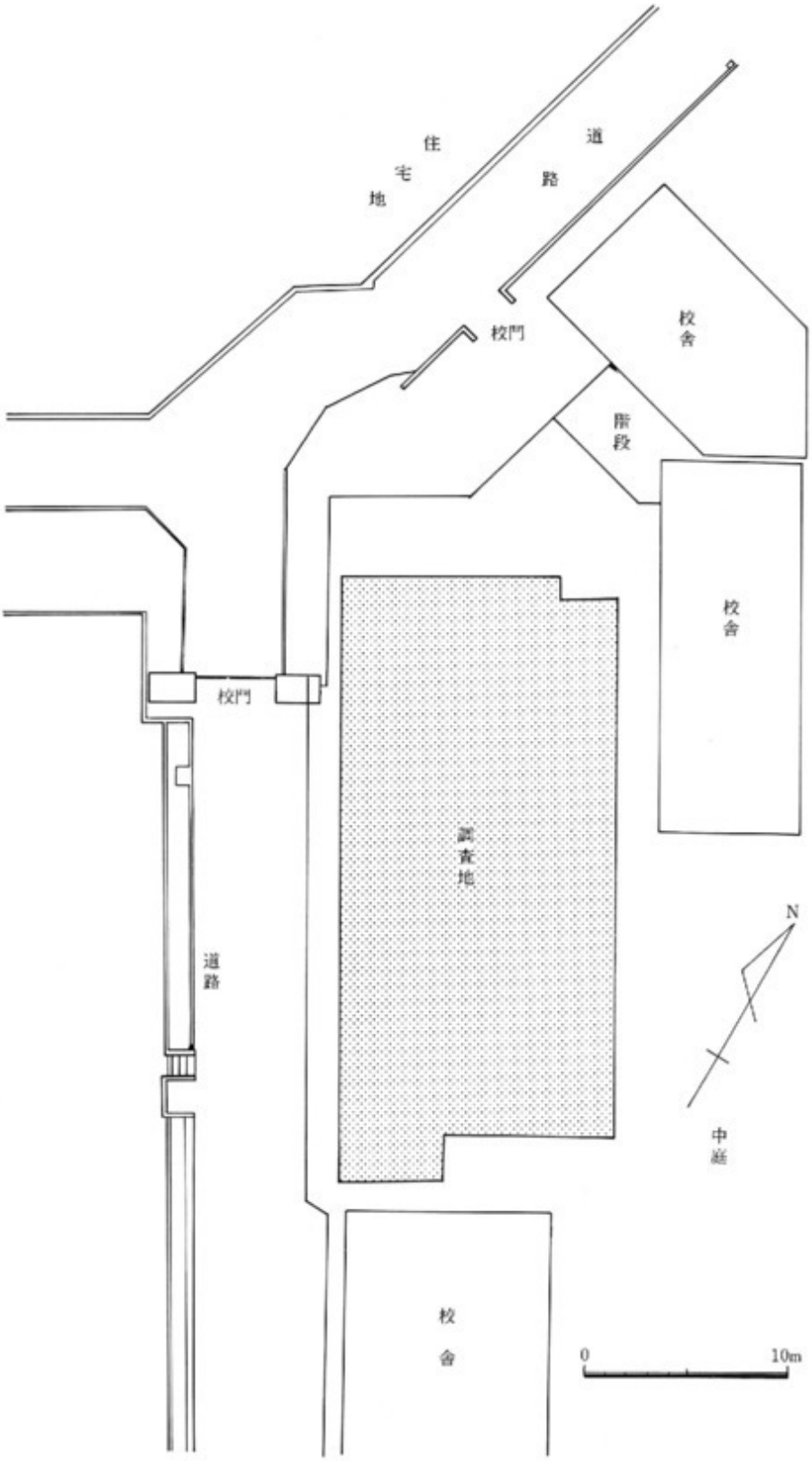
これまでの調査例から見れば、縄文土器の出土分布は東西方向200m、南北方向150mの範囲に見られ、この範囲も点と線の調査しか行っていない事や遺跡の深度の問題を考慮すると、今後の調査の増加によってもっと拡大する可能性が高い。遺跡の立地は、生駒西麓の扇状地上の地表下1.5m～5m下層の標高15.0m～18.5mに位置する。

当調査区の北隣りの大県83—7調査区では、中期、後期、晩期に至る遺構と遺物が検出された。今回の調査によって明確な遺構は検出されていないものの断面の観察によって縄文時代晩期前半の生活面を見い出したと考える。調査区の場所の変化が、つまり標高の相異が出土土器の時期変化を如実に示している。当地区の環境はほとんど民家が密集している為あまり調査例の増加は望めないが、遺跡の旧地形を復元するための事例を待ちたい。

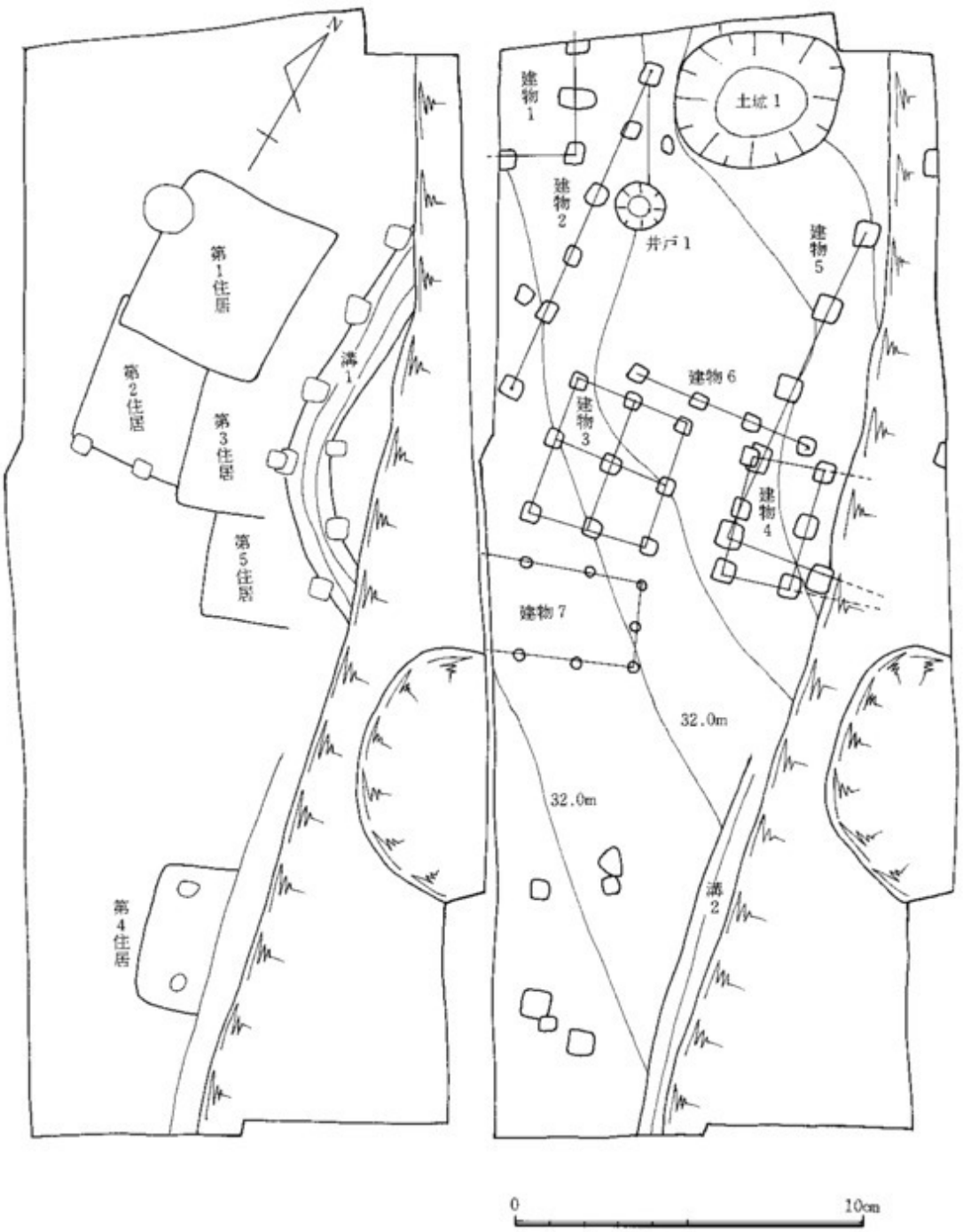
また、弥生土器が人工的(?)な大溝の埋土中から多量に出土した。弥生土器の出土範囲は縄文土器の出土範囲を含め、南北に大きく拡大する。縄文時代と同様遺物の出土があるものの遺構の発見が少なく大県遺跡の弥生文化を考えるにあたりその端緒に着いたばかりである。

図　　版

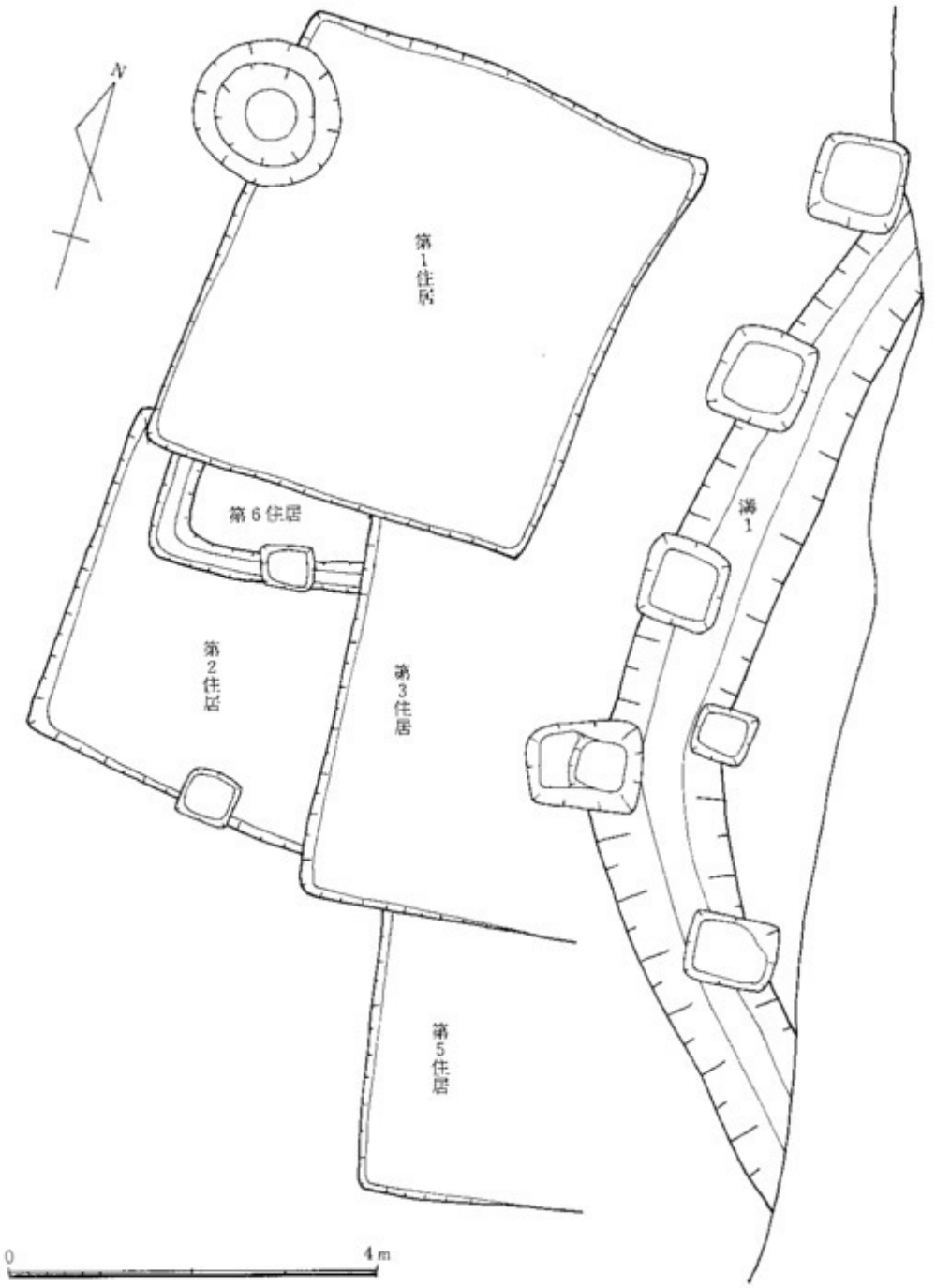
図版一　平板図

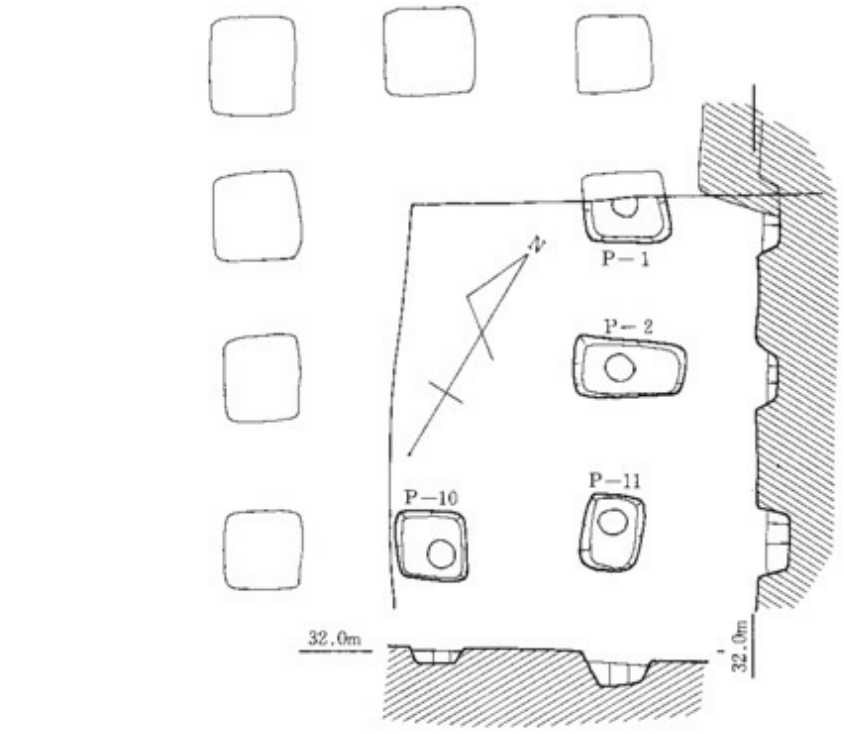


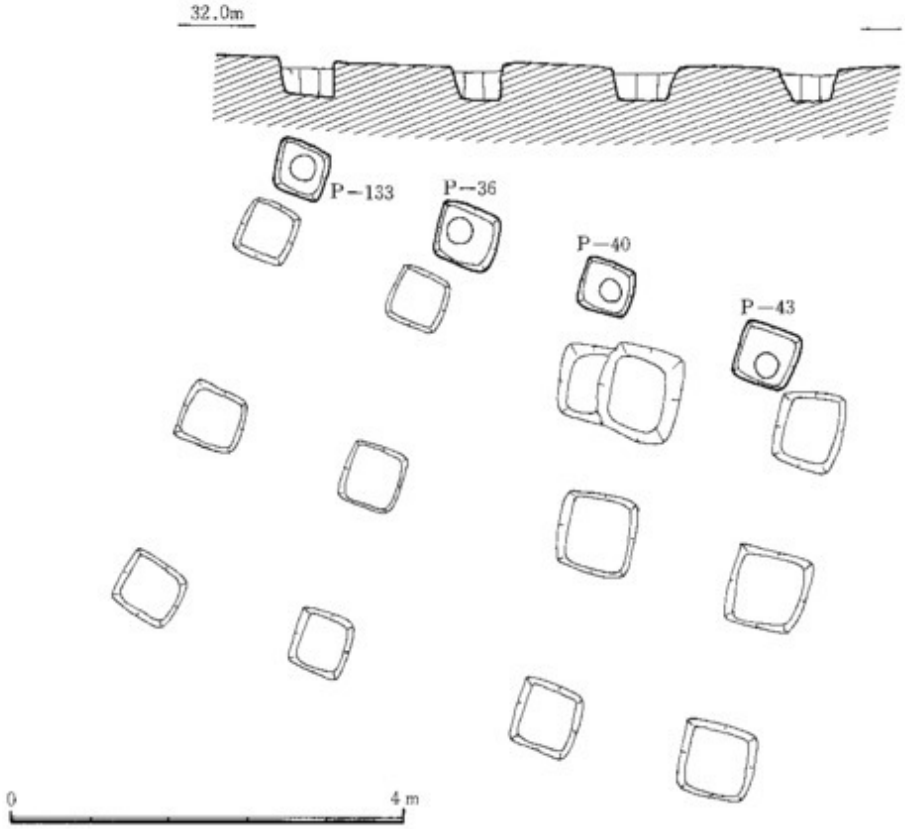
図版二　遺構図　古墳時代・七、八世紀(左・右)



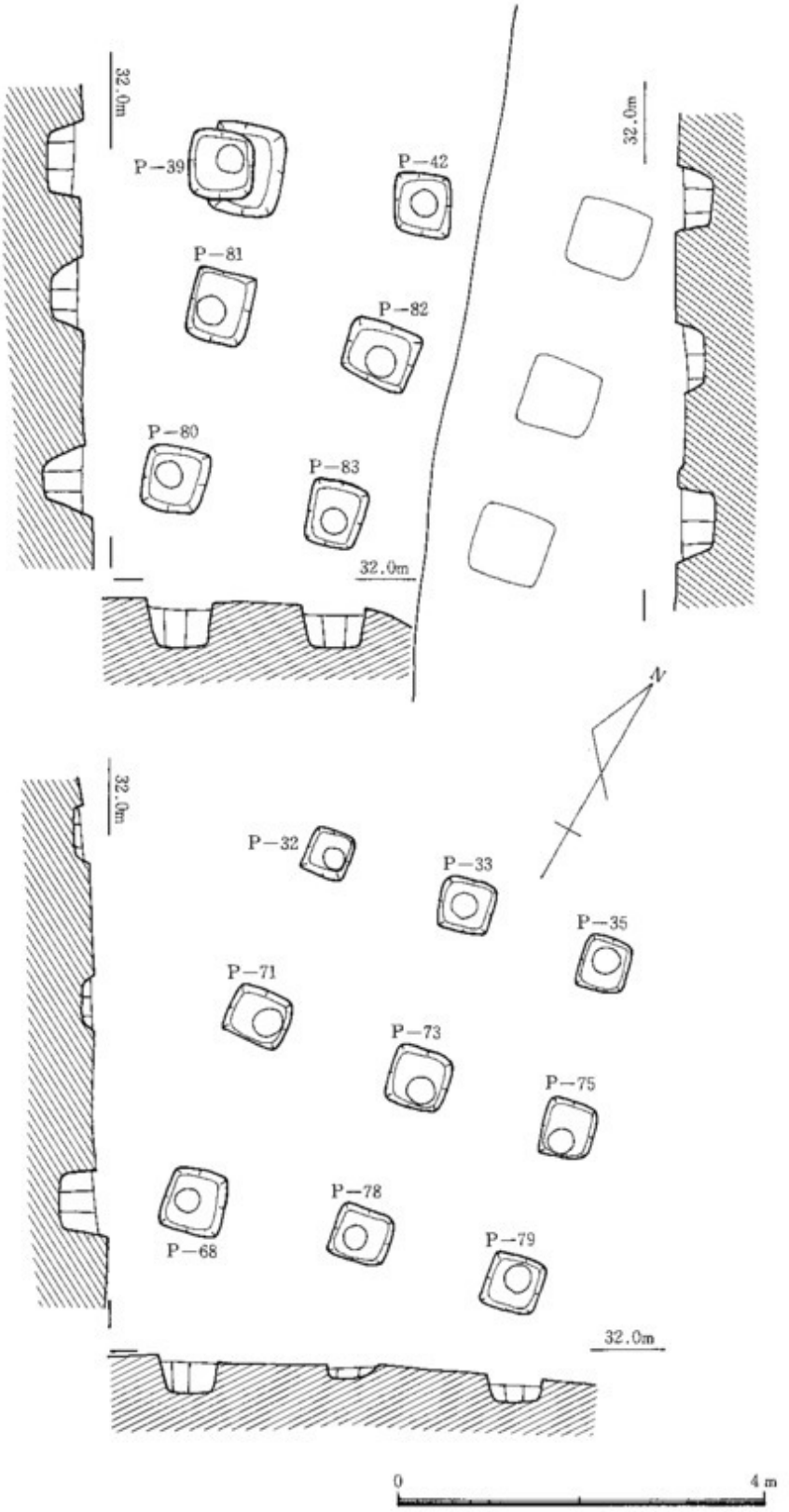
遺構図 古墳時代　7・8世紀


N
第1住居
第6住居
第2住居
第3住居
第5住居
溝1
0
4m

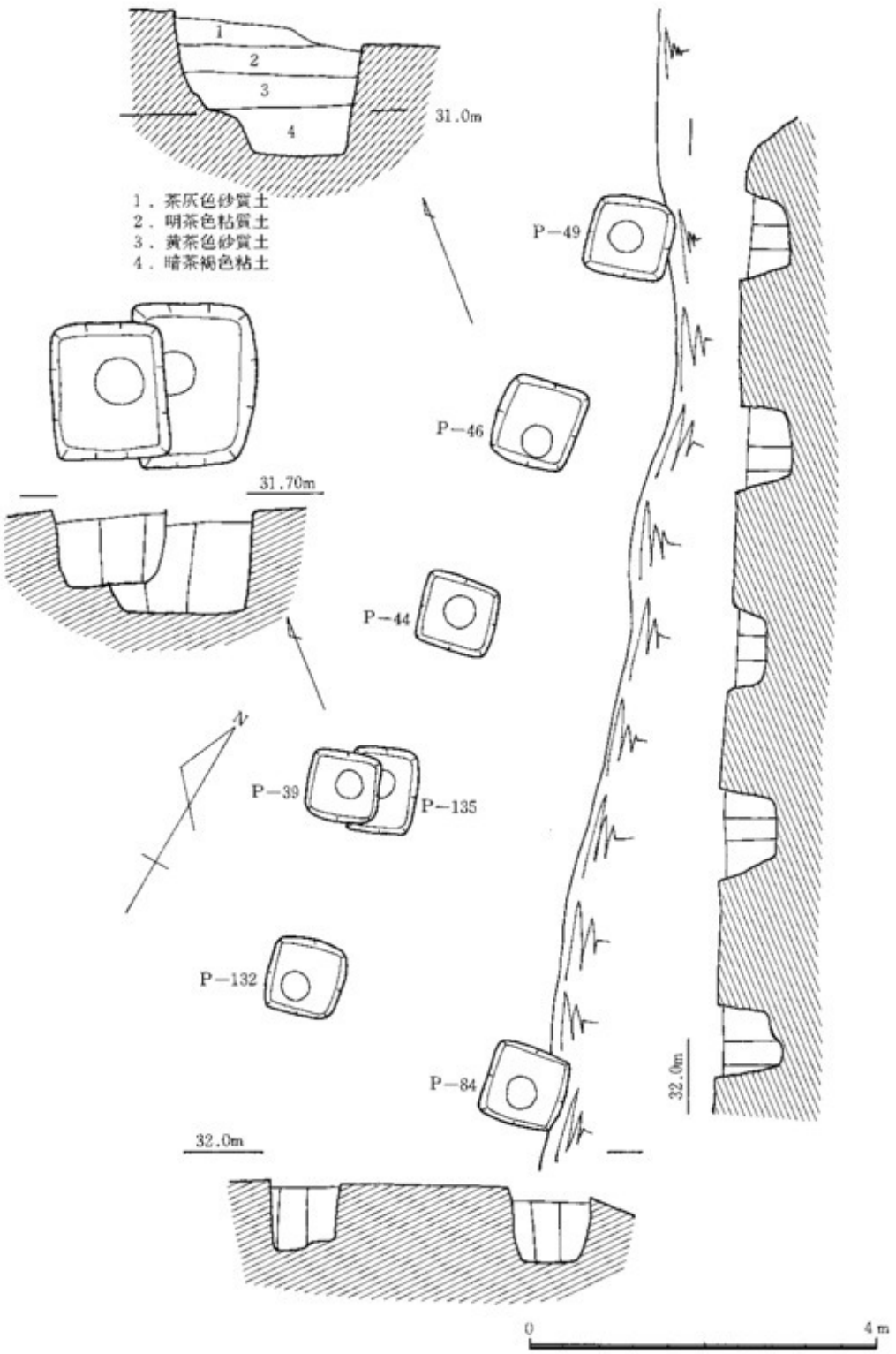




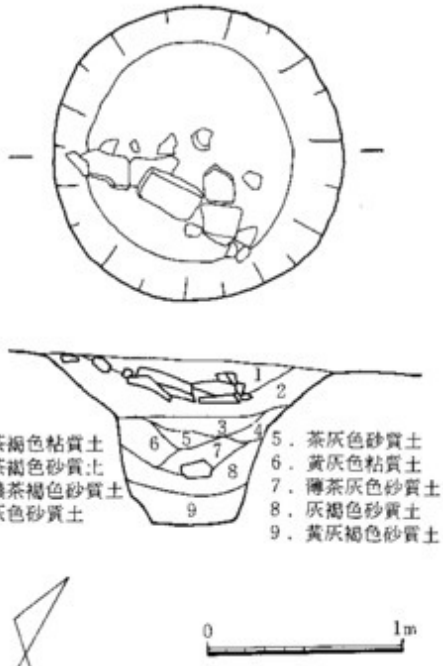
建物1・6（上・下）


32.0m
P−39
P−42
P−81
P−82
P−80
P−83
32.0m
32.0m
N
32.0m
P−32
P−33
P−35
P−71
P−73
P−75
P−78
P−68
P−79
32.0m
0
4 m

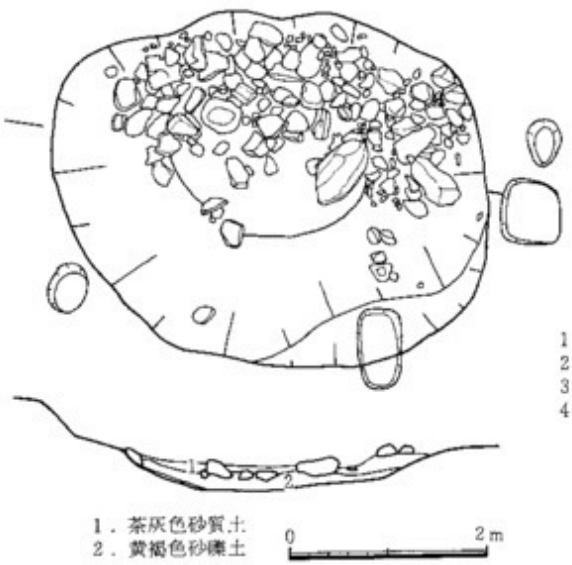
建物３・４（下・上）


1
2
3
4
31.0m
1．茶灰色砂質土
2．明茶色粘質土
3．黄茶色砂質土
4．暗茶褐色粘土
P−49
P−46
31.70m
P−44
P−39
P−135
P−132
P−84
32.0m
32.0m
0
4m

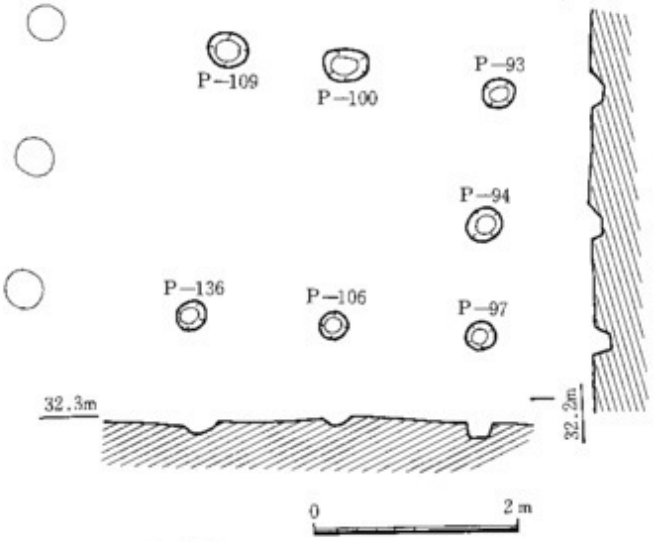
井戸1



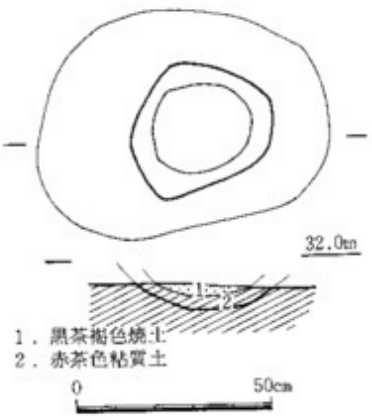
土壙1



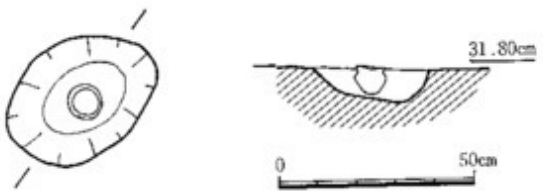
建物7



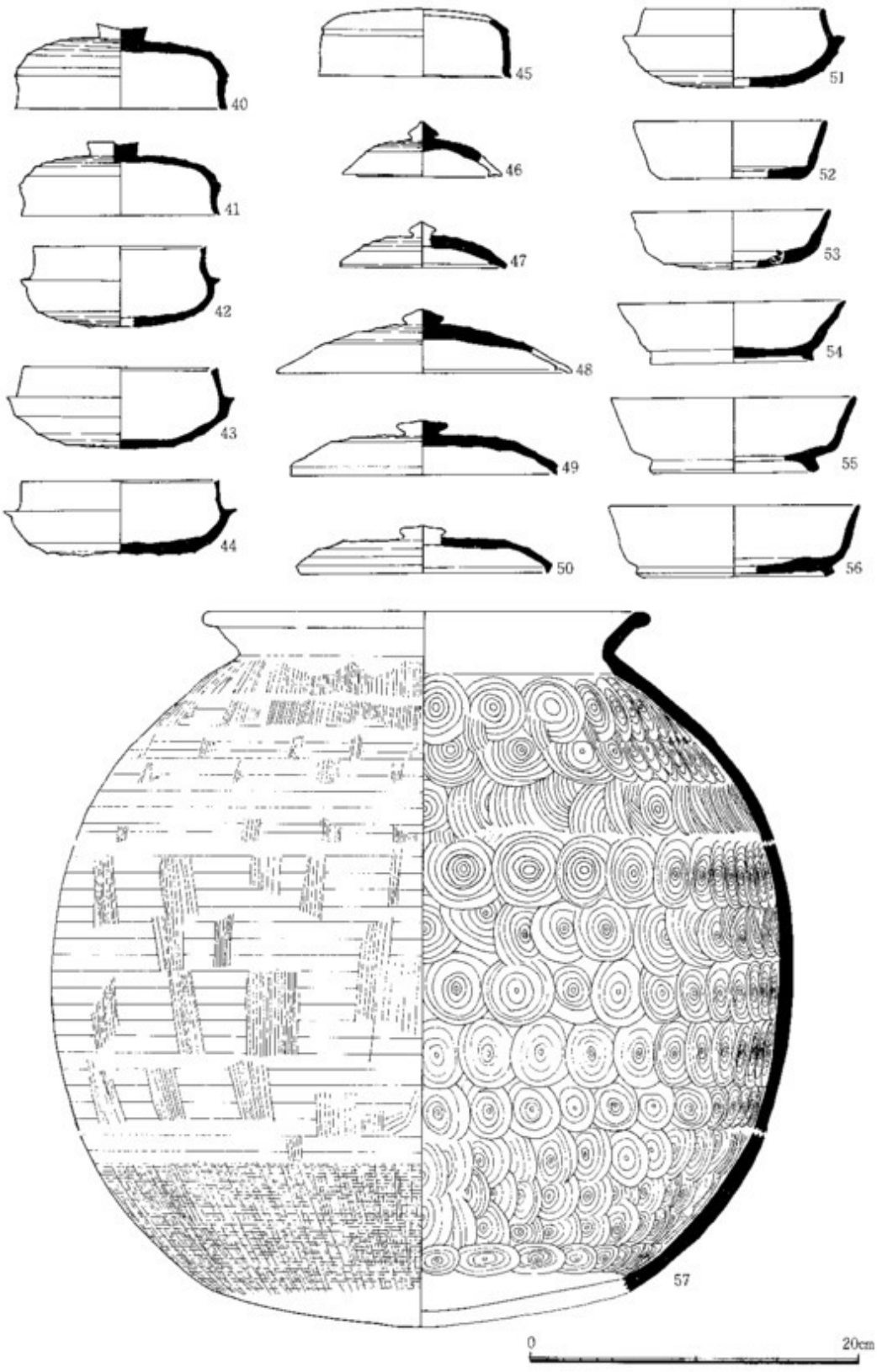
鍛冶炉

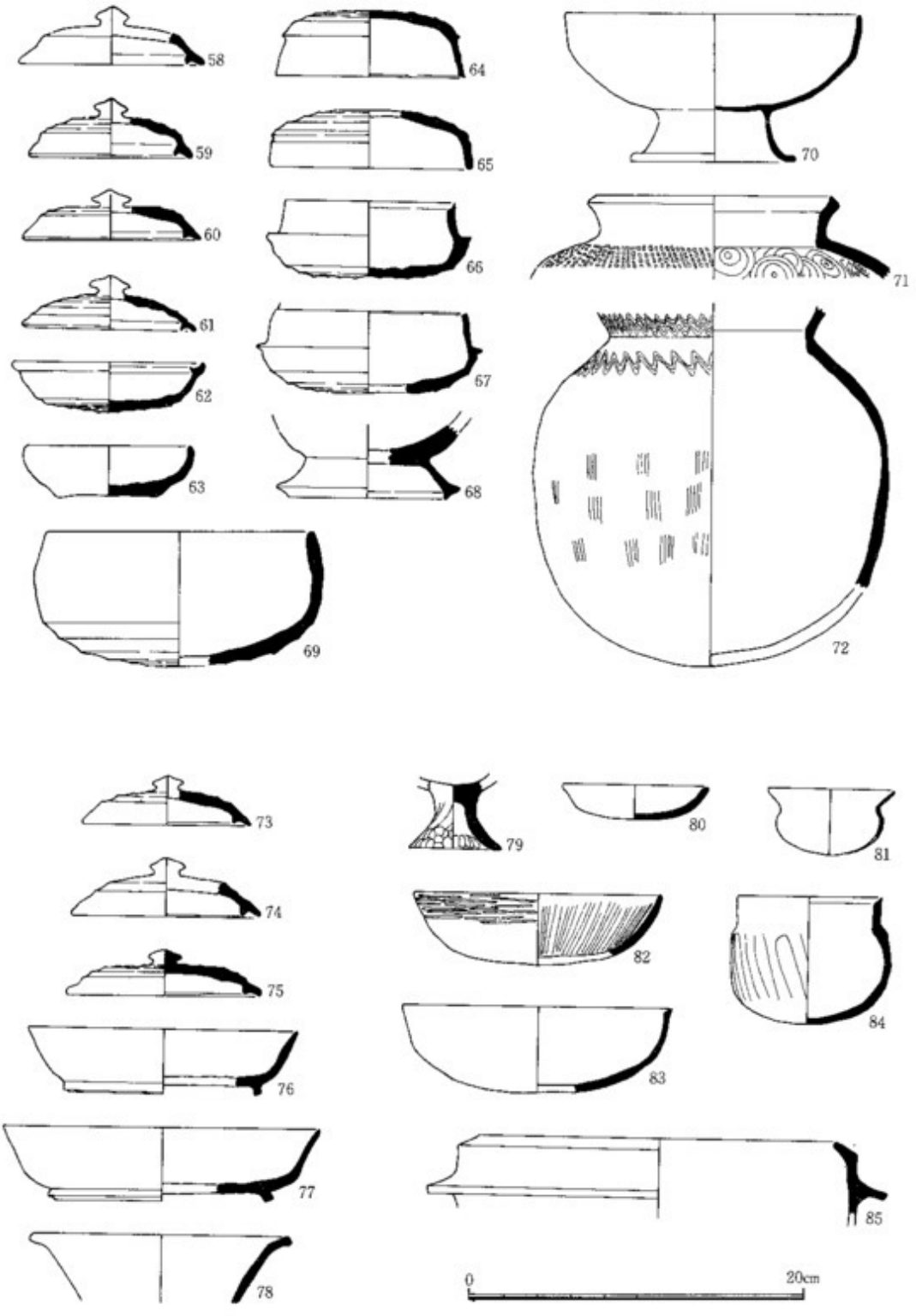


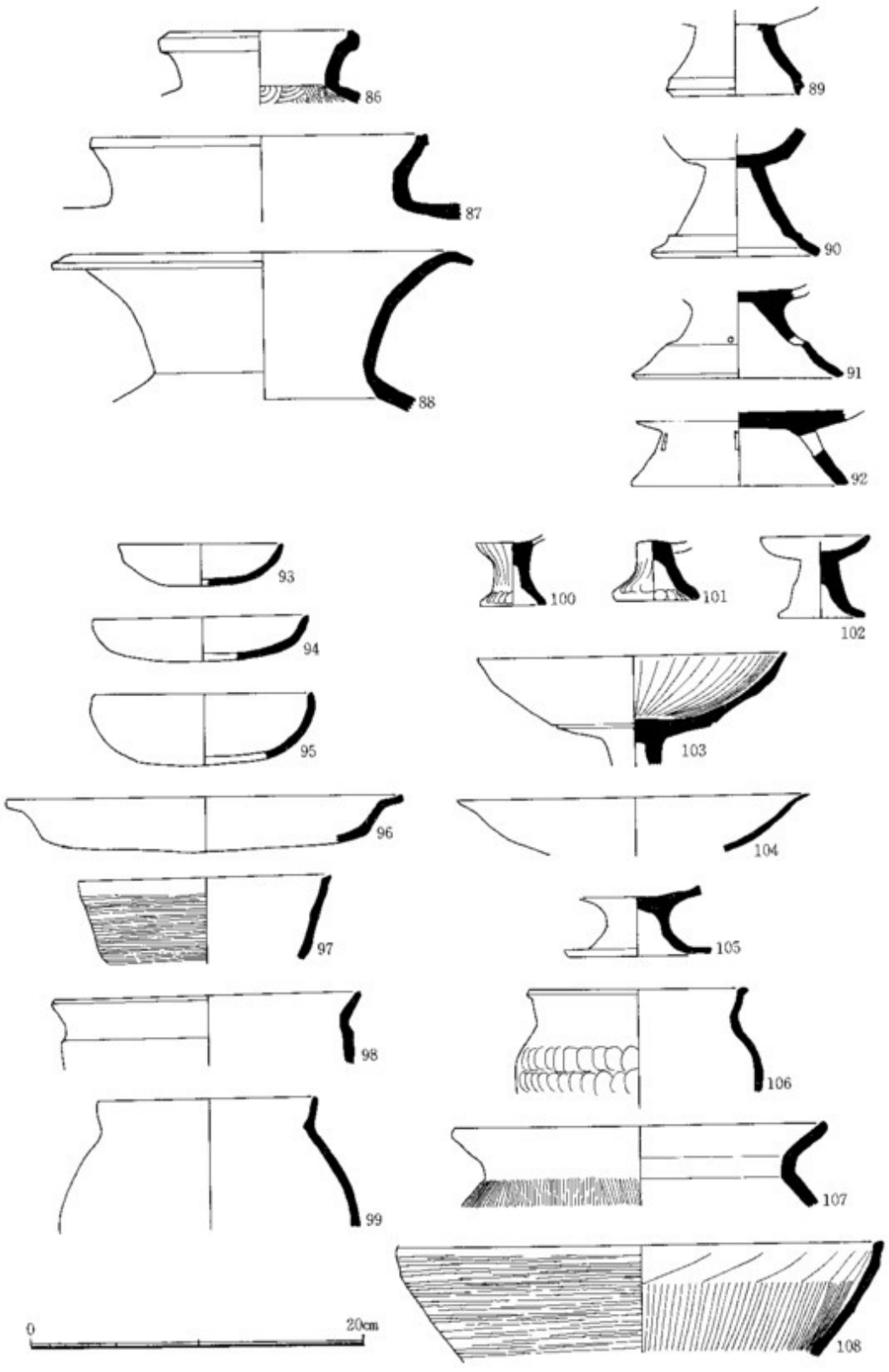
土壙墓1

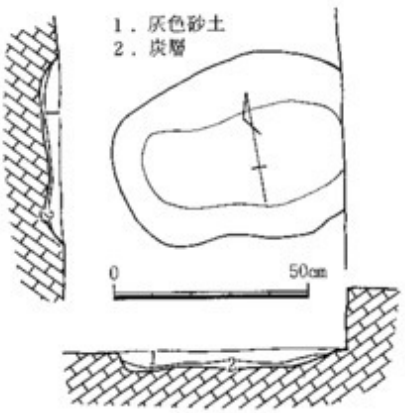


左上　土壙1
右上　井戸1
左中　建物7
右中　鍛冶炉
左下　土壙墓

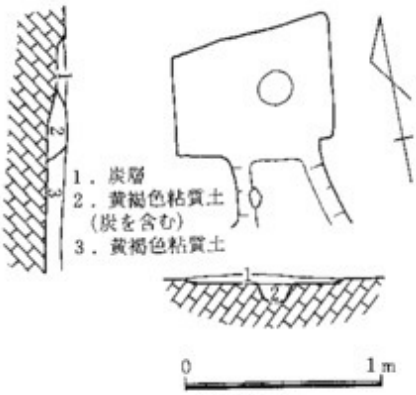

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
20cm


58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
0
20cm

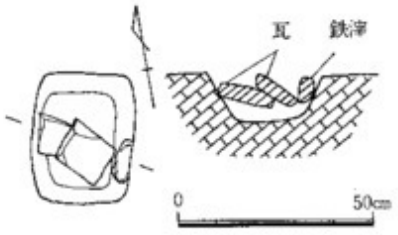

86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0
20cm



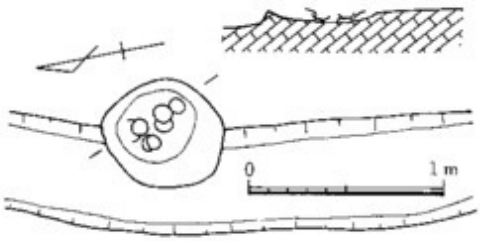
鍛冶炉－2



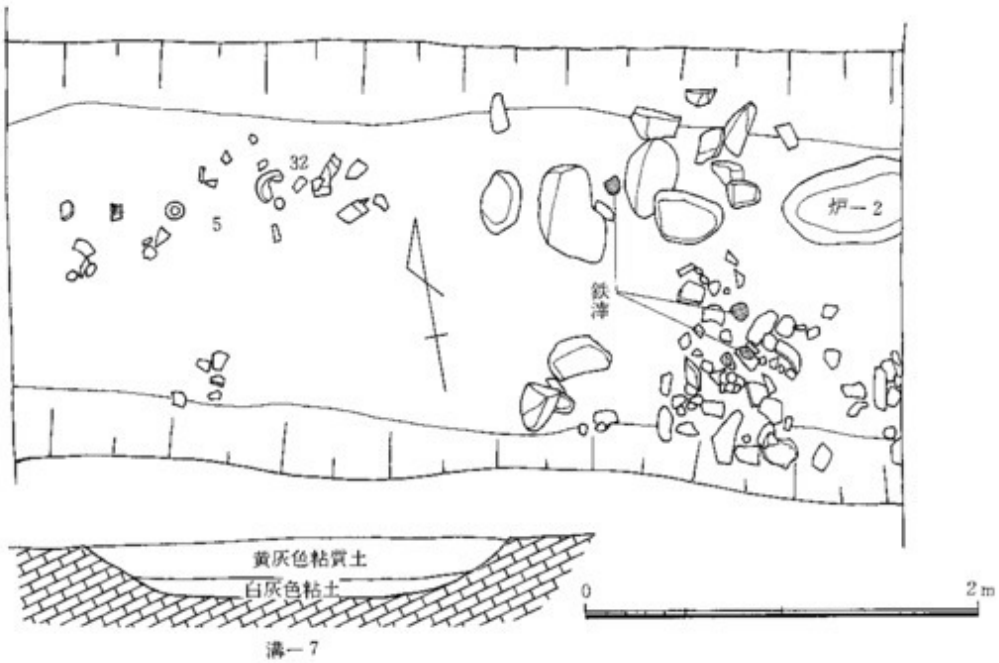
鍛冶炉－1



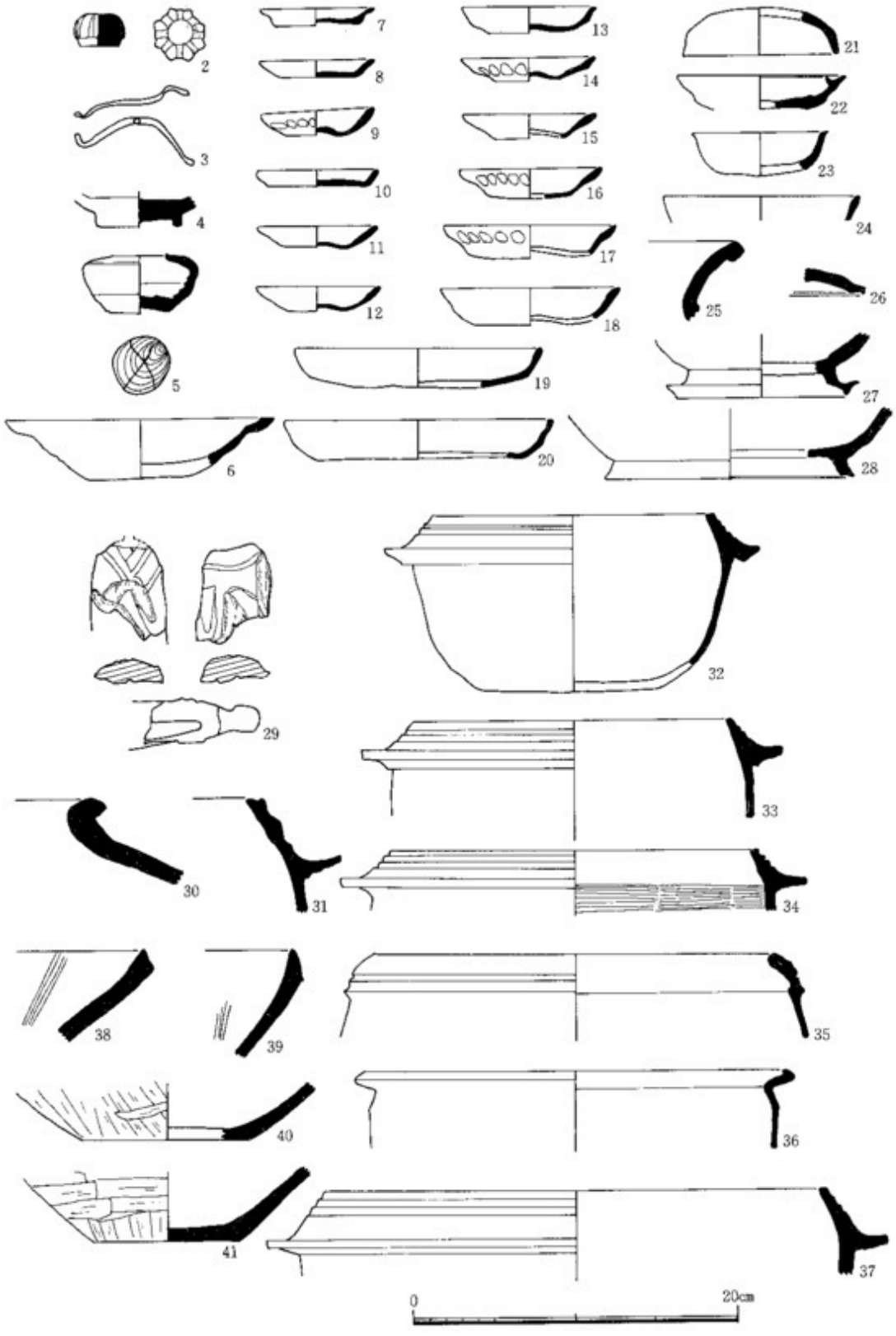
P－9



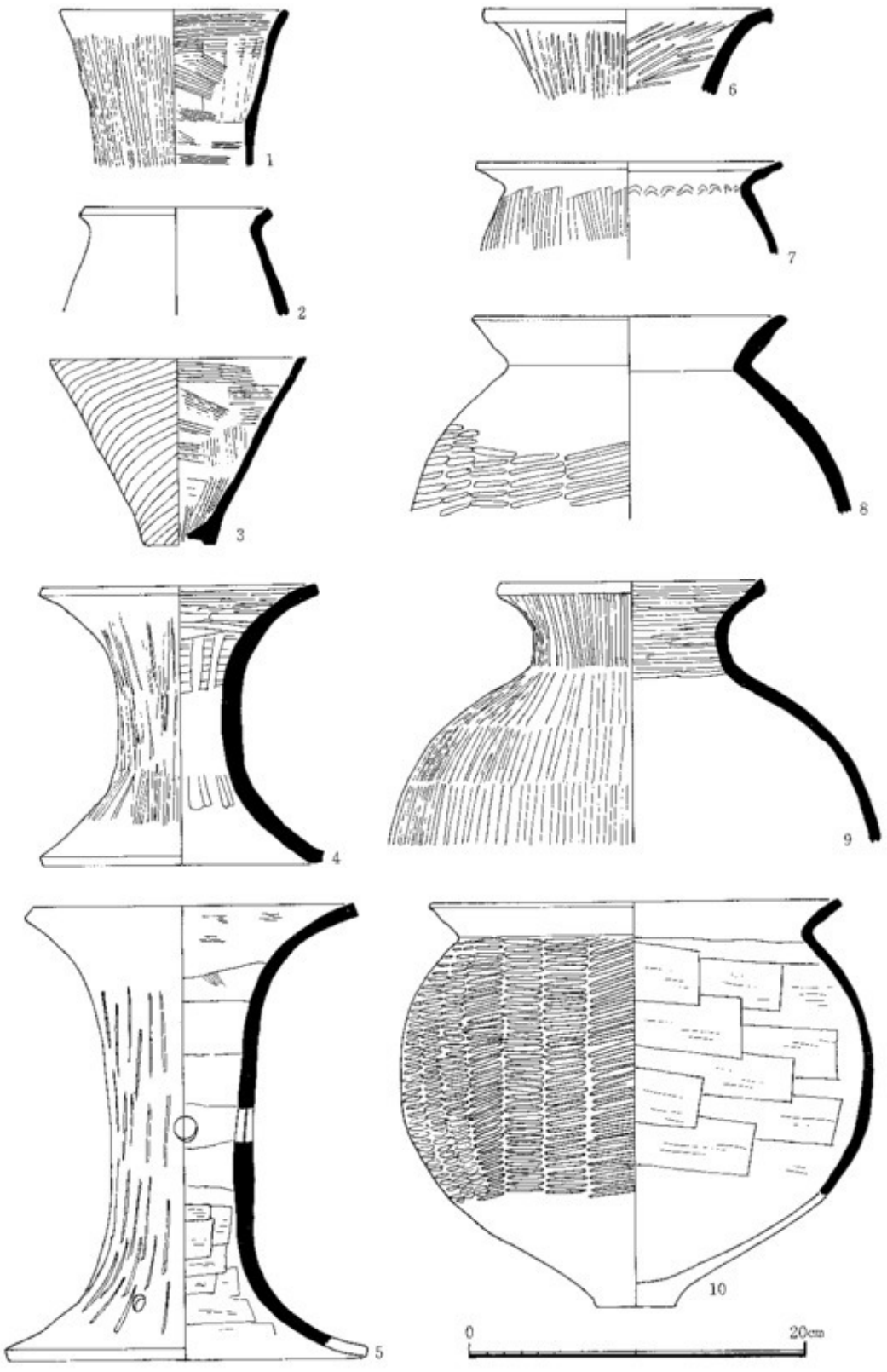
土坑－4

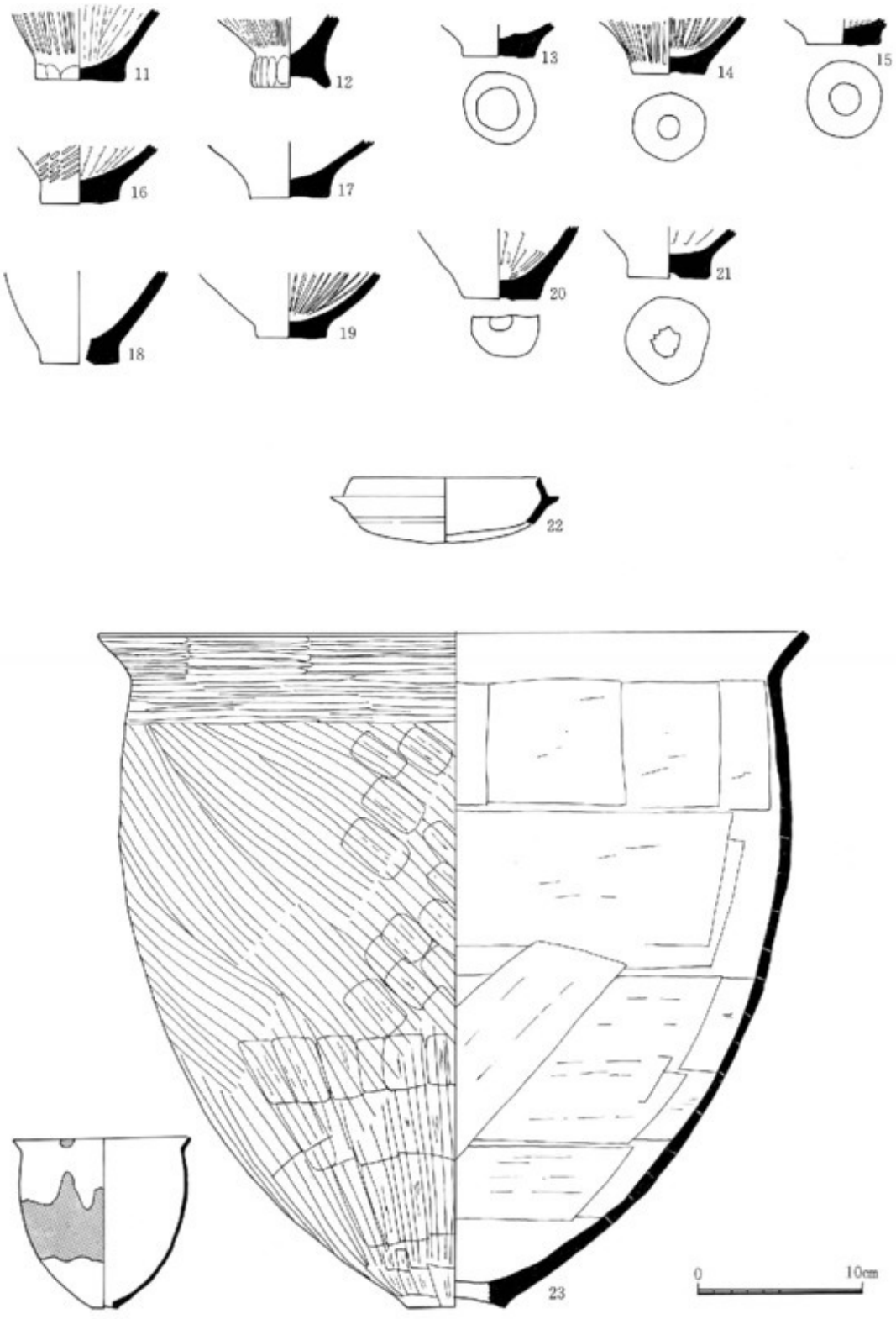


溝－7

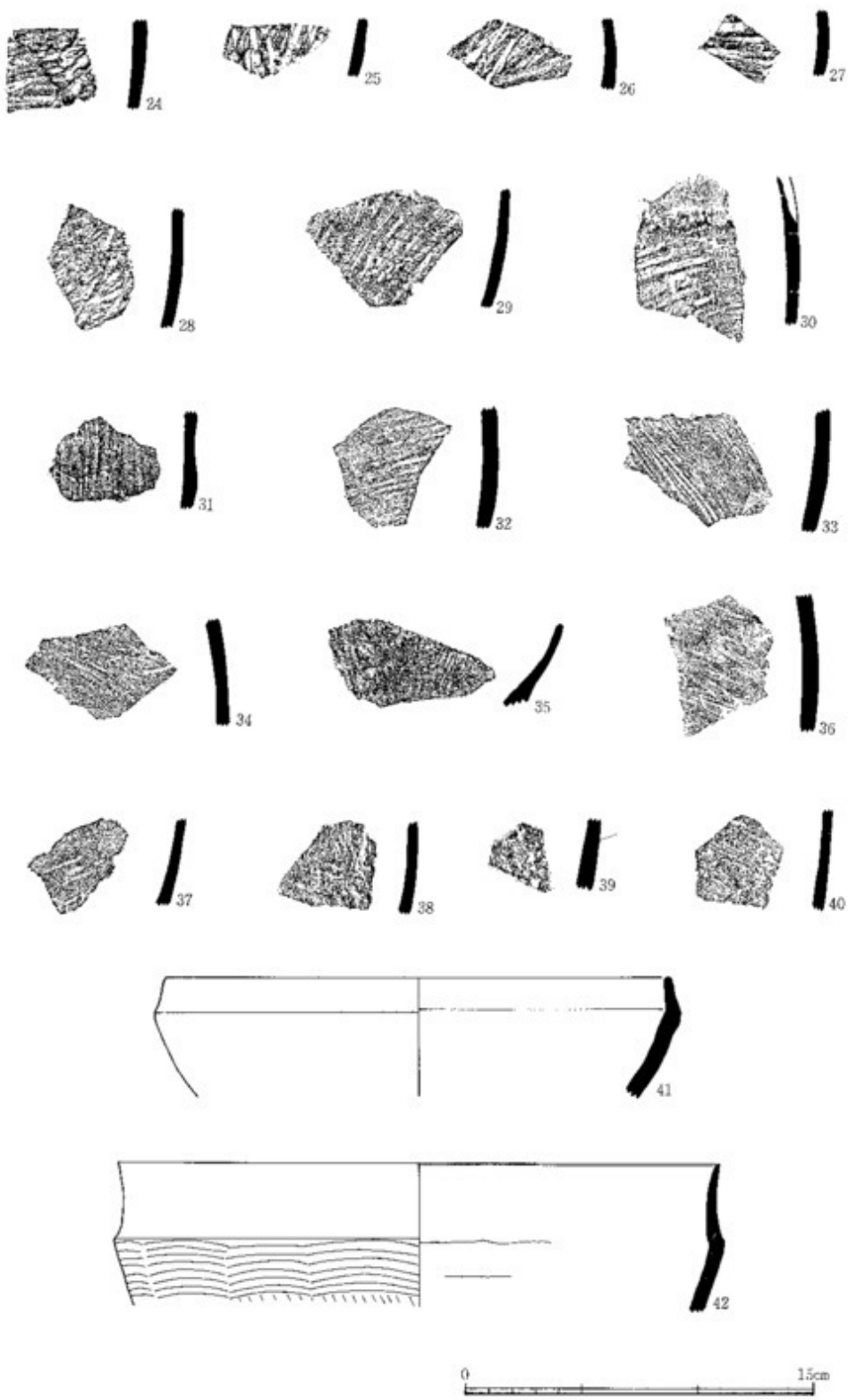

2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
20cm

田辺84-2　出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
20cm

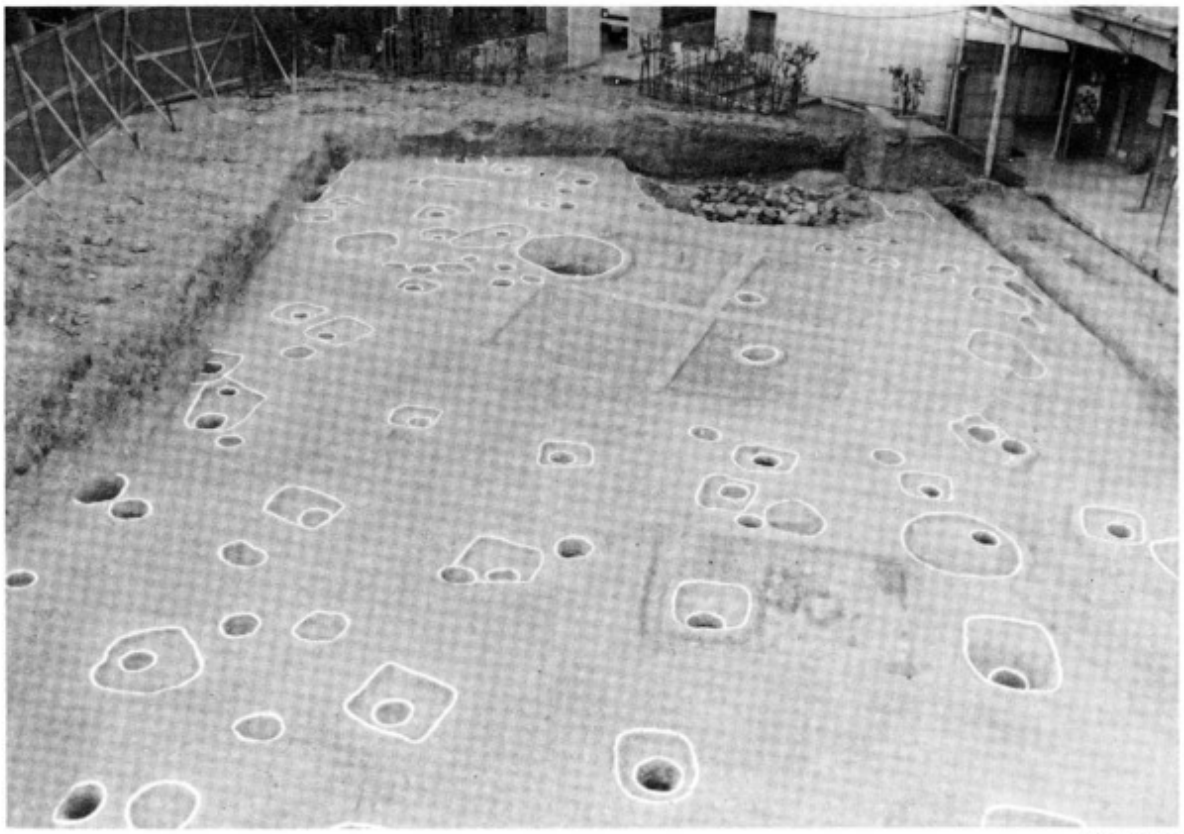


大県83-6　出土遺物実測図

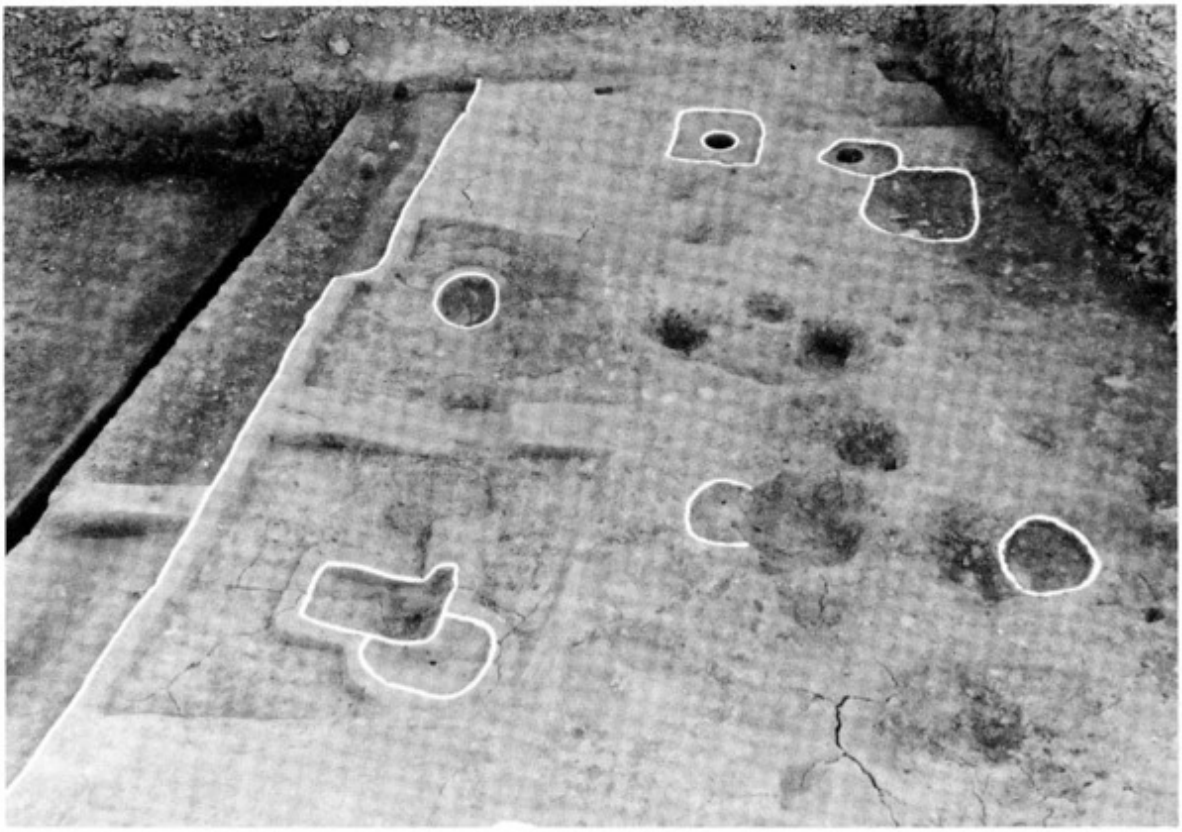


大県83-6　出土遺物実測図・拓影（縄文土器）

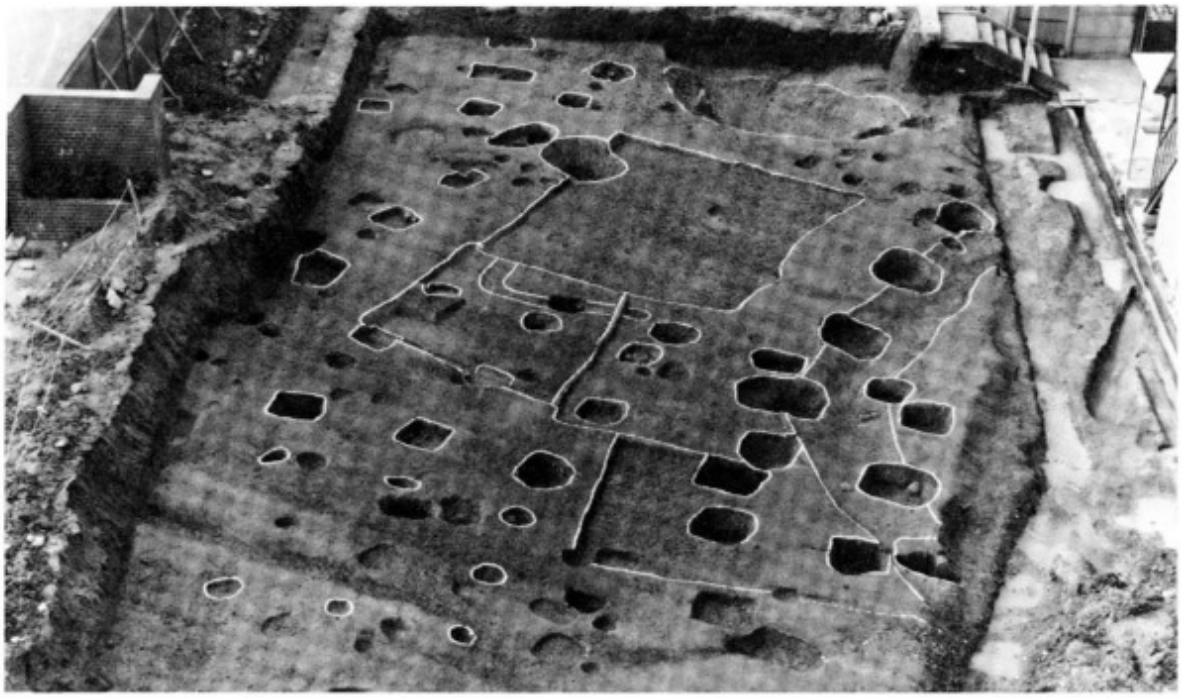
調査区から遠望　原山廃寺と玉手山丘陵



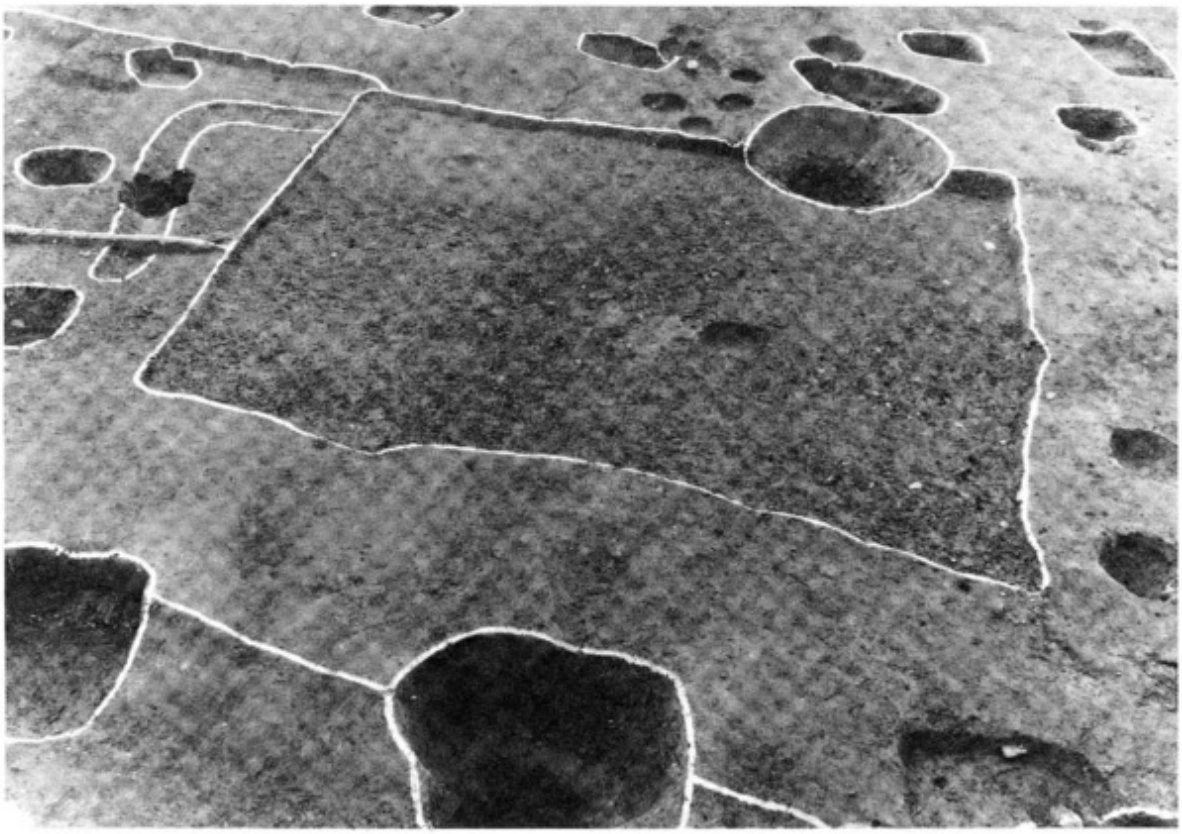
北側全景



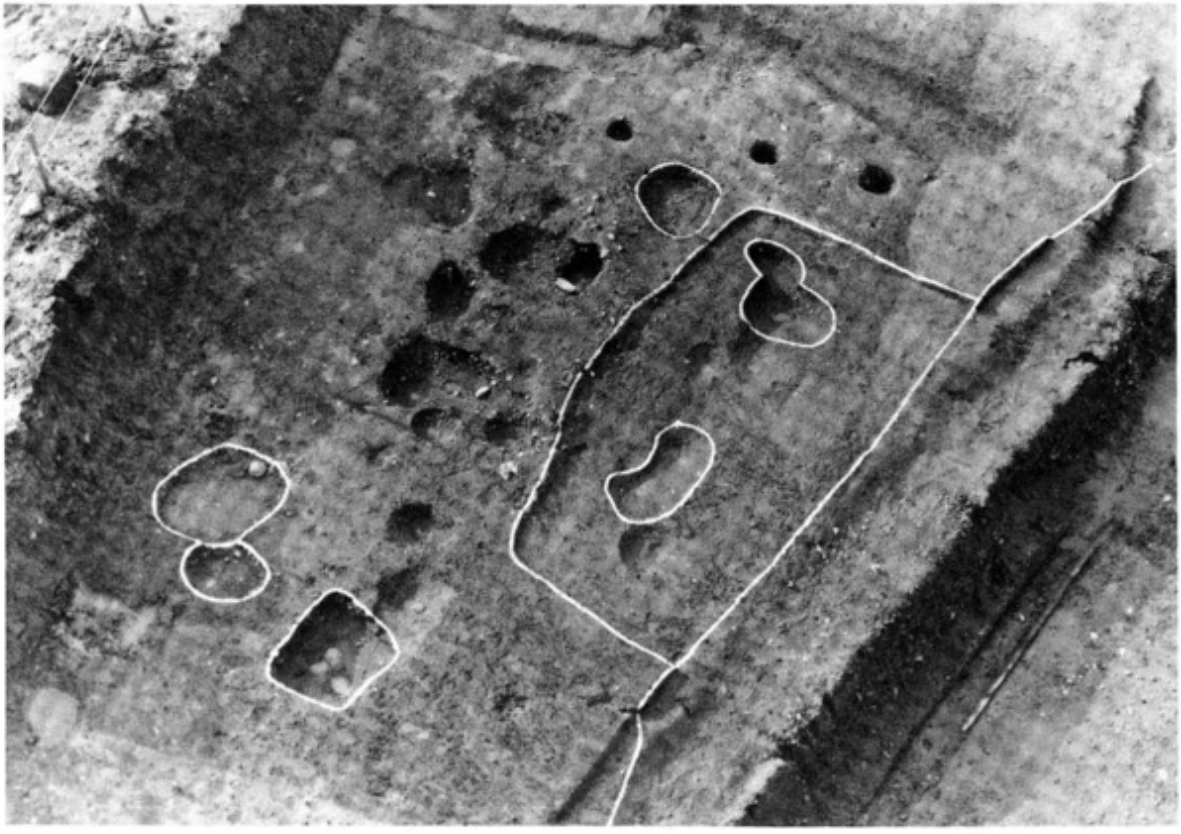
南側全景



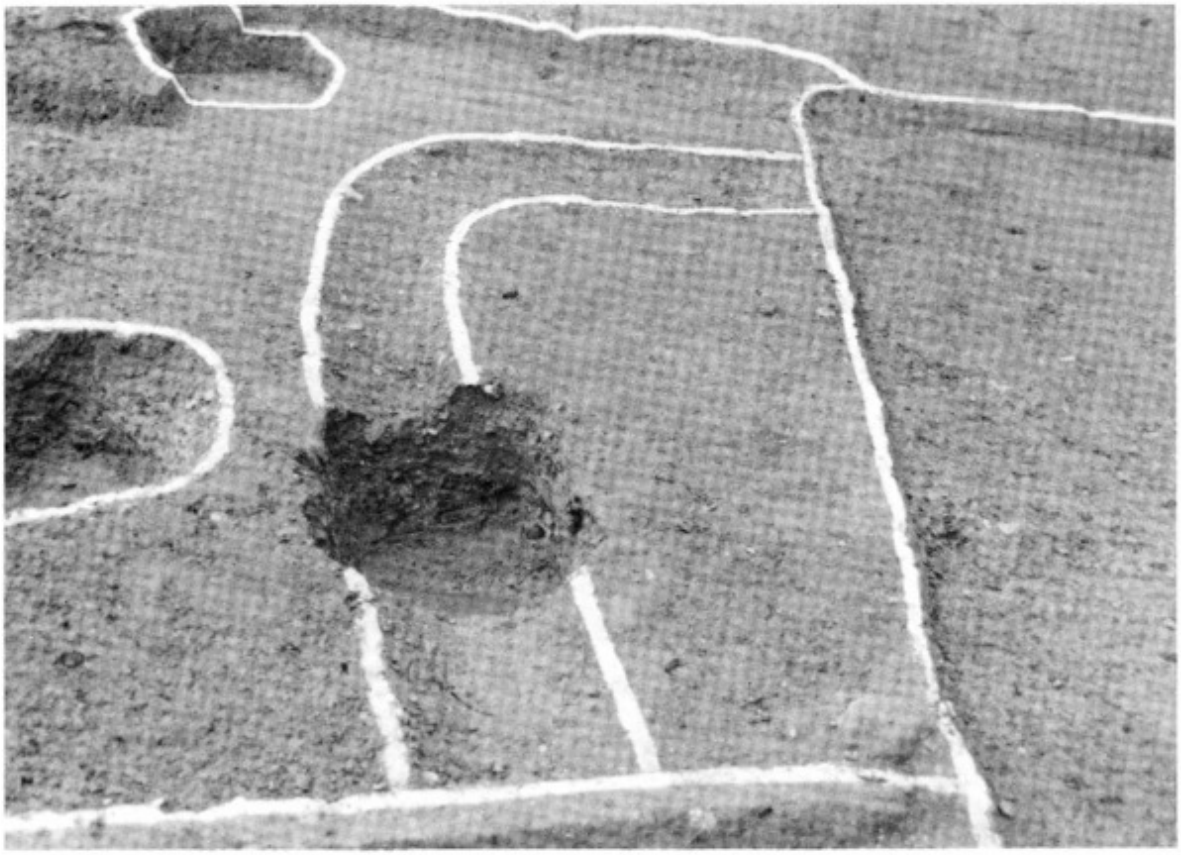
上　北側全景
下　南側全景

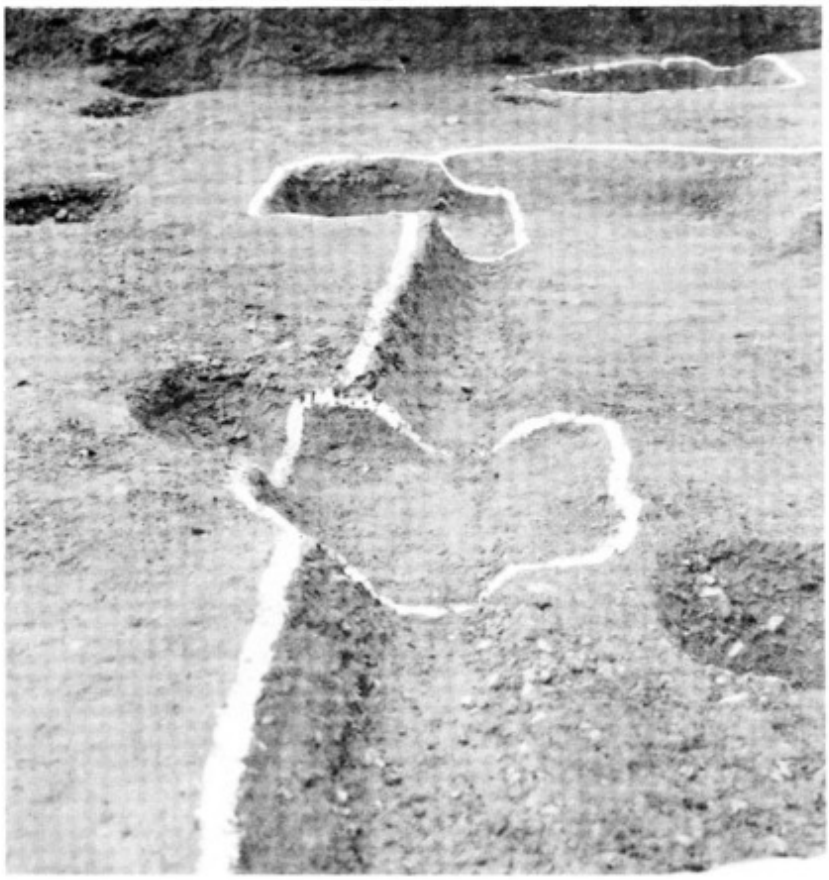


竪穴住居１（東から）



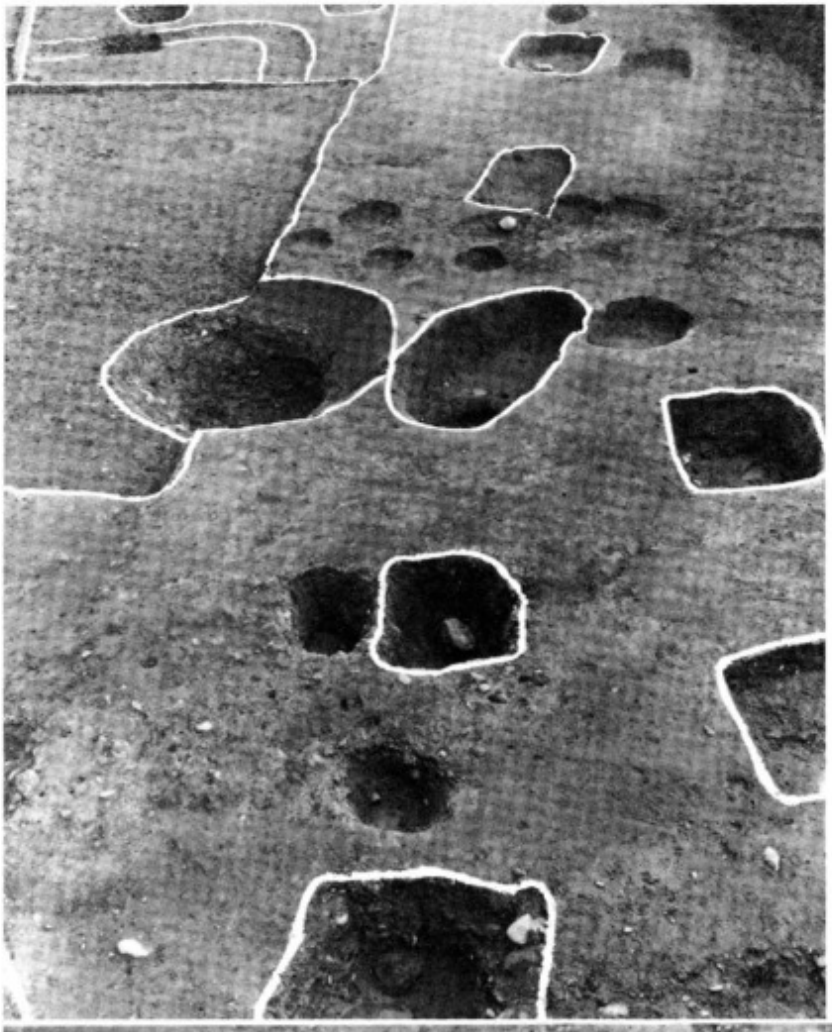
竪穴住居４（南から）



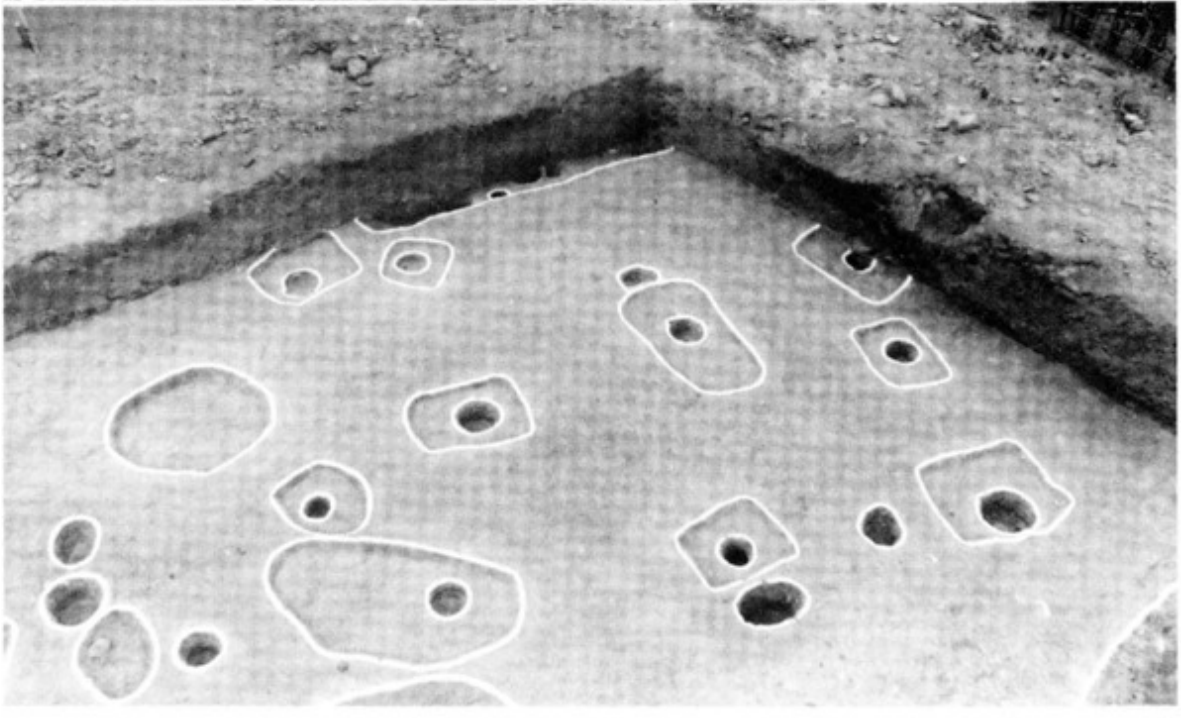


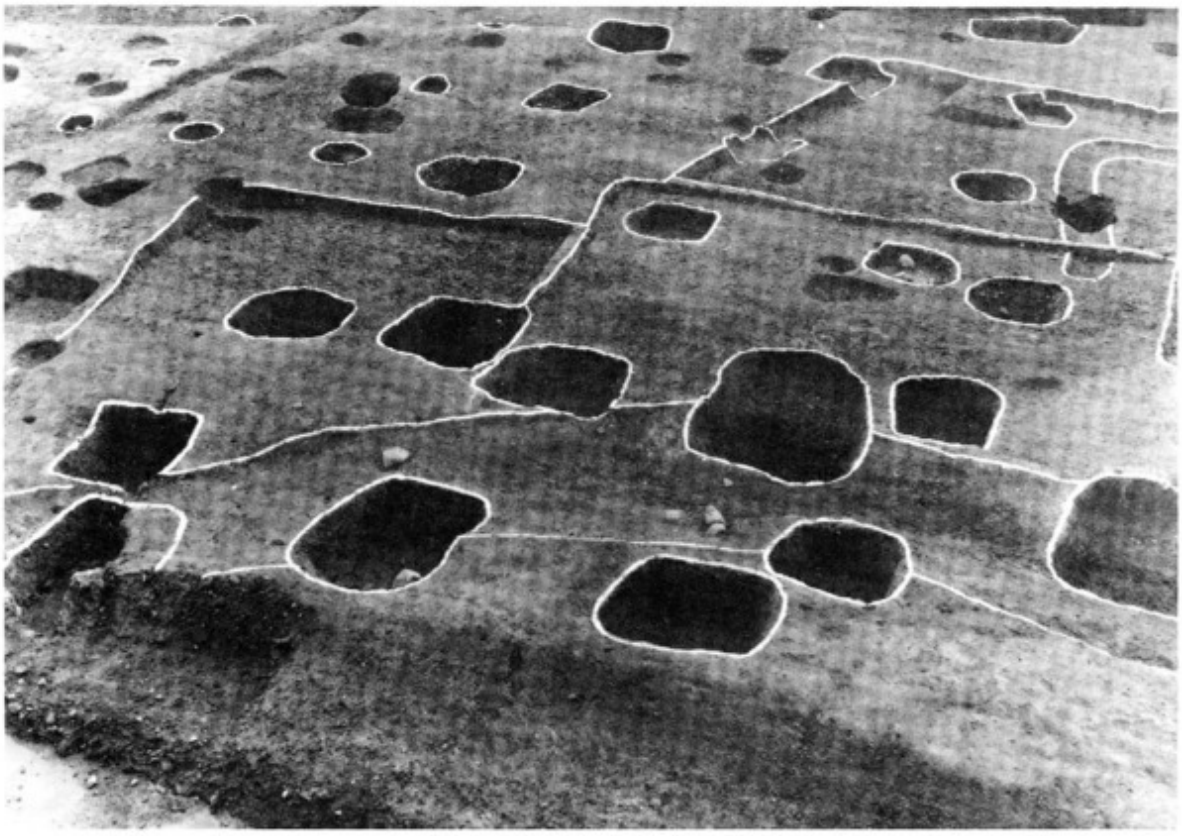
上　竪穴住居 6　周溝

下　竪穴住居　周溝

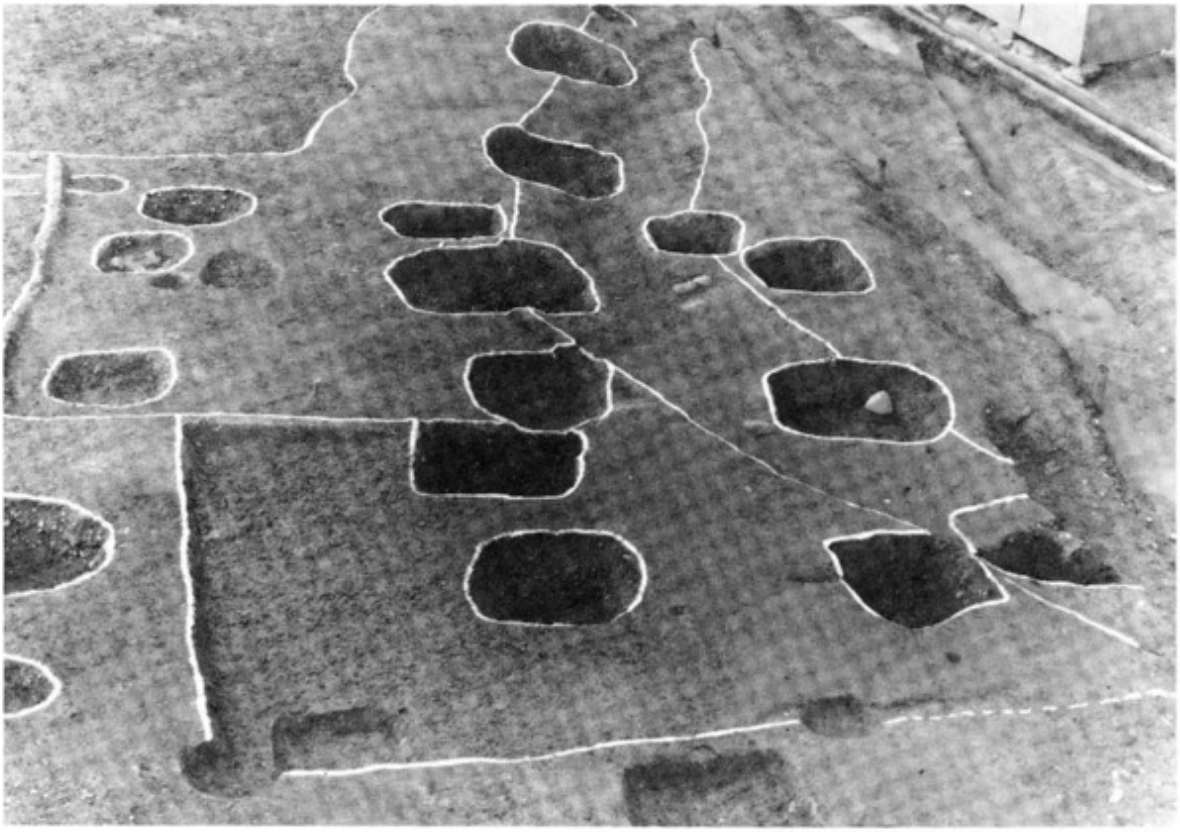


上　建物2
下　建物1

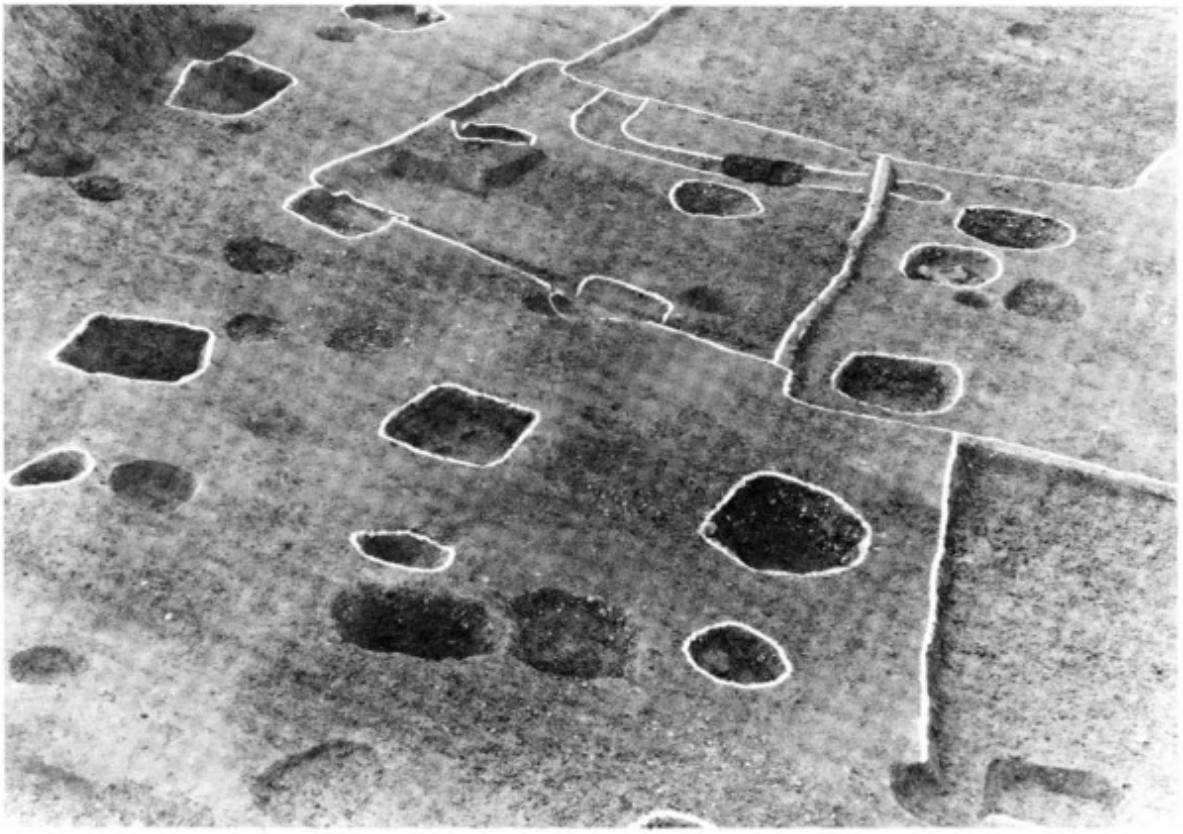




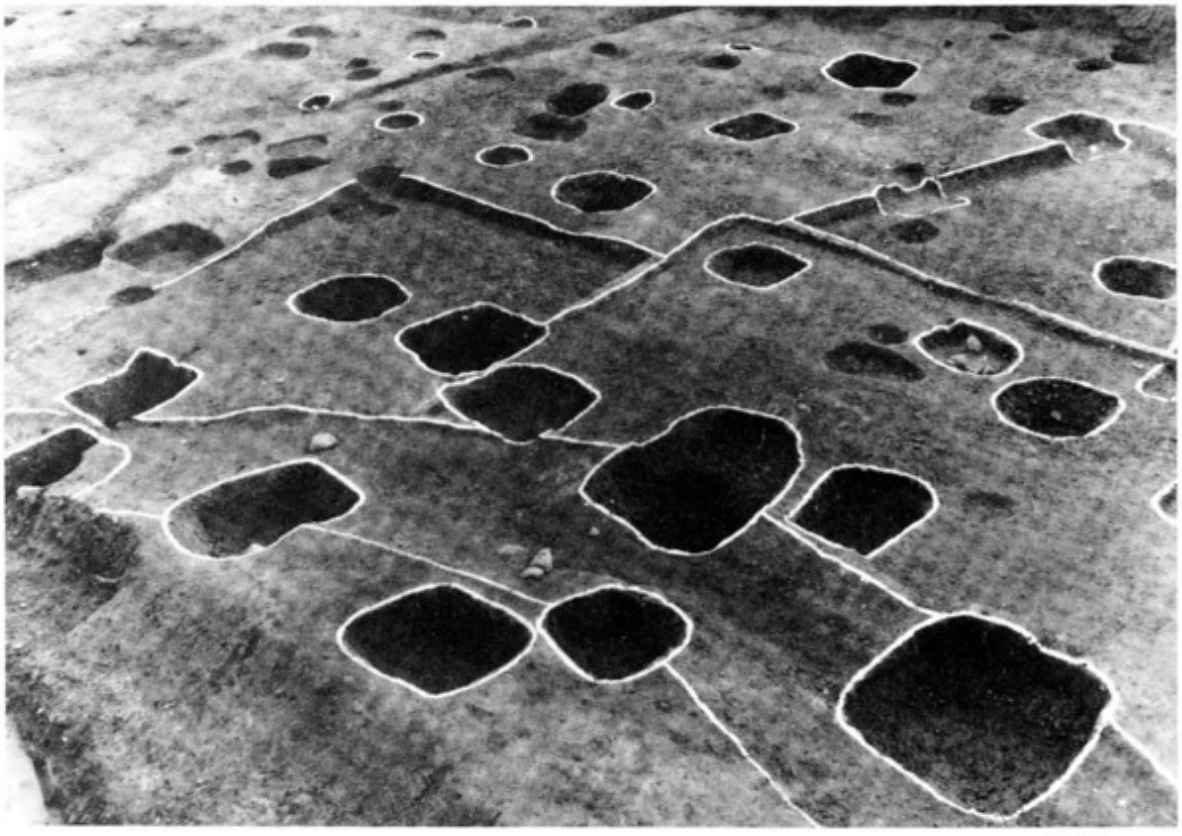
建物4



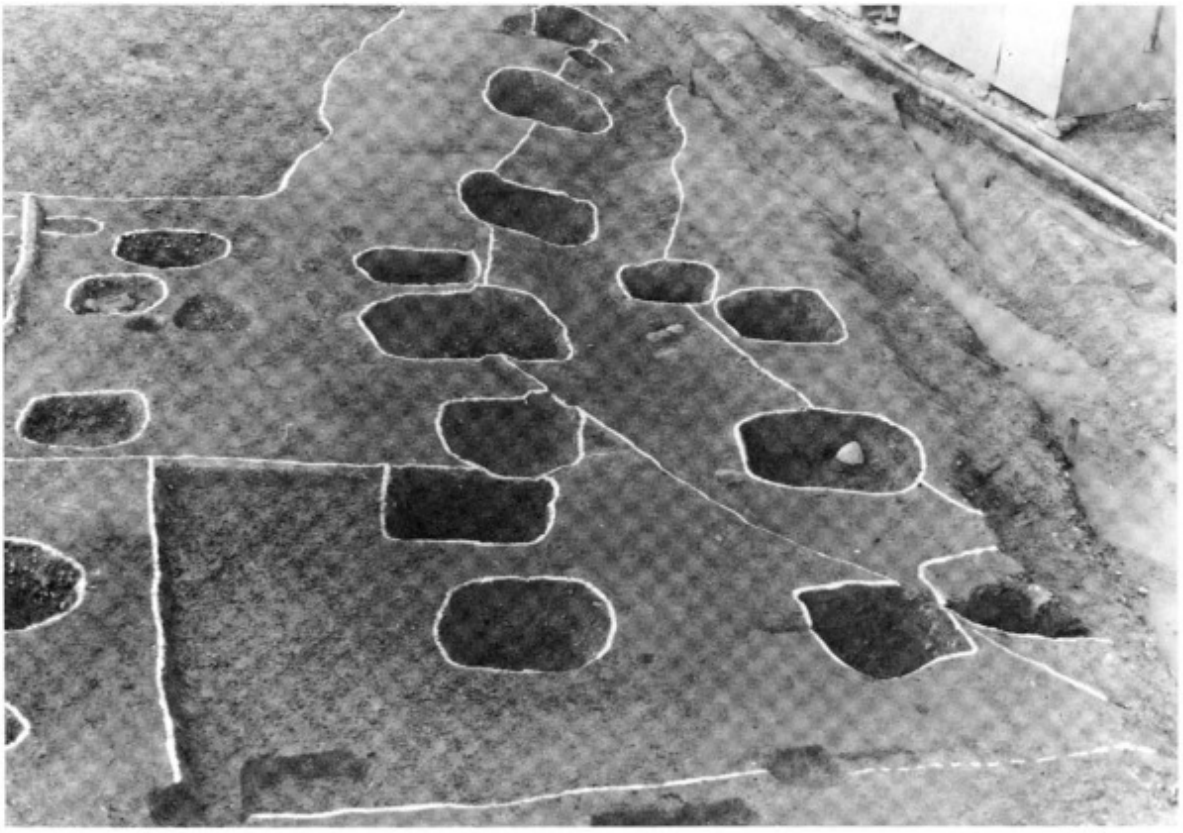
建物4



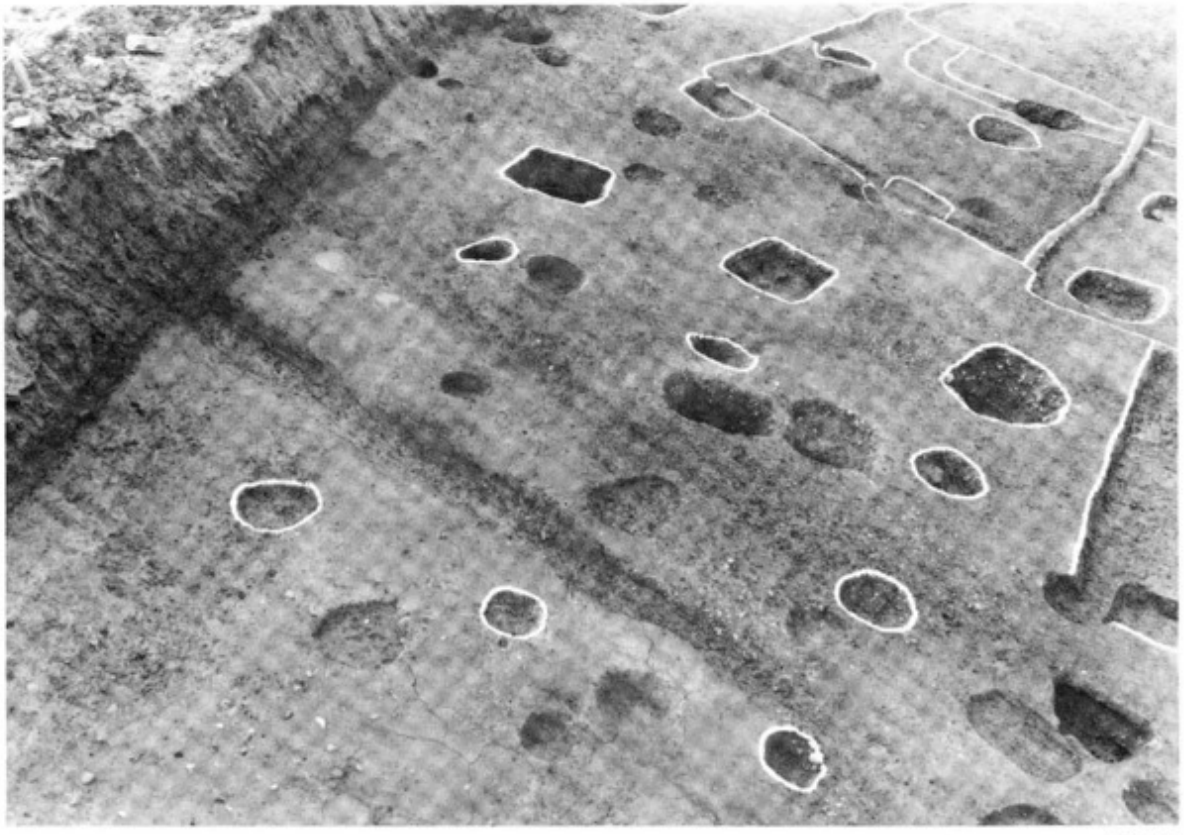
建物3



建物4・6

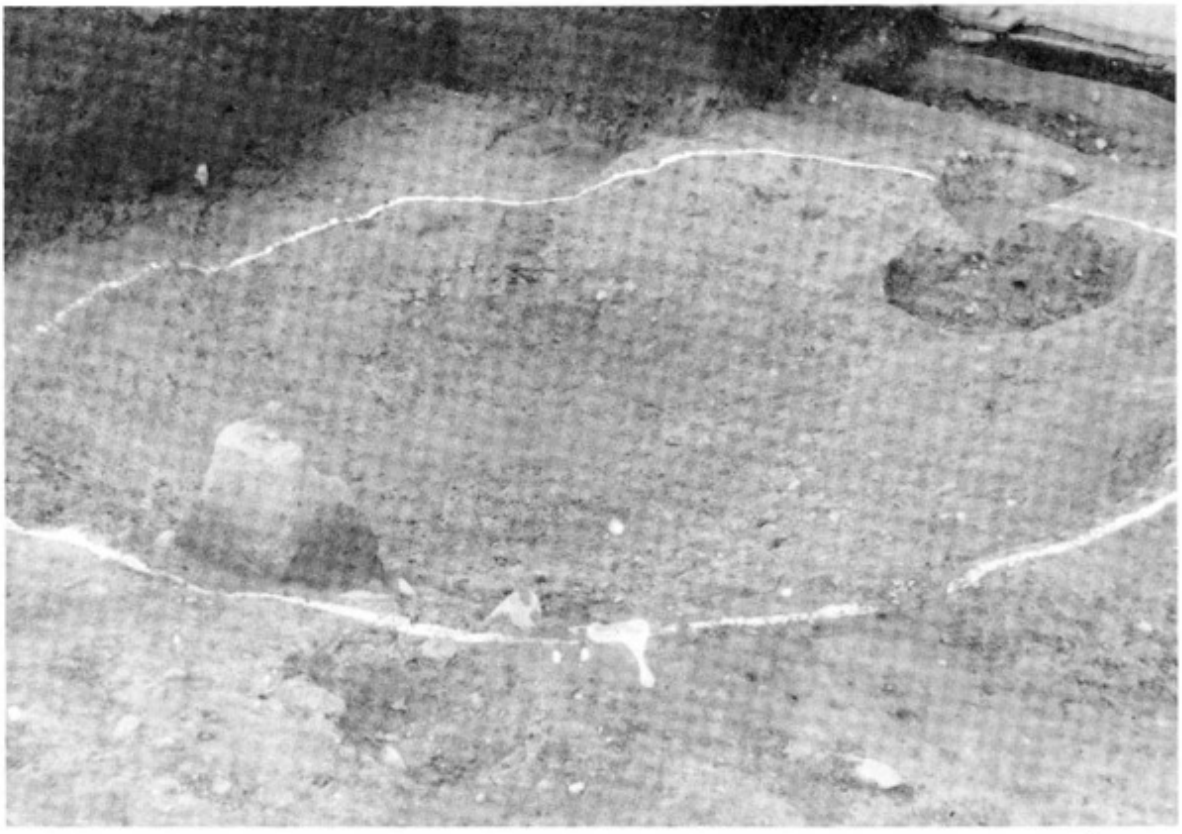


建物4・6

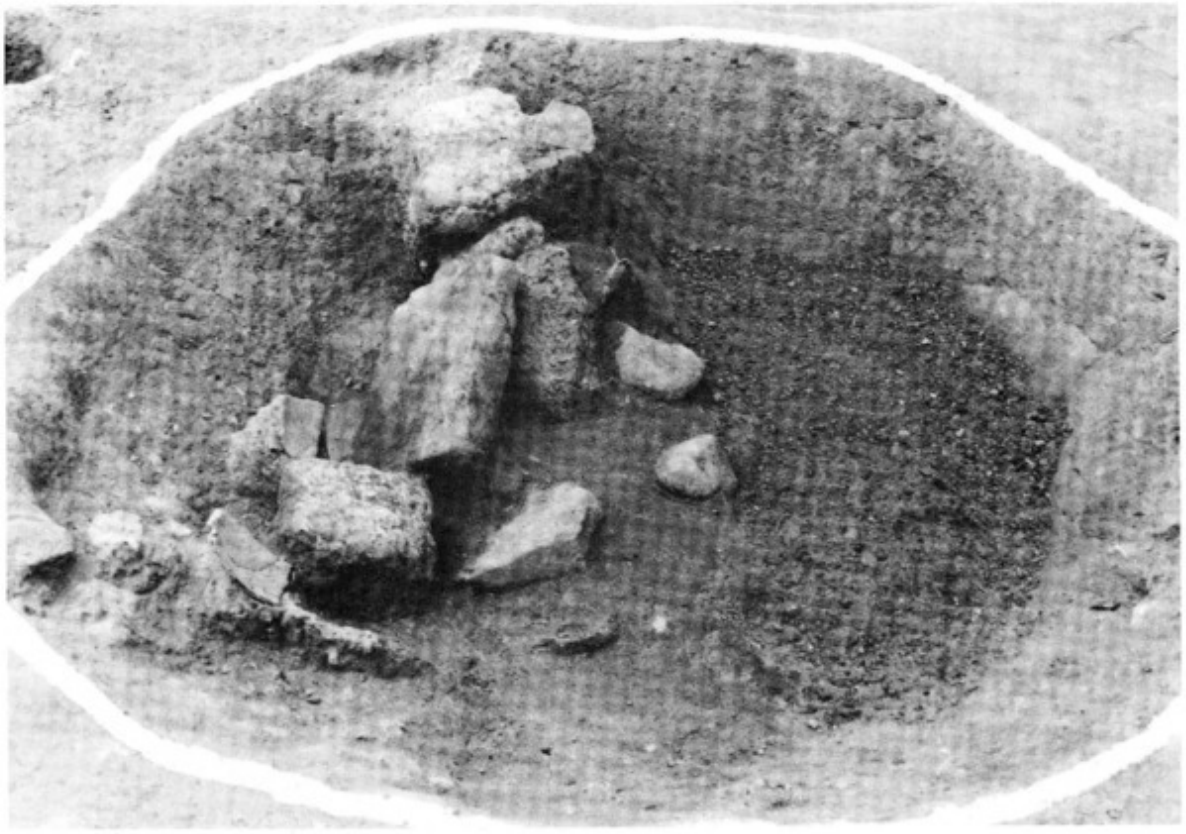


建物7

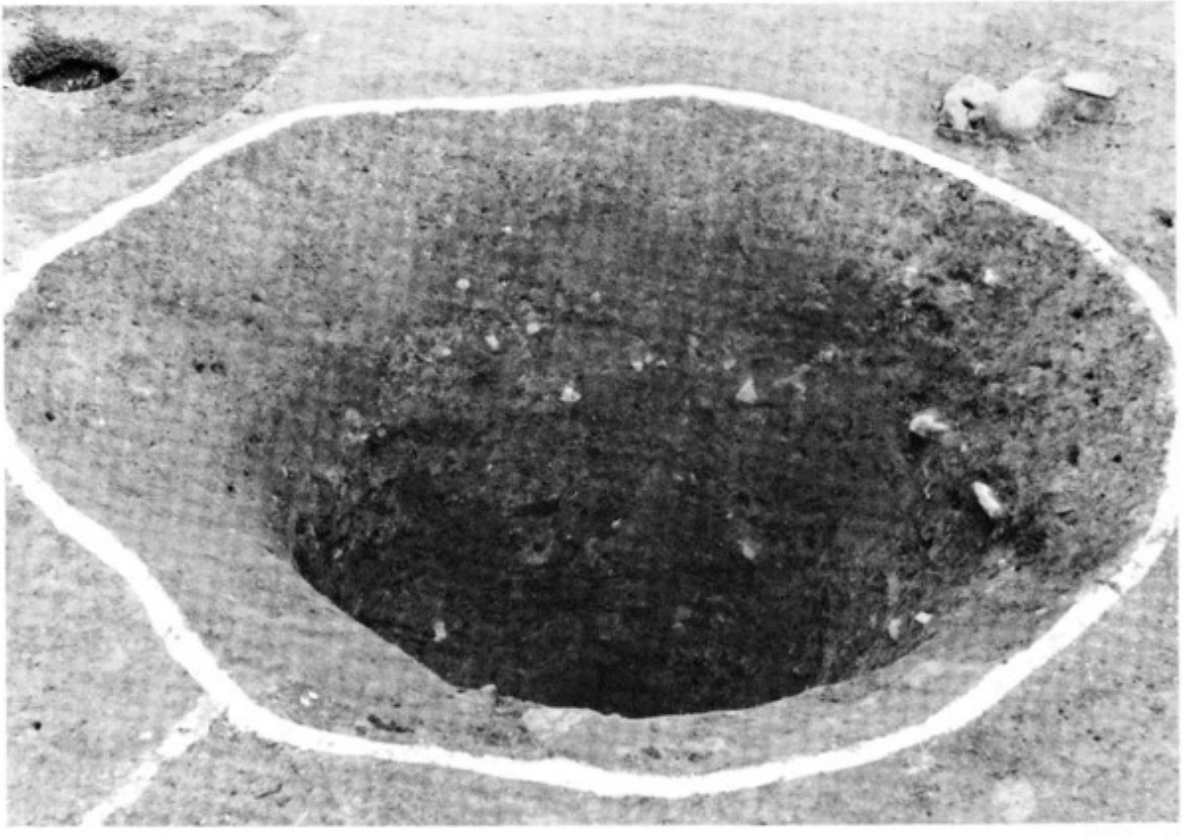
土壙－1　礫混入状況



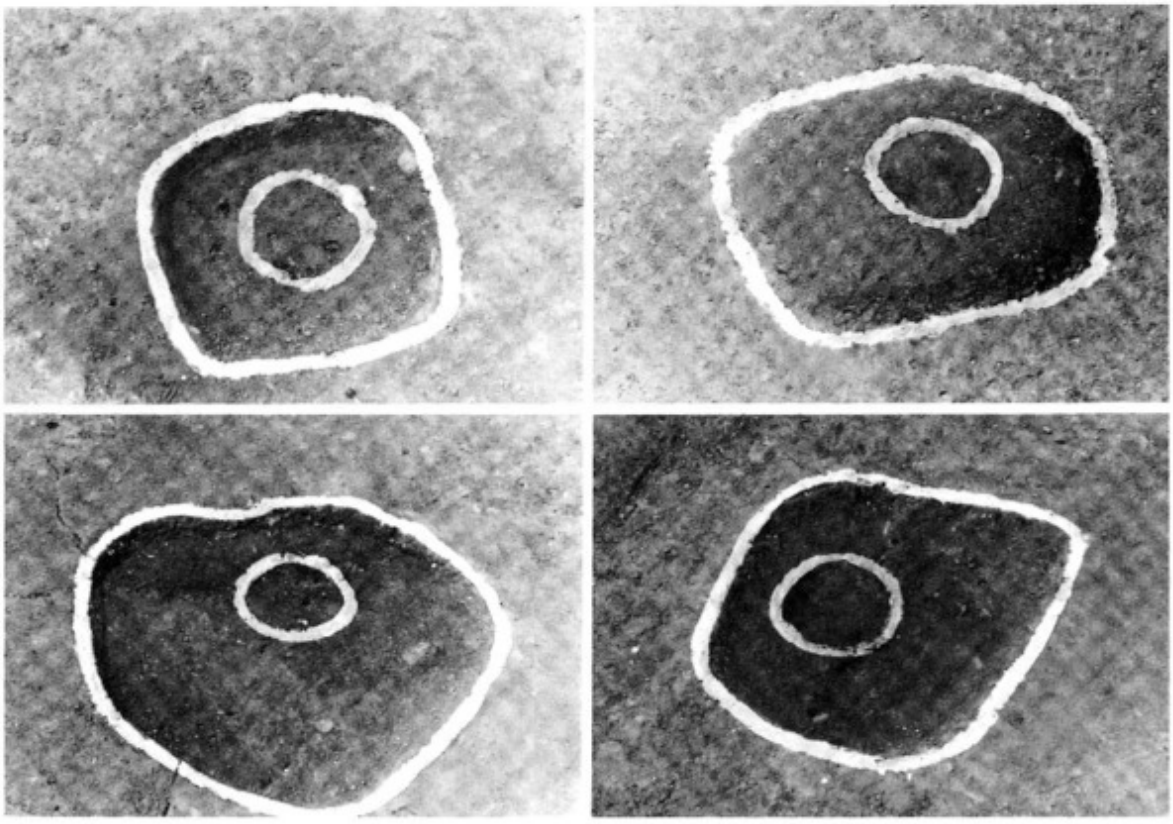
土壙－1



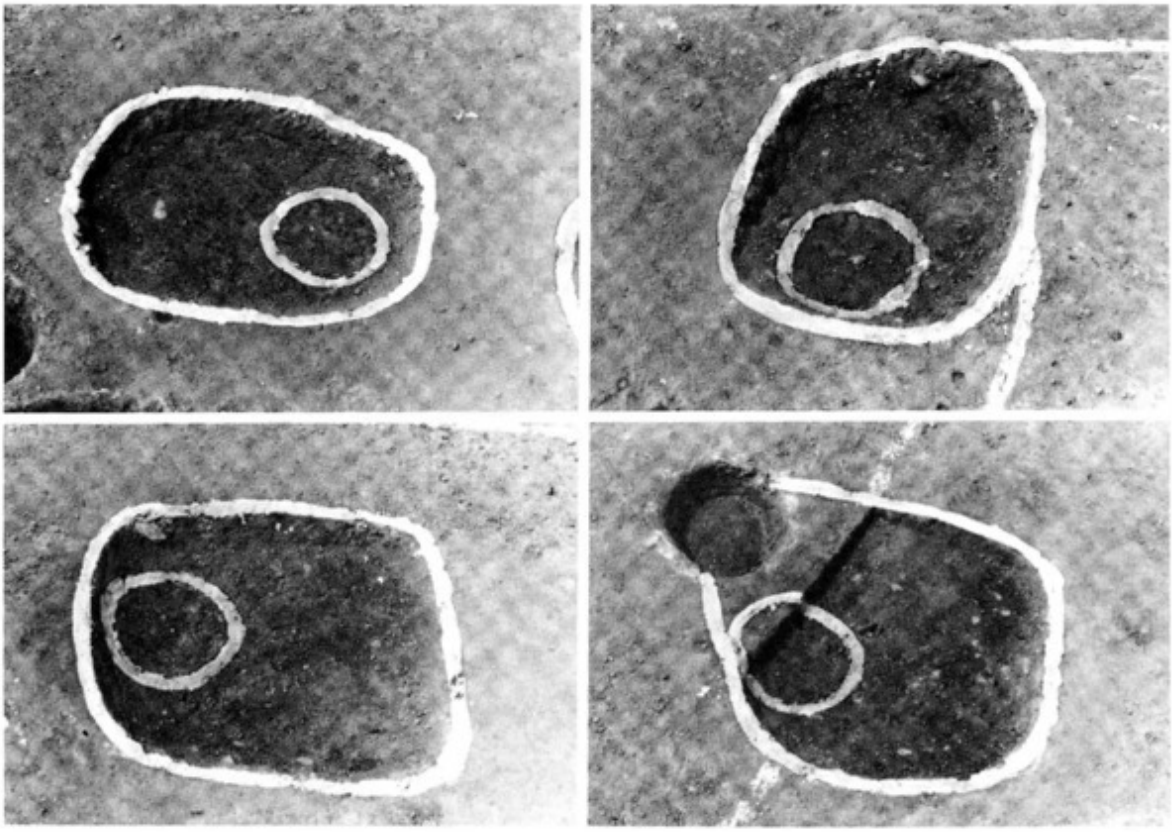
井戸－1　遺物出土状況



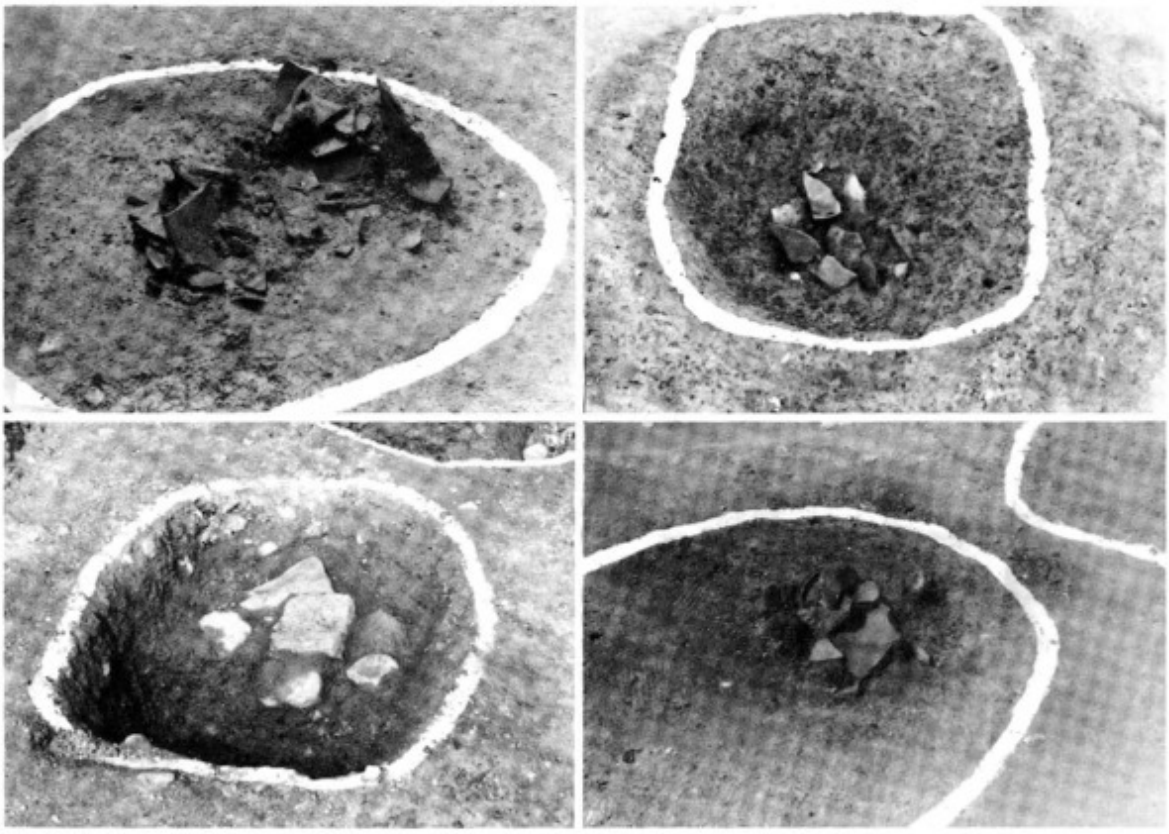
井戸－1



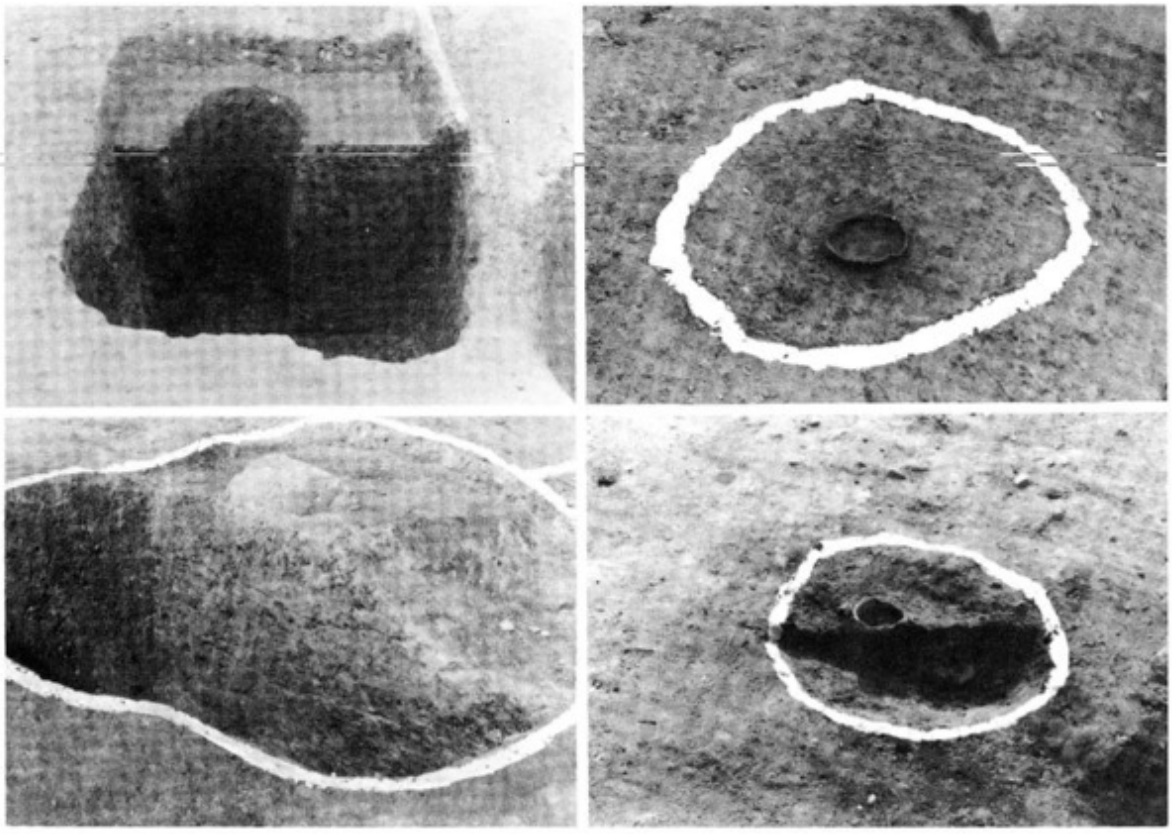
建物3　ピット



建物3　ピット



遺物出土状況



各種ピット

図版二九　原山遺跡調査風景

調査風景

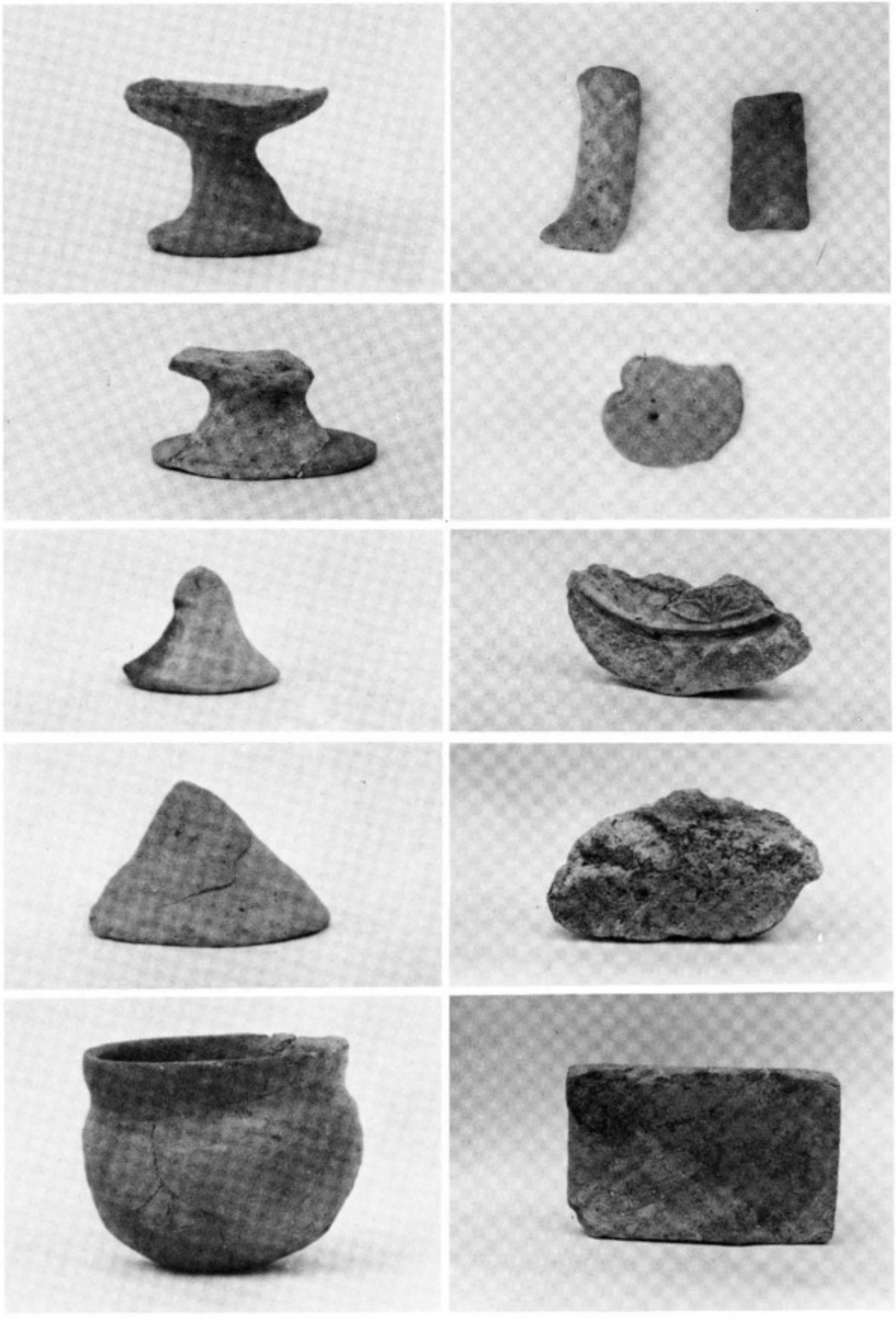
調査風景

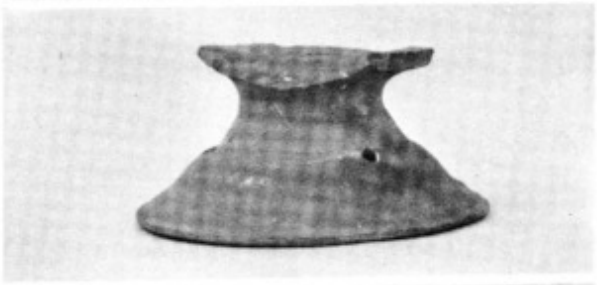
図版三十　原山遺跡現地説明会

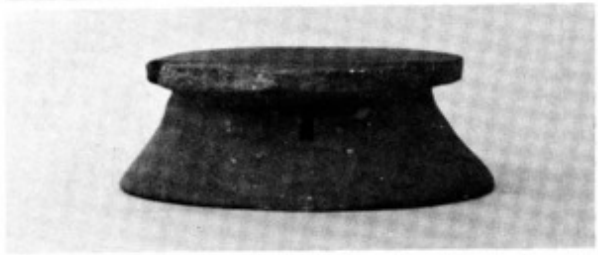
現地説明風景

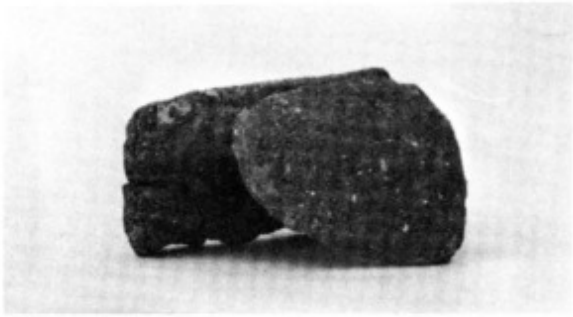
現地説明風景

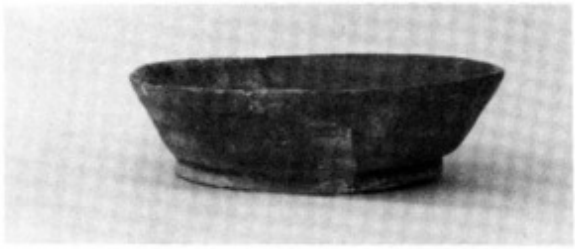
図版三一　原山遺跡出土遺物

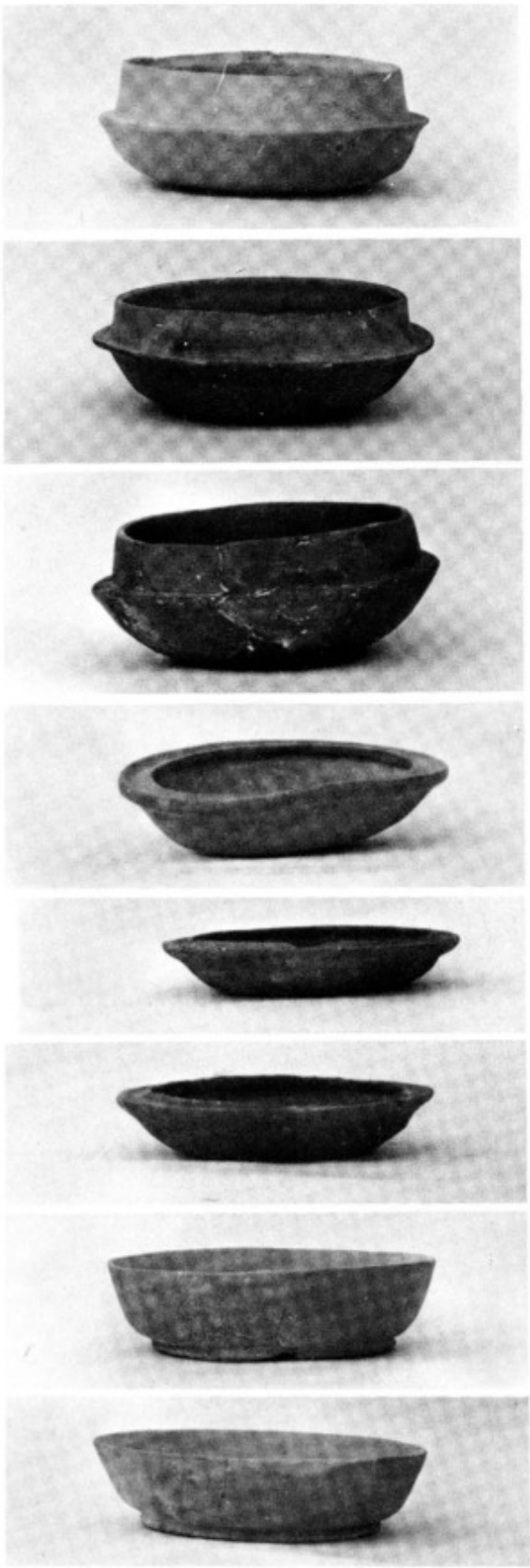




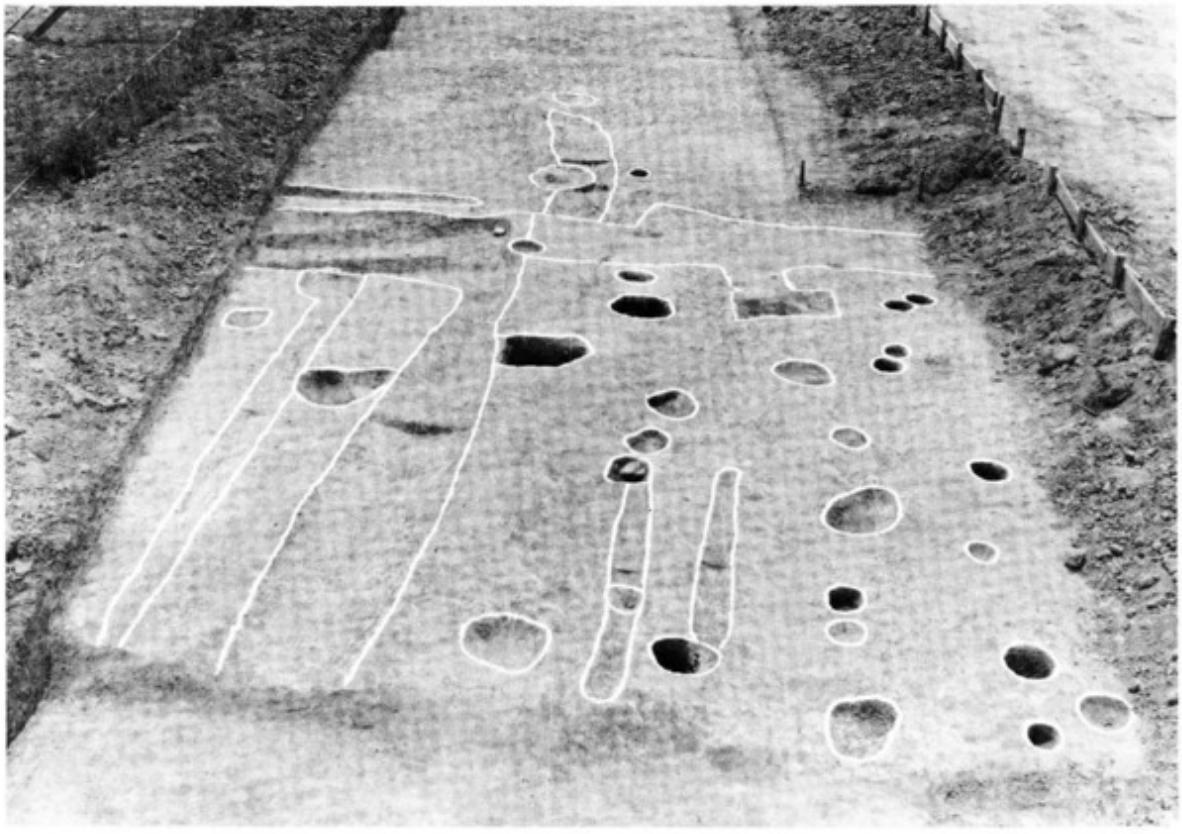




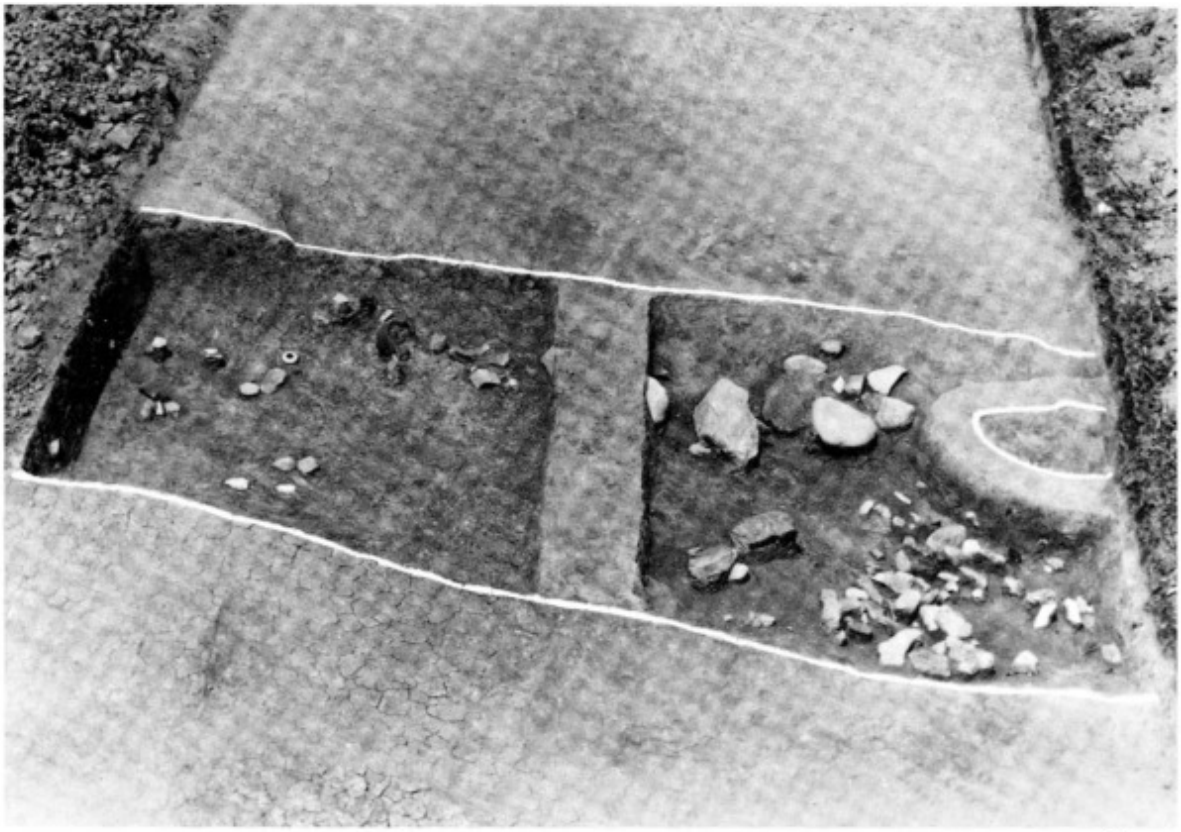




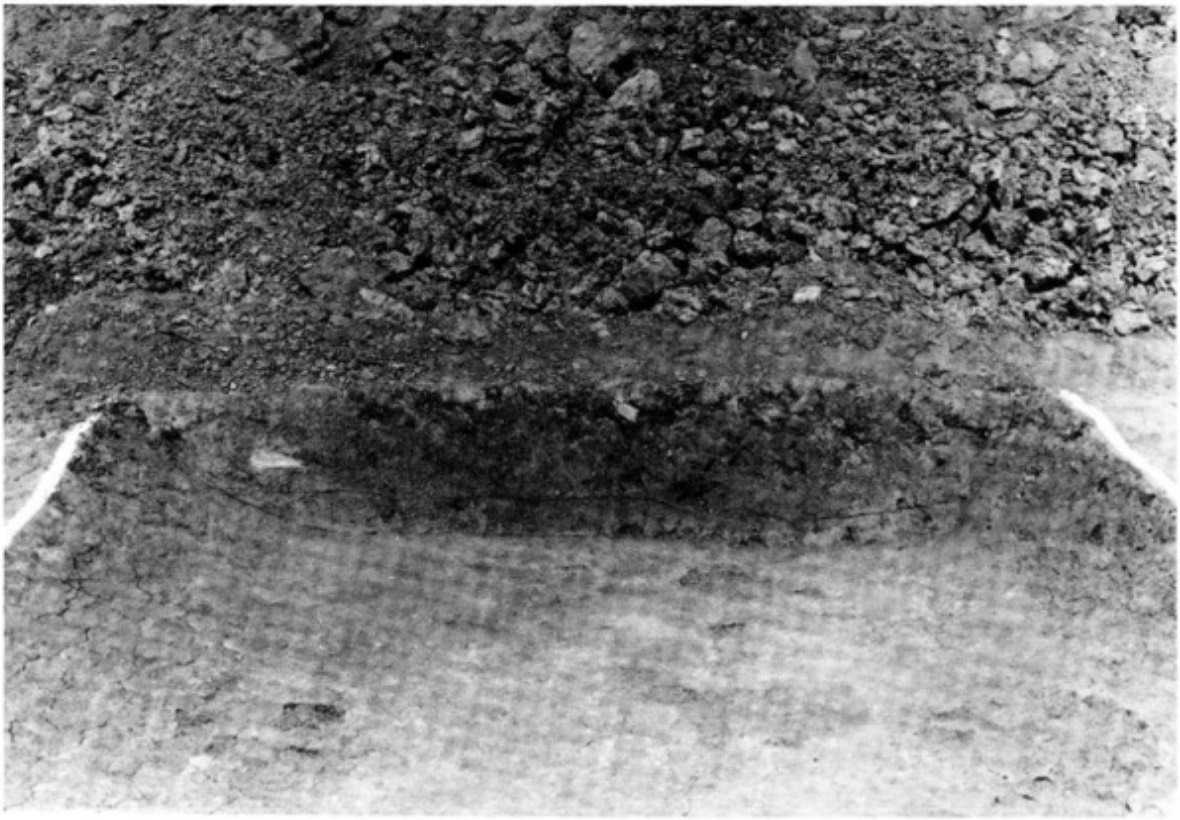
調査区から遠望　平尾山古墳群



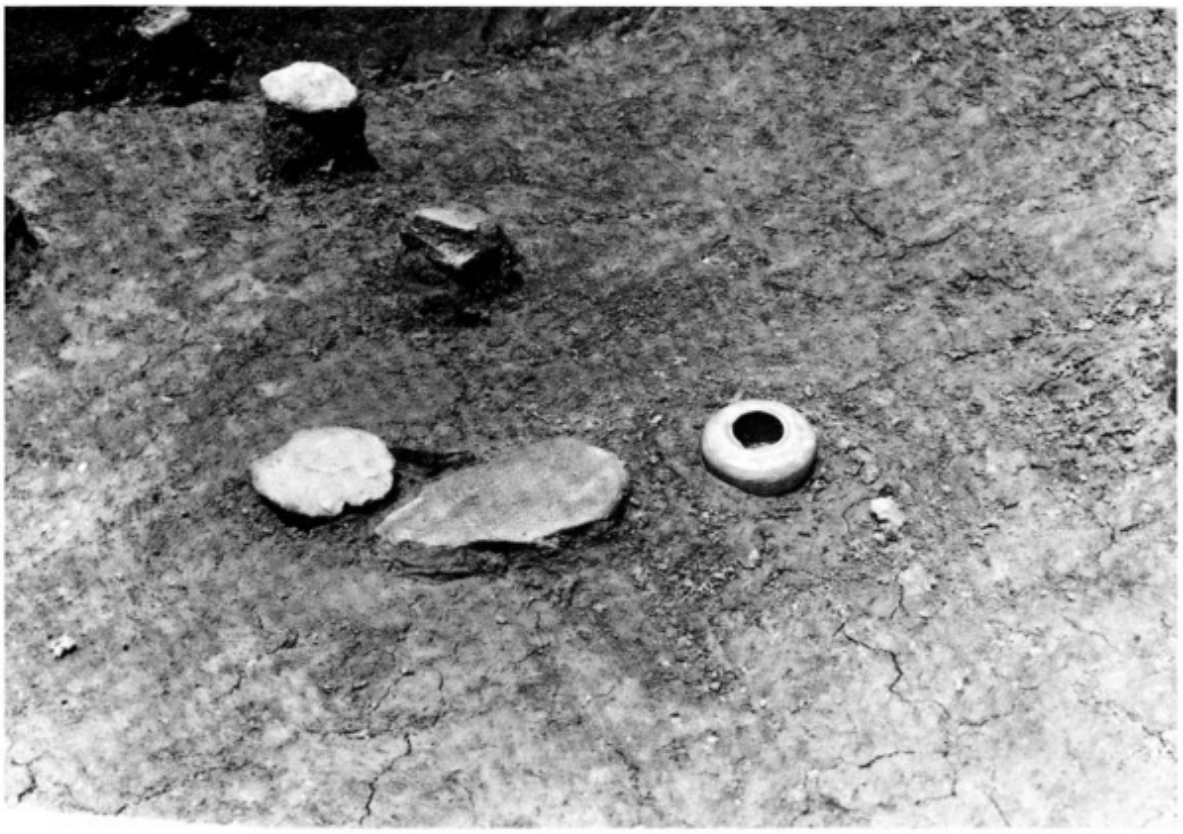
北側風景



溝－7

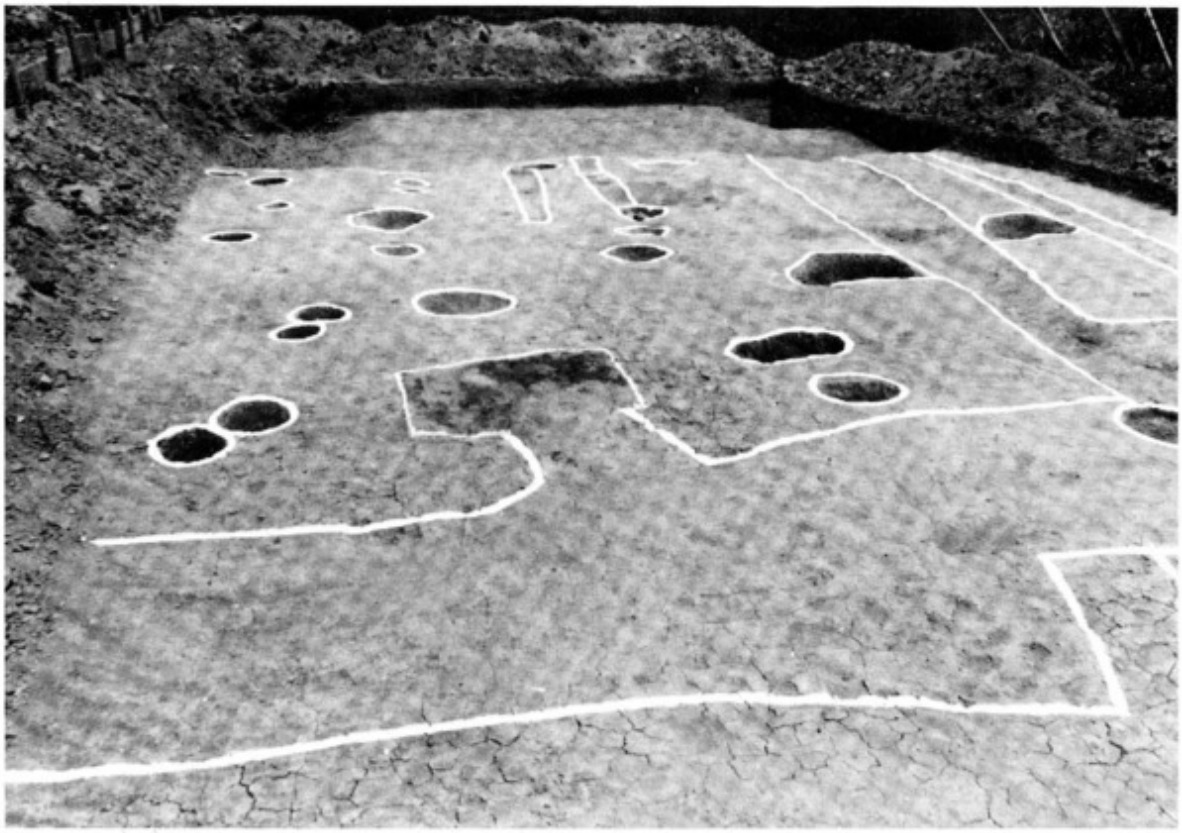


溝－7　断面

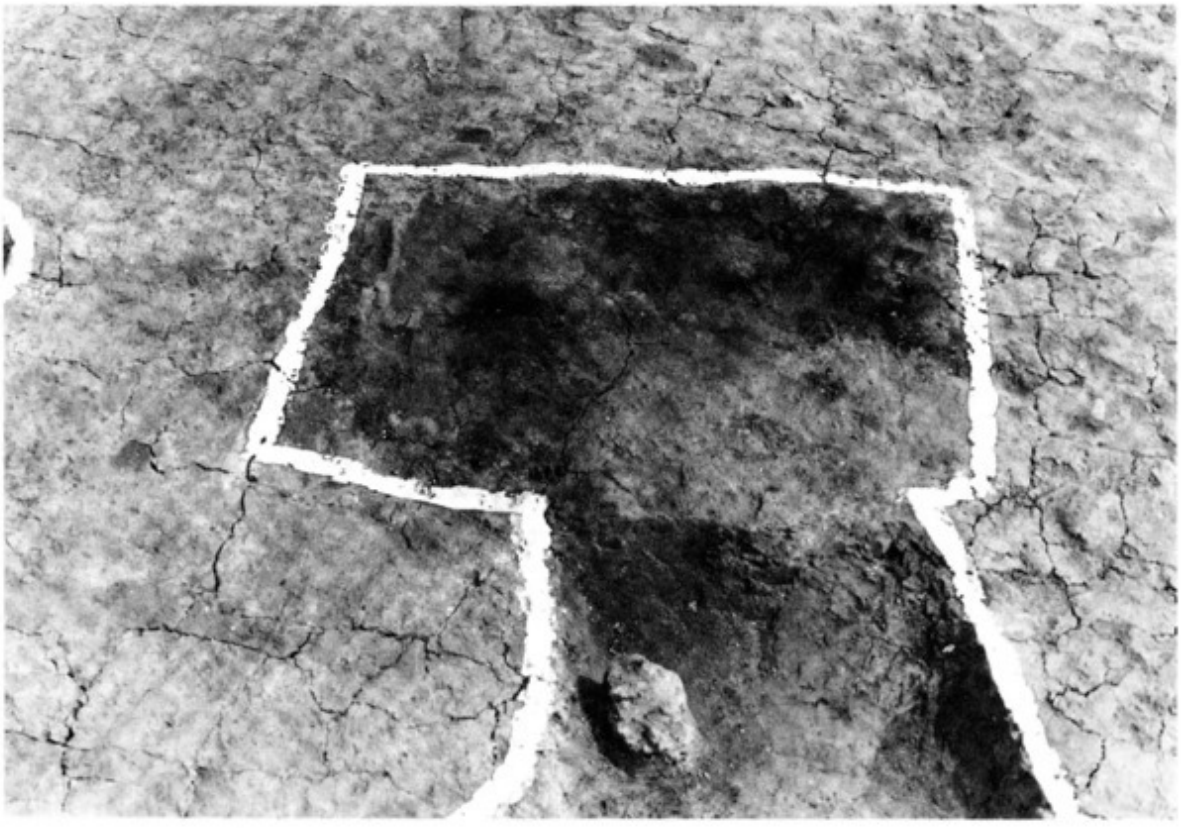


溝－7　遺物出土状況

溝－7　遺物出土状況

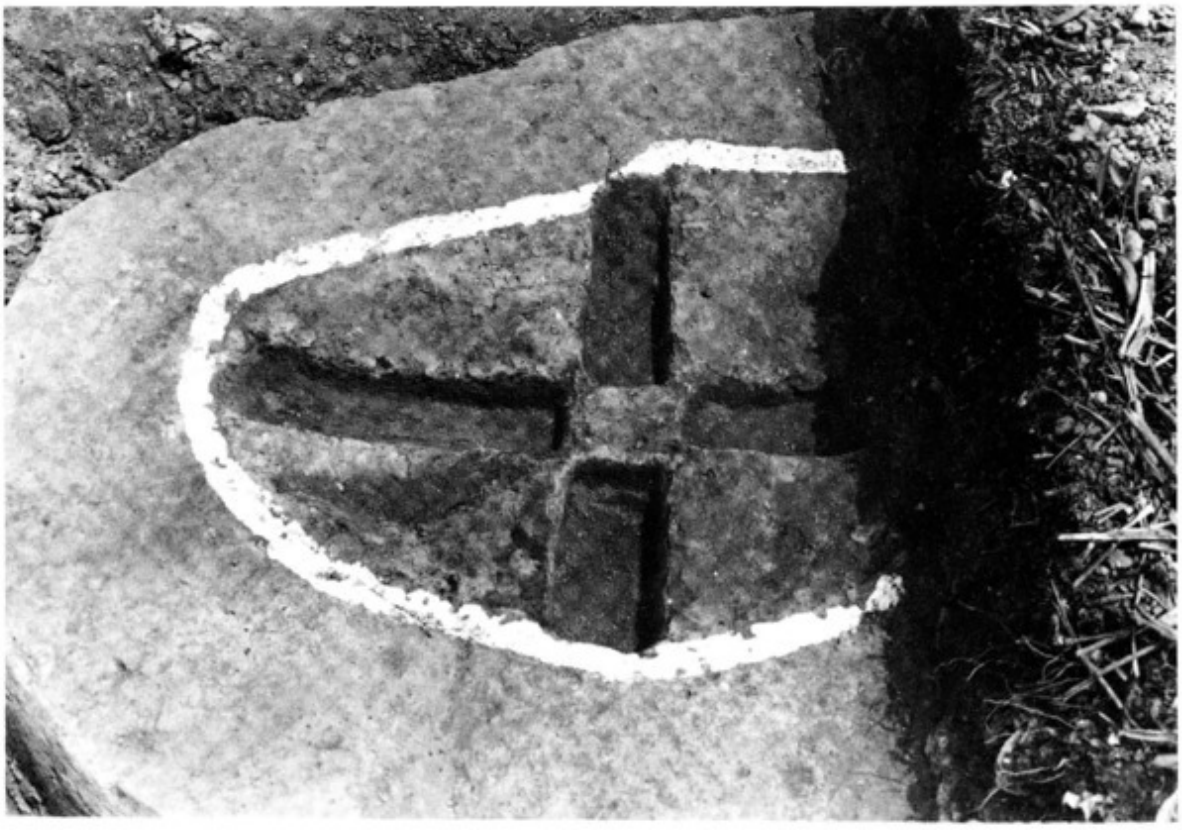


北側全景

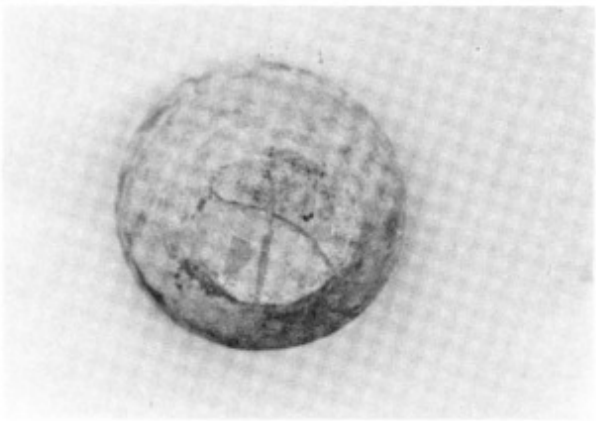


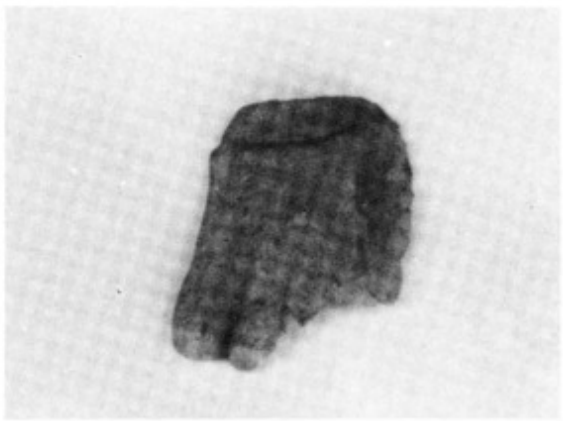
炉—1

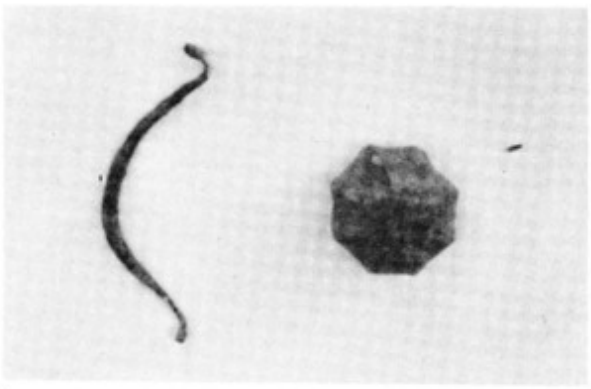
溝－7と炉－2

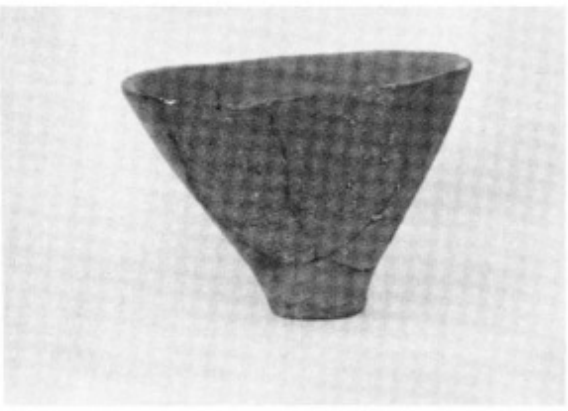


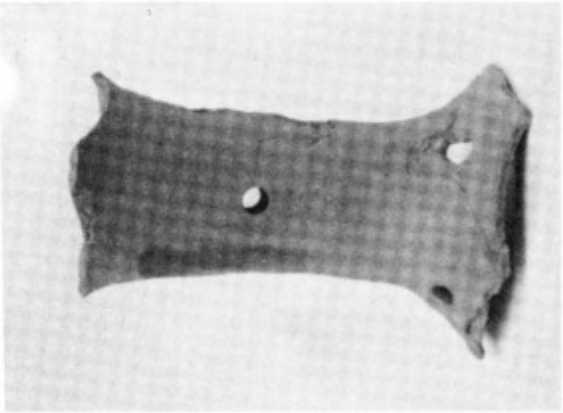
炉－2

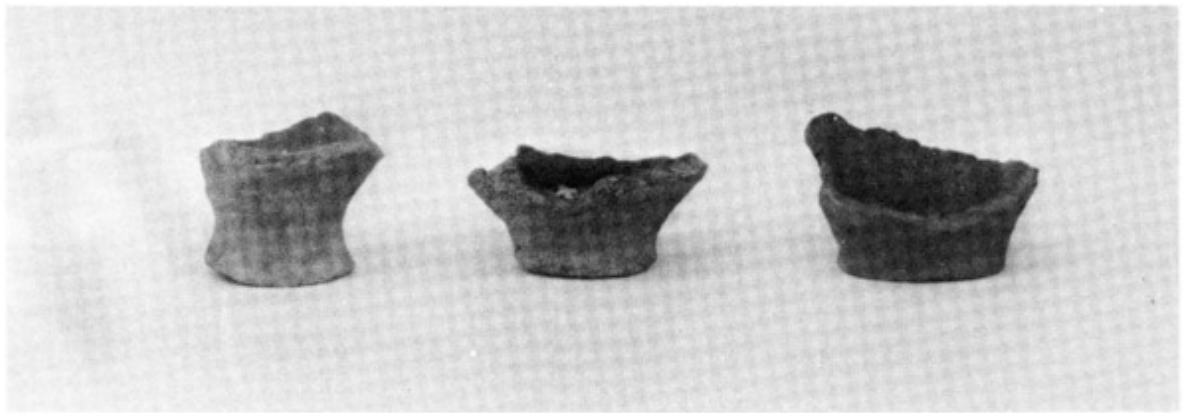


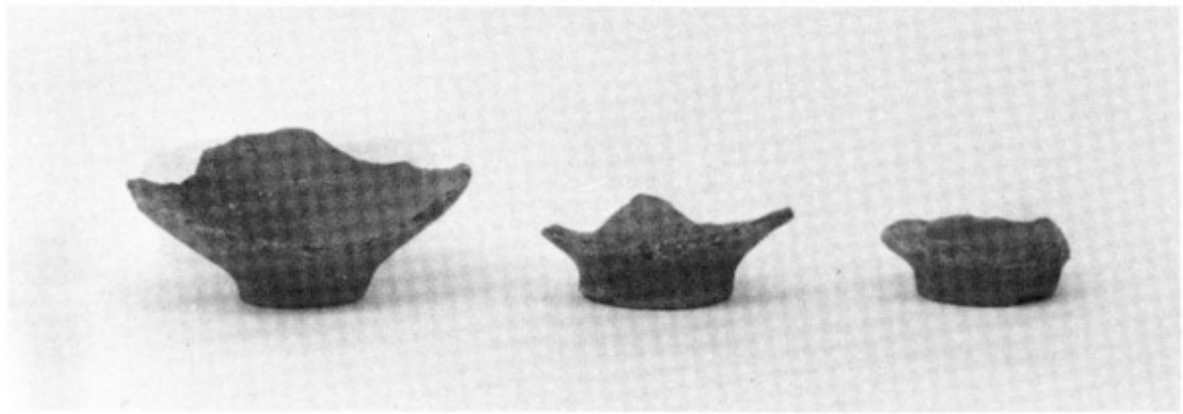


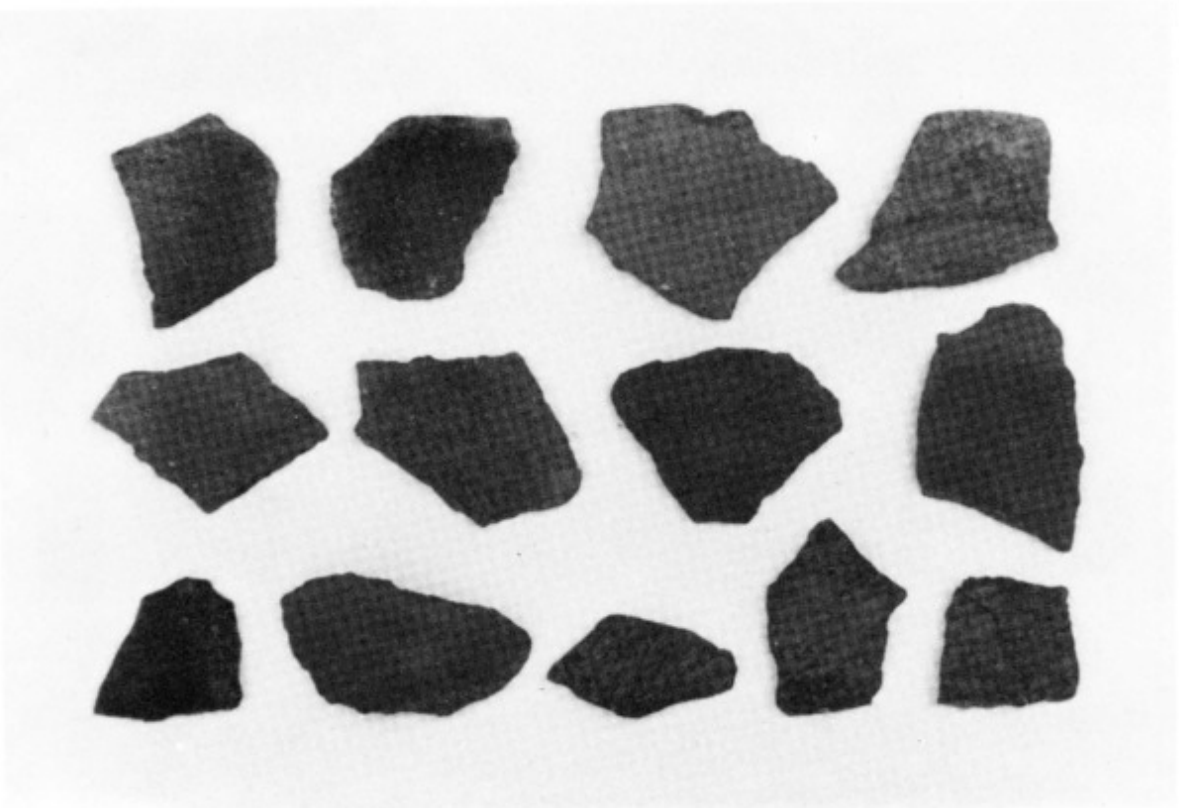












柏原市所在遺跡発掘調査概報

1984年度

編集発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 0729(72)1501 内716

発行年月日　1985年3月31日

印　　刷　株式会社 中島弘文堂